

〔公卿補任〕

和七年の條、前後略す、全文は下に收む。

〔大日本史〕

三百八十四、國郡司、越中欄

介石川國助弘仁九年十月見

少目錦部稻手丸弘仁九年十月見

主政名國飛鳥戶有成弘仁九年十月見

〔參考〕

〔公卿補任〕

國史大系本 參議從四位上和氣真綱五十本姓磐梨別、右京人也、

贈正三位民部卿清歷五男、母、延曆廿三二年五月十七日任內舍人年廿三、大同四年十、二二月十三日任治部少丞、六月廿九日中務少丞、弘仁二年六月一日播磨少掾、三年正月十二日轉大掾、四年正月日補藏人、中務丞兼播万大丞、五年正月十三日春宮少進、六年正月七日從五下、十二日轉大進、八年八月十六日刑部少甫、十二年閏正月廿五十、二日右少辨、八月十日左近少將、頭書云、辨官補任云、十一年任右少辨、同年月日遷官去辨者如何、十二年正月左少辨、四月一日右近少將、六月七日從五上、十四年四月一日兼內藏頭、十九日兼民部大輔、五月十三日

兼中務大輔、六月廿三日越中前守、九月廿八日兼修理大夫、天長元年正月十七日兼河內守、四年五月二日右左中辨、六月九日兼內匠頭、止辨五年正月七日從四下、閏三月九日兼攝津守、七年二月七日兼宮內大輔、八年二月二日兼刑部大重、十年二月六日兼伊與權守、八月八日木工頭、承和元年二月五日內藏頭、二年十二月廿四日右大辨、四年正月七日從四上、二月廿三日兼左近中將、辨如元、七年八月七日任參議、兼右大辨、承和七

淳和天皇

天長二年乙巳

紀元千四百八十五年

春宮亮藤原三成をして、越中守を兼ねしむ、

〔日本逸史〕

三十八

天長七年夏四月癸酉、中春宮亮從四位下藤原朝臣三成

卒、中三成弘仁十一年從五位下、俄任主殿頭、尋遷春宮亮、天長二年、叙正五位下、

兼越中守、七年、叙從四位下、

淳和天皇天長二年

淳和天皇長六年 七年

天長六年己酉

紀元千四百八十九年

七月 朔 庚寅

十九日、丙越中の俘囚吉彌侯部江岐麻呂、從八位上に叙す、

〔日本逸史〕七十 丙申、九十越中國俘囚勳八等吉彌侯部江岐麻呂、叙從八位上、

江岐麻呂口染皇化志同良民、教諭等倫、興行禮義、仍叙文位、俾申勳勵、

天長七年庚戌

紀元千四百九十年

十一月 朔 辛未

春宮亮藤原良房をして、越中權守を兼ねしむ、

〔公卿補任〕

國史大系本 參議從四位藤原良房、三十贈太政大臣冬嗣二男母尙

侍贈正一位美都子、三守公姉也、從五位上阿波守眞作女、延曆廿二甲申生、天長

三年正月補藏人、年廿三二月任中判事、五年正月七日叙爵、從五位下、閏三月九

日任大學頭、七年五月日春宮亮、十一月任越中權守、无守、閏十二月加賀守、十年二

月日左近權少將兼守、深草朝天長十年二月補藏人頭、從五位下、守左近權少將兼

加賀守、三月六日從五位上、御即位日、八月十四日正五位下、十一月十八日左近權ノ兼

无中將加賀守、同月十八日從四位下、先帝遊覽右大臣夏野雙岡家、恩賞三人之内

也、十一年七月九日任參議、元藏人頭、左近權中將如元、以上天長

〔大日本史〕

三百八十四 國郡司、越中關

介藤原越雄、天長四年十一月見

掾小治田福雄、天長四年十一月見

少目武生二腹、天長四年十一月見

少目朝原四上、天長四年十一月見

介御野清庭、天長七年八月見

少目大神廣行、天長七年八月見

副擬少領名、關飛鳥戶浦九、天長四年十一月見

擬主政名、關利波宮成、天長四年十一月見

擬主帳名、關秦人部古綿、天長四年十一月見

擬大領名、關利波甥九、天長七年八月見

轉擬少領名、關秦人部益繼、天長七年八月見

淳和天皇天長七年

仁明天皇

承和元年甲寅 紀元千四百九十四年

正月 壬子朔

十二日、癸亥石川越知人、越中介に任す、

〔續日本後紀〕三 癸亥、二十從五位下石川朝臣越知人為越中介、

〔參考〕

〔大日本史〕三 百八十四 國郡司、越中欄

介石川越知人 承和元年正月任

承和三年丙辰 紀元千四百九十六年

閏五月 己巳朔

一日、己巳吉田高世、越中介に任す、

〔續日本後紀〕五 是日、日〇一以越中介從五位下石川朝臣越知人為大膳亮外從

五位下吉田宿禰高世、為越中介、

承和四年丁巳 紀元千四百九十七年

六月 壬辰朔

二十八日、己未越中介吉田高世等、與世朝臣の姓を賜ふ、

〔續日本後紀〕六 己未、日〇二十右京人左京亮從五位上吉田宿禰書主、越中介從

五位下同姓高世等、賜姓與世朝臣、府祖鹽乘津、大倭人也、後順國命、往居三己汝地、

其地隸百濟鹽乘津八世孫、達率吉大尙、其弟少尙等、有懷土心、相尋來朝、世傳醫術、

兼通文藝、子孫家奈良京田村里、仍元賜姓吉田連、

十二月 庚寅朔

四日、癸巳越中少目錦部人勝、蕃良宿禰の姓を賜ふ、

〔續日本後紀〕六 癸巳、日〇四近江國人左兵衛權少志、志賀史常繼左衛門少志、錦

部村主藥麻呂、越中少目錦部忌寸人勝、太政官史生大友村主弟繼等、賜姓蕃良宿

禰、常繼之先、後漢獻帝苗裔也、

○國史大系本續日本後紀頭書に曰く、蕃原作審據伴本改、諸本作蕃、恐非、と

〔參考〕

〔大日本史〕三 百八十四 國郡司、越中欄

少目春良人勝 承和四年十二月見

仁明天皇承和四年

仁明天皇承和五年 六年

承和五年戊午 紀元千四百九十八年

九月 丙辰朔

二十九日、甲申越中等の諸國灰の如きもの雨る、累日止まず、

〔續日本後紀〕七 甲申、九日二十從七月至今月、河内、參河、遠江、駿河、伊豆、甲斐、武藏

上總、美濃、飛驒、信濃、越前、加賀、越中、播磨、紀伊等十六國、一一相續言、有物如灰、從天而雨、累日不止、但雖似恠異、無有損害、今茲畿內道、俱是豐稔、五穀價賤、老農名此物米華云、

十一月 乙卯朔

二十日、甲戌侍從正行王をして、越中守を兼ねしむ、

〔續日本後紀〕七 甲戌、十日二十侍從從四位下正行王、爲兼越中守、

承和六年己未 紀元千四百九十九年

六月 庚戌朔

二十八日、丙辰慶雲、新川郡に見はる、

〔續日本後紀〕八 十二月丙辰、八日太政官左大臣正二位臣藤原朝臣緒嗣、略中

等奏言、臣聞、惟天玄默、匪德不動、惟神著明、有誠必感、故人君孝治、吳穹不能愛其靈

呪、至德潛通、岳瀆以之効其禎祥、伏惟、皇帝陛下、洵齊侔德、允恭配美、纂洪基於累聖、弘前烈於重光、浹宇洽和、環瀛樂道、凡厥群生、孰不霑仁、伏見、參河國守從五位下橘朝臣本繼等奏、稱去年十一月三日、五色雲見、寶飯郡形原鄉、又越中國介從五位下與世朝臣高世等奏、稱去六月廿八日、慶雲見、新川郡若佐野村、並皆彩色奇麗、形象非常、臣等謹檢、孫子瑞應圖曰、慶雲、太平之應也、禮斗威儀曰、政和平則慶雲至、又孝經、按神契曰、德至山陵、則慶雲出、普閱藝籍、緇尋靈牒、兩國上奏、事叶古典、夫自非道格區宇、仁覃海隅、何亦降斯玄符、錫彼景福、臣等幸屬生涯、榮叨簪紱、未見於今日、遇未遇於茲晨、不任抃躍之至、謹拜表陳賀以聞、勅、上靈施呪、允歸神功、立鑒降休、必佇茂烈、是以德佩、就日、猶揚克讓之謙、光化揮仁、風逾發靡記之摠、損朕祗承、不緒嗣守宗祧、風薄以想、邇熙馭朽、以求至道、而誠愆經遠、明謝動天、何以致景雲之禎祥、當槐棘之奏賀、若嘉穀栖畝、種種亘原、雖匪郁郁之兆、烟而朕之往寧也、古人云、乎見祥增戒、則休徵應機至也、人負忠誠、以輔不逮、重賀之事、都所不牟

承和七年庚申 紀元千五百元年

正月 戊寅朔

三十日、丁未長岑秀名、越中介に任す、

仁明天皇承和六年 七年

〔續日本後紀〕九 丁未、^{三〇}從五位下長岑宿禰秀名爲越中介。

〔參考〕

〔大日本史〕^{三〇八}國郡司、^{三四}越中欄

介長岑秀名^{承和七年正月任}、^八爲越中介。

九月^朔癸酉

二十九日、^辛從四位下高瀨神・二上神、並に從四位上を授く、

〔續日本後紀〕九 辛丑、^〇二十奉授越中國礪波郡從四位下高瀨神射水郡二上

神並從四位上、

○寶龜十一年十二月十四日條參看すべし、

承和八年辛酉 ^{紀元千五}百一年

正月^朔壬申

二十二日、^巳坂本鷹野、越中介に任す、

〔續日本後紀〕十 癸巳、^〇二十從五位下坂本朝臣鷹野爲越中介、

三月^朔壬申

二十九日、^庚越中等諸國の調貢の期は十一月に復す、

〔續日本後紀〕十 庚子、^〇二十民部省言、主計寮解僱貢調之期越前國元十一月

爲期依承和三年十一月廿三日符明年二月爲期、越中國元十一月爲期、依天長八

年十月十五日符明年二月爲期、^〇中作五箇國不據令條申改常期、逾致延、隨既虧

國用望請、復舊定期、依期令貢者、許之、

承和九年壬戌 ^{紀元千五}百二年

正月^朔丙申

十三日、^中參議朝野鹿取兼越中守に任し、尋て藤原岑人を越中權掾に任す、

〔續日本後紀〕十一 戊申、^〇三十參議正四位下朝野朝臣鹿取、爲兼越中守、

〔續日本後紀〕十二 民部大丞正六位上藤原朝臣岑人、爲越中權掾、

〔公卿補任〕參議從三位朝野鹿取、^六十正月十三日兼越中守、七月廿五日叙從

三位、

○鹿取の薨は、承和十年六月十一日なり、本條あり、參看すへし、

承和十年癸亥 ^{紀元千五}百三年

二月^朔庚申

三日、^壬味眞公御助麻呂、越中介に任す、

仁明天皇承和九年 十年

〔續日本後紀〕十三 壬戌日 外從五位下味真公御助麻呂爲越中守

六月 戊午朔

十一日 參議兼越中守朝野鹿取薨す

〔續日本紀〕十三 戊辰日 參議從三位勳六等兼越中守朝野朝臣鹿取薨鹿取者元大和國人正六位上忍海連應取之子也叔父從六位上朝野宿禰道長爲子出身延曆十一年自言歸父戶追賜父應取姓宿禰即入京少遊大學頗涉史漢兼知漢音始試音生任相模博士後登科爲文章生自此累遷唐准錄事太宰大典式部錄左大史左近衛將監等職弘仁二年恩勅叙從五位下以帝苦願作昔字と在藩之日侍講也二月補左衛門佐十二月服解三年奪情除近江介五年遷左近衛少將七年兼主殿頭十二月兼因幡介八年加從五位上兼任內藏頭上野守少將如故十年加正五位下遷兵部大輔相模介少將尋授從四位下五月復除兵部大輔十二年遷中務大輔五月遷民部大輔六月復中務大輔十四年遷左中辨天長四年加從四位上二月除太宰大貳上表乞解大貳不許十一年六月拜參議十一月兼式部大輔承和元年七月停式部大輔遷左大辨七年加正四位下九年授從三位兼越中守立性謹慎臨事明了以更幹稱能收入譽至小藝善大歎細本大本大歎薨時年七十

〔公卿補任〕 參議從四位上朝野鹿取六十大和國人正六位上忍海連應取子也

叔父正七從六續後紀位上朝野宿禰道長爲子養育出身武內宿禰第六男葛城襲津彥命之後也延曆廿一年四月十五日任遣唐錄事廿五年四月太宰大典年月日式部少錄大同四年四月左少史年卅六六月十三日右近將監弘仁元年三月十日補藏人二年正月七日從五下廿八日頭帝昔在藩之日侍講也四月廿三日左衛士佐十月改左衛士佐爲左衛門佐三年正月十一日近江介五年正月廿五日左近少將同十一月兼上野守七年正月癸巳任主殿頭少將如元十一月壬戌兼因幡介八年正月丁卯叙從五位上九年六月甲子兼內藏頭十年正月七日正五位下二月己酉兵部大輔兼相模介十一年閏正月依病上表辭職大輔如元勅許之授從四位下五月十八日爲兵部大輔十二年正月十日任中務大輔四月補藏人頭十七日止頭依讓位也還補頭五月十三日左中辨天長四年正月癸未從四上二月太宰大貳承和二年左大辨十二月廿四日辭大辨以上承和四年民部卿以上承和七年正月七日叙正四下以上承和八年民部卿去之以上承和九年正月十三日兼越中守七月廿五日叙從三位以上承和十年六月十一日戊辰薨頭十一年在官

〔十一年〕正六位上忍海連應取子、叔父正七位上朝野道長爲子、〇以上承和十年の條

二十八日、西大學博士御船氏主をして、越中守を兼ねしむ、

〔續日本後紀〕

十三 乙酉八月二十

從五位上御船宿禰氏主爲兼越中守、大學博士

如故、

承和十二年乙丑

紀元千五百五年

九月乙巳

一日、乙婦負郡從五位下鵜坂神に從五位上を授け、新川郡日置神に從五位下を授く、

〔續日本後紀〕

十五

九月乙巳朔、奉授越中國婦負郡從五位下鵜坂神從五位上、

新川郡无位日置神從五位下、

〇貞觀二年五月、四年十月、九年二月に加叙す、各本條あり、

〔參考〕

〔延喜式〕

神名

越中國婦負郡鵜坂神社、
越中國新川郡日置神社、

〔神名帳考證〕

六

鵜坂神社、今在鵜坂村、

日置神社、今在日置村、高魂命、姓氏錄云、佐伯日奉造、高魂命六世孫天押日命之後也、按高志連同祖、

〔神社叢錄〕

九十

鵜坂神社、祭神詳ならず、鵜坂村に在、考萬葉集十七卷に、

婦負郡渡鵜坂河時歌一首、宇佐可河泊和多流瀬於美云云、

日置神社、祭神詳ならず、日置村に在、考

〔八雲御鈔〕

四

うさり乃侍え、是は越中國うさかの事なり、彼祭はして女の男の祭といふ

〔越中志〕

婦負郡

俊賴無名抄云、いゝせんうさりのもりよまはすと、君り

まもとのゝはるらぬ身を、〇此の歌夫木和歌抄にも收む

これ、越中國鵜坂の明神と申神の祭の日さりきのまもとよ乙女のをとこまゝるり、はまもとよさりひてうつなり、女そのをりよありて、はまきに尻をまゝせてふせり、はまきまもと汝もちて、はまをとふり、はのあとしはしめのなへのごとしおほりる、はのちちるよさみすこゝをいへり、はちまちよとちちるえるとしてまゝりさまゝ耻はくきものあるあし、はふるき歌のまゝえ、はの俊賴り歌をまゝしりきて候あり、

〔和漢三才圖會〕六十 鶺鴒川 同森有社號鶺鴒坂明神祭禮神主用柳枝打婦女、但多少隨所觸男夫之數猶江州筑摩祭被鍋之類

〔大日本史〕三百五十九 神祇志神社略中

婦負郡七座略す

鶺鴒神社○今在承和十二年、自從五位下進從五位上後紀日本貞觀二年、加從四位下、四年又進一階、九年爲從三位實錄凡每歲祭日、禰宜以杖擊婦女、不貞者戒之、號尻打祭御鈔延喜制、七座皆列小社延喜式

新川郡七座略す

日置神社○今在承和十二年、叙從五位下後紀日本貞觀二年、自從五位上進正五位上○正原作從九年、自從四位下進從四位上實錄

〔神社古事拔書〕外

延喜式內

鶺鴒神社

神階從三位

祭神面足尊

祭禮七月廿三日

別神事十一月十六日

相殿

鶺鴒姉比咩神

神階從五位下

鶺鴒妻比咩神

相殿

大彥命

類聚國史第十三神階部ニ曰、貞觀年越中國鶺鴒神社授從四位下、正六位上鶺鴒姉比咩神、鶺鴒妻比咩神並授從五位下、同第十六云、貞觀九年二月廿七日授越中國從四位上鶺鴒神社授從三位上云々、

其後國史ニ神階之沙汰ナシ、尤後醍醐帝御宇七道神社へ官幣使ノ事有ト云、神階ノ沙汰ナシ、然ルヲ社僧正一位鶺鴒坂大明神ト唱ルハ、甚ノ妄説也、且亦神社號之事ハ延喜式內ノ外ハ、狽ニ不相成神捷也、大明神號ハ元佛説ヨリ出テ甚是ニオトル、然ルヲ社僧大明神ト號スルハ神位ヲ減ルニ同ク可笑之甚也、

鶺鴒 同新村 有澤 庄高田 高田 下野 久郷 羽根新

羽根 分田 島黒瀬 高田新 十二ヶ村産社

抑當社者崇神天皇御宇北陸將軍大彥命勸請ト云云、白雉二年大彥命ノ古キ例シヲ以テ北陸中示合再建ス、尤海内ニ聞ヘタル大社ニテ、年分七十二度ノ神事神式等アリ、まもとの祭ナト此内也ト云云、聖武帝天平十三諸州ニ經ヲ納ル塔モ造立セシメ、或ハ國分寺ヲ被置、又神社爲崇敬不淨穢ヨケトシテ大社ニハ必別當社僧被附、於護摩堂祈念スルコト也、是モ弘法以來トイフ、弘法傳教前ハ此義ナシ、鶴坂寺モ聖武帝御宇社僧被附ト云

當社貞觀年中從三位進階之位田社納、鶴坂社近邊ニ有之、右神領餘分社僧等配當仕來處中興(續)鎌信當國亂入之砌、社頭大破、社家社僧等住所不定ト云々、文政二年、江府上野廣小路蓬萊屋某隱居辻白也ト云者來リ、當社再興、神事等如昔執行之義申出、鶴坂寺吉尾伊勢惣方示談ノ上、於社内能興行願濟、翌年七月廿二日ヨリ廿四日迄興行中ニ、白也退身ニ而再建者指置、社内始鶴坂寺等猶更大破ニ及フ、右白也取持ニ而社人女ノ尻打處ヲ短冊ニ摺出諸國へ廣ムト云、

〔元祿集〕
由断して行か鶴坂の尻打日
とせ哉

阿奈このや鶴坂祭の馬よむち
紅祭する顔あさましを鶴坂寺
其角
風雪

承和十四年丁卯 紀元千五百七十七年

正月 戊戌

十二日、配刑部卿源明をして、越中守を兼ねしむ、

〔續日本後紀〕十七 己酉〇正四位下源朝臣明、爲兼越中守、刑部卿如故、

〔公卿補任〕參議正四位下源明、嵯峨天皇第五源氏、母飯高氏、右大臣常公同

母、天長九年正月從四位上、廿六日大學頭、承和五年正月十三日兼加賀守、六年

正月十一日兼近江守、九年正月十三日兼播磨守、八月一日左京大夫、十三年正月

七日敍正四位下、十三日刑部卿、十四年正月十二日兼越中守、十五年正月十三日

兼阿波守、嘉祥二年二月廿七日任參議、刑部卿阿波守如元、嘉祥二年の條

〔大日本史〕三百八十四 國郡司、越中、彌

少領名、關利波與繼、承和十三年九月見

嘉祥元年戊辰 紀元千五百八十八年

正月 壬戌

仁明天皇 承和十四年 嘉祥元年

十三日、甲戌藤原安永、越中守に、安埤豐額、越中介に任す、

〔續日本後紀〕十八 甲戌、三日、從五位上藤原朝臣安永、爲越中守、外從五位下、安埤宿禰豐額爲介、

三月 庚申朔

二十日、己卯和氣豐永、越中守に任す、

〔續日本後紀〕十八 己卯、十日、從五位下和氣朝臣豐永、爲越中守、

六月 戊子朔

三日、庚寅越中國飢う、之を賑給す、

〔續日本後紀〕十八 庚寅、三日、越中國飢、賑給、

嘉祥二年己巳 紀元千五百九十九年

四月 甲申朔

二十八日、辛亥越中博士紀生永等、本居を改めて左京に貫附す、

〔續日本後紀〕十九 辛亥、八日、越中博士從七位下紀朝臣生永、從八位下紀朝臣實等、改本居貫附左京六條一坊、

文德天皇

仁壽元年辛未 紀元千五百一十一年

正月 甲戌朔

十一日、甲戌紀椿守、越中權守に任す、

〔文德實錄〕三 甲申、十一日、從五位上紀朝臣椿守、爲越中權守、

仁壽二年壬申 紀元千五百一十二年

正月 戊辰朔

十五日、壬午刑部卿源寬、越中守に、山代氏益、越中介に任す、

〔文德實錄〕四 壬午、五日、從四位上源朝臣寬爲越中守、刑部卿如故、從五位下山代宿禰氏益爲介、

〔大日本史〕三百八十四 國郡司、越中關

轉擬大領名、關郡中臣御成、齊衡、中爲擬大領、

擬主政名、關郡春米吉良、仁壽二年十一月見

仁壽三年癸酉 紀元千五百一十三年

文德天皇仁壽元年 二年 三年

三月 朔辛卯

二十八日、戊午越中權守、紀椿守卒す、

〔文德實錄〕五 戊午、八日越中權守從五位上紀朝臣椿守卒、椿守、春宮亮從五位上白滿長子也、弘仁四年正月爲大内記、十一年正月爲典藥助、十二年正月叙從五位下、爲上總介、十三年正月爲安房守、承和五年正月加從五位上、仁壽元年正月爲越中權守、卒時年七十八、椿守工於隸書、尤得其節、答渤海書時、簡好手、椿守前後再書、皆盡其善、朝廷美之、

七月 朔庚寅

一日、庚寅大學博士春日雄繼をして、越中權守を兼ねしむ、

〔文德實錄〕五 庚寅朔、從五位下春日朝臣雄繼爲越中權守、大學博士如故、

○同書卷八齊衡三年八月丁酉の條には、朝臣を臣に作る、

齊衡元年甲戌 紀元千五百十四年

三月 朔乙酉

七日、卯高瀨神・二上神、並に從三位を加ふ、

〔文德實錄〕六 三月辛卯、日越中國高瀨神・二上神、並加從三位、

○實錄十一年十二月十四日の條參看すへし、

十一月 朔壬子

二十七日、寅高瀨神・二上神等の禰宜祝に、笏を把るを許す、

〔文德實錄〕六 戊寅、七日越中國高瀨神・二上神等禰宜祝、並預把笏、

齊衡三年丙子 紀元千五百十六年

正月 朔乙巳

十二日、丙辰源啓、越中守に任す、

〔文德實錄〕八 丙辰、二日從四位上源朝臣啓爲越中守、

〔大日本史〕三 國郡司、越中關

介橋門雄齊衡二年六月見

據大原宗公齊衡二年六月見

擬大領名關利波代良齊衡二年六月見

〔參考〕

〔大日本史〕三 國郡司、越中守關

源啓、齊衡三年正月爲加賀守、

文德天皇齊衡三年

七月辛丑朔

十一日、辛亥越中國早す、

〔文德實錄〕八 辛亥、○越中國言早、

八月辛未朔

二十七日、丁酉越中權守、春日雄繼に、大春日朝臣の姓を賜ふ、

〔文德實錄〕八 丁酉、○大學博士兼越中權守從五位上春日臣雄繼○本三

は年七月甲戌の條に作るに賜姓大春日朝臣、

天安元年丁丑紀元千七百十七年

正月庚子朔

十四日、癸丑春原末繼、越中介に任す、

〔文德實錄〕八 癸丑、○從五位下春原朝臣末繼爲越中介、

三月戊戌朔

二日、己亥齋部木上、越中介に任す、

〔文德實錄〕九 己亥、○齋部宿禰木上爲越中介、

〔大日本史〕三百八十四國郡司越中欄

介齋部木上○天安元年三月任

六月丙寅朔

十九日、甲申左近衛少將、良岑清風をして、越中權介を兼ねしむ、

〔文德實錄〕九 甲申、○從五位上良岑朝臣清風爲越中權介左近衛少將如故、

七月丙申朔

九日、甲辰越中等の國司より、不堪佃田の實に據らざる者を、處罰せしことを

奏す

〔文德實錄〕九 甲辰、○河内越中等國司言上不堪佃田依不據實下秋官而斷

罪也、

天安二年戊寅紀元千八百十八年

三月壬戌朔

八日、己巳房世王、越中權守に任す、

〔文德實錄〕十 己巳、○從四位下房世王爲越中權守、

〔參考〕

〔大日本史〕三百八十四國郡司越中欄

文德天皇天安元年二年

房世王天安二年三月任權守貞觀三年正月為越前權守

清和天皇

貞觀元年己卯

百九十九年

正月

戊午朔

十三日庚辰廣宗系繼、越中守に任す、

〔三代實錄〕

二十三日庚午、從四位上行越中守源朝臣啓為加賀守、散位從四位

上廣宗宿禰系繼為越中守、

本書頭書に曰く、系繼元作繼元、據朝本内本一本續後紀、承和九年八月紀、文

德實錄仁壽三年正月紀改と、○國史大系本

二十七日甲申從三位高瀨神、一上神、並に正三位を授く、

〔三代實錄〕

二十七日甲申、京畿七道諸神進階及新鼓、惣二百六十七社、○中越

中國從三位高瀨神、二上神、並正三位、

○寶龜十一年十二月條參看すべし、

貞觀二年庚辰

百二十年

五月

庚戌朔

二十九日戊寅鵜坂神に從四位下を、從五位上日置神に正五位上を授く、

〔三代實錄〕

二十九日戊寅、進越中國鵜坂神階、加從四位下、從五位上日置神授

正五位上、

○承和十二年九月一日條參看すべし、

貞觀三年辛巳

百二十一年

正月

丙子朔

十三日戊子大判事橘春成、越中權守に、大江直臣、介に任す、

〔三代實錄〕

十三日戊子、從四位下行越中守房世王為越前權守、從五位下守

大判事橘朝臣春成為越中權守、從五位下守河内守大江朝臣直臣為介

二月

乙巳朔

二十五日己巳紀伊介菅野高松、越中介に任す、

〔三代實錄〕

二十五日己巳、從五位下行越中介大枝朝臣直臣為駿河權守、外

從五位下紀伊介菅野朝臣高松爲越中守

貞觀四年壬午 紀元千五百二十二年

二月 朔庚子

十一日、庚戌藤原春岡、越中守に任す、

〔三代實錄〕六 十一日庚戌、散位正五位下藤原朝臣春岡爲越中守。

十月 朔丙申

九日、甲辰從四位下鵜坂神に從四位上を授く、

〔三代實錄〕六 九日甲辰、越中國從四位下鵜坂神授從四位上。

○承和十二年九月一日條參看すべし、

貞觀五年癸未 紀元千五百二十三年

二月 朔甲午

十日、癸卯下野守基棟王、越中守に任す、

〔三代實錄〕七 十日癸卯、從四位上行左京大夫兼山城守紀朝臣今守爲大和守、

餘官如故、正五位下行越中守藤原朝臣春岡爲權守、從五位下守玄蕃頭佐伯宿禰

直持爲介、○中從四位上行下野守基棟王爲越中守、

六月 朔壬辰

十七日、申戌越中・越後等の國、地大に震ひ壓死者衆し、

〔三代實錄〕七 十七日戊申、越中越後等國地大震、陵谷易處、水泉涌出、壞民廬舍、

壓死者衆、自此以後、毎日常震、

八月 朔辛酉

十五日、乙亥越中國鵜坂神・比咩神・鵜坂妻比咩神、杉原神、並に從五位下を授く、

〔三代實錄〕七 十五日乙亥、越中國正六位上鵜坂妻比咩神、鵜坂妻比咩神、杉原

神並授從五位下、

○承和十二年九月一日鵜坂神に神階を授くる條參看すべし、

〔參考〕

〔延喜式〕十名 越中國婦負郡杉原神社、

〔神社叢錄〕九三十 杉原神社、祭神大己貴命、神社 田屋村に在り、同上

〔大日本史〕二百五十九 神祇志、神社、越中

婦負郡七座 略 ○六座

杉原神社 ○今在二

清和天皇貞觀五年

官帳不載者

鶴坂姉比咩神社

鶴坂妻比咩神社、二社今不詳所在。○婦及郡有鶴坂神、或以爲此神、然位階不合。

九月庚寅

二十五日寅正五位下雄山神に正五位上を授く

〔三代實錄〕七 九月二十五日甲寅授越中國正五位下雄山神正五位上

○本書の頭書に、雄山神内本及下文无山字とあり、又大日本史は雄神神社の條に於て、本書に據り、貞觀五年自正五位下進正五位上と書し、且其の下に注して、本書此條作雄山神、然推前後位階爲此神明矣、且神階記作雄神、故係于此と云ふ、其れ或は然らん、仍姑く本文に従ふ。

〔參考〕

〔延喜式〕神名 越中國新川郡雄山神社

〔萬葉集古義〕下天七 立山賦一首並短歌此山者在

立山、今はたてやまといふ、古くはたてやまといふ、新山と唱り、○在、字舊本有と作るは誤なり、類聚抄拾遺本古寫小本等に從ふ、○新山と唱り、○在、字舊本有と作るは誤なり、新河郡、布加波と見、新川神、此山在、三代實錄に貞觀九年二月廿七日、越中國正五位上、見、新川神、此山在、三代實錄に貞觀九年二月廿

安麻射可流比奈爾名可加須古思能奈可久奴知許登其等夜麻波之母之自爾安禮登毛加波波之母佐波爾由氣等毛須賣加未能宇之波伎伊麻須爾比可波能會能多知夜麻爾等許奈都爾由伎布理之伎底於婆勢流可多加比河波能伎吉瀬爾安佐欲比其等爾多都奇利能於毛比須疑米夜安里我欲比伊夜登之能播仁余增能未母布利佐氣見都余呂豆餘能可多良比具佐等伊未太見奴比等爾母都氣牟於登能未毛名能未母伎吉底登母之夫流我爾此註畧す、下多知夜麻爾布流由伎乎登已奈都爾見禮等母安可受加武賀良奈良之可多加比能可波能瀬伎欲久由久美豆能多由流許登奈久安里我欲比見牟

敬和立山賦一首并二絶

阿佐比左之會我比爾見由流可無奈我良爾奈爾於婆勢流之良久母能知遊乎於之和氣安麻會理多可吉多知夜麻布由奈都登和久許等每奈久之路多倍爾遊吉波布里於吉底伊爾之邊遊阿理吉仁家禮婆許其志可毛伊波能可牟佐備多末伎波流伊久代經爾家牟多知底爲底見禮登毛安夜之爾爾太可美多爾乎布可美等於知多藝都吉欲伎可敷知爾安佐左良受綺利多知和多利由布佐禮婆久毛爲

清和天皇貞觀五年

多奈毗吉久毛爲奈須已許呂毛之努爾多都奇理能於毛比須具佐受由久美豆乃
於等母佐夜氣久與呂豆余爾伊比都藝由可牟加波之多要受波
多知夜麻爾布利於家流由伎能等許奈都爾氣受底和多流波可無奈我良等會
於知多藝都可多加比我波能多延奴期等伊麻見流比等母夜麻受可欲波牟

右掾大伴宿禰池主和之四月廿八日

〔伊呂波字類抄〕

立山大菩薩

深山之穴熊見射然問笑立乍登於高山之頂懸五色阿彌陀如來也林巖石之山
深名一變腰號二變肩字三變頸名四變中頭懸五色阿彌陀如來也林巖石之山
沙彌法號慈與其師藥勢上人自大河南者藥勢之建立三所上本宮中光明山下上
聖人建立作寺一王千種也下岩崎寺今泉也驚殿草堂中宮產聖人建立圓城寺胎蓮
見顯現入大地獄懲一三十三十六歲勿

〔類聚既驗抄〕

越中國立山權現文武天皇御宇大寶元年始所建立也相傳云

於立山狩人有之熊射矢を射立追入出處其熊乍立矢死了見之皆金色阿彌陀如
來也仍此山云立山權現也現顯地獄云々

〔日本鹿子〕

立山權現文武天皇大寶三年三月十五日救與聖人蒙御示現開
之云々當國之一宮也○又見國花万葉記

〔神名帳考證〕

雄山神社 山祇 万葉云須賣加未能宇之波伎伊麻爾比
可波能會能多知夜麻爾等許奈都爾由伎布理之伎底云々按宇之主也伎波張也

同云可無奈我良彌奈爾於波勢流之良久母能知邊乎於之和氣安麻會々理多
可吉多知夜麻爾云々 新校云立山在新川郡立山神名乎

〔神社叢錄〕

雄山神社 立山に在る 土人萬葉集十七卷に立山賦此山者
在新川

郡安麻射可流比奈爾名可加須古思能奈可久奴知許登其等夜麻波之母之自爾
安禮登毛加波波之母佐波爾由氣等毛須賣加未能宇之波伎伊麻爾比可波能
會能多知夜麻爾云々

連胤按るに當社は立山の雄山に坐すか故に雄山神と稱しゝにて所謂立山
は高山と聞ゆれを雌山神も坐すべけれど其比畔は祈年祭に預り給はねば
立山神社とは申さぬなるべし常陸國筑波山神社二座とありて今も男體宮
女體宮として兩所に坐して二上山ともいひ來り其男體は案上女神は案下の
幣に預り給へば筑波山神社二座にて明か也爰の女神も案下の幣にだに限
り給ふならば立山神社といふべきを然あらぬから雄山神社と載せたるな
るべし

〔神祇志料〕

十五

雄山

神社

今立山

に在り

立山權現

と言ふ

神名帳

抄

○按

越中

國

立山

の北に

銅山

あり

萬葉集

に須賀

能多知夜麻と云るは此山にして須賀加未中能字之波伊麻須爾比可波能會

備蓋伊弉諾尊を祀る土人傳説凡其祭四月八日十月三日之行ふ新川縣會

社調

〔倭漢三才圖會〕

六十

立山權現

在新川郡

祭神

伊弉諾尊

方五

回拜殿

七

同末社

十九棟

力尾權現社

即手力雄命也

社領五十石

祭四月八日

神與

七社

天岩

寺別當

彼山傳記曰文武天皇大寶元年二月十六日夜帝夢阿彌陀來枕頭曰自今令四條

大納言有若領越中國國家當安穩也覺乃勅有若為越中國司而有若卿同嫡男有

賴移住當國保伏山一日自辰巳方白鷹飛來止于卿舉喜愛育之既而有賴請於父

為鷹野遊時俄翦去東西求之而不還來於是森尻權現示現曰汝當尋辰巳方因入

奧山日既暮宿于岩間翌朝至岩倉林見一老人右提劍左持念珠曰汝所尋鷹今在

橫江林也有賴問君誰乎答曰我是當山力尾天神也而去恭禮尙入深山時猛熊驅

來將攫有賴急射之矢中熊胸流血逃入玉戶窟透見窟中不意三尊佛像巍々異香

芬々熟拜之阿彌陀胸矢立血流有賴知己矢大驚且恠之如來猶夢告曰我為濟濁

世衆生現十界於此山待汝故使有若為當國主亦方便也鷹乃劔山力尾天神也熊乃我也汝速出家宜開當山焉有賴流隨喜謂說法原五智寺慈朝師受戒改名號慈興尋建立山大權現大宮及王子眷屬等社焉又登嶽依小山大明神告到淨土山拜一光三尊如來二十五菩薩蓋此大嶽形似佛尊貌膝為一越腰腹為二越肩為三越頭為四越頂上佛面為五越

岩峠寺二里

○橫江一里

有賴射熊處

○血掛一里

熊引血去處

有死出山

○蘆峠寺

一里有姥堂

大寶三年卯慈興上人老母卒于江州志賀慈興自作母像慶雲元年八月彼岸中日為葬禮法式于今然

○湯川一里

又名勝渡藤橋行人取垢離處

○美女杉一里

有千手堂有材木板傳曰昔欲建女人堂略寄材木然其木皆一夜變石有熊

野權現鶯窟各一社傳曰昔若狹小瀨女僧名止宇呂尼者伴壯女一人童女一人推

參女人結界山故於此壯女乍化成杉木因名美女杉

○斷罪坂一里

彼童女怖不進時尼尿而見其形勢大罵其地為穴深不知幾許其處名叱尿

○伏拜一里

於此望勝妙瀑布

數十丈

○桑谷一里

有桑崎權現社

○不動堂一里

中津原一里

名彌陀原

右有高山名藥師嶽其麓有溫泉

○國見坂一里

有二道

若狹老尼於此途

額生角化為石名姥石其處曰姥懷其角今存為寶物行市谷道則在畜生原傳曰昔

有奥州板割澤藤義丞者登山於此頻睡眠自變成馬且生角其角為寶物今存又森
 尻當山有智明坊者性懦弱而俄聲如牛吼遂為天狗自號光藏坊接市谷劔山力尾
 權現逐出之退去時墮一爪為寶物于今存凡市谷行道有小鑪大鑪人龍之登其鑪
 乃三條小鍛冶宗近所作云云獅子ガシ端カシ天狗有窟愛染明王有弘法大師護摩壇跡○
 室堂カシ凡此至カシ絕頂左有山名三寶崩昔飛驒小萱鄉有北山石藏者性貪欲猛惡每殺
 物命害人遂自變成鬼神生尖牙隱于此為別山金剛童子所逐牙拔口噤死其牙于
 今在為寶物右有根尾社又有天狗嶽其峯有龍神社是乃狩籠池神也有地獄道追
 分地藏堂每歲七月十五日夜胡蝶數多出遊舞於此原呼曰生靈市立高率都婆弔
 無絲菩提每夏月麓二十四坊中三坊相更住居室堂登山人寓于此余月不入室
 堂カシ四間五有阿彌陀聖觀音地藏三體○絕頂有懺悔坂有被川有五色濱有六
 觀音堂右方是有淨土山阿彌陀堂四尺六寸三尊影向山左方自一越至五越各有堂一字
 一處有稍暖地名曰九品行人措杖草鞋參本社

本社三尺南一丈白砂庭九尺右方有奉納堂
 本尊阿彌陀如來伊非諾尊不動明王垂跡雄命手力雄命

什物 有賴所持刀無銘 藁股鎌 之有賴射熊 錫杖 行基菩薩
 鬼牙一北山石藏 角二 之若狹老尼 駒角 藤義丞化
 天狗爪一之光 天鏡三文古錢異數多 馬生角

別山自本後光石 橋立石 白山權現堂 折立富士權現 蟻唐渡 砂嶽
 炎王光佛 行者反抱石以上皆 別山帝釋天六尺二間 自別山出室
 堂五十町大走 小走 塞河原有地 玉戶窟 阿彌陀 右有來迎池 八所小窟
 胎內潛 蓮花岩 楊枝嶽 美久里池周五十町 池伽羅陀山○地獄谷有地 藏堂
 八大地獄各有十 共百三十六地獄血池如血色 處々猛火燃起罵詈訶聲聞人潰
 肝 北有劔山山腰有石塔呼 石峙如鋒及峻岨不可言 萬葉たち山降おけ
 る雪をとこなつよみ共ありからんらうるらし家持
 按傳記中雖有近在談者諸惡莫作神佛之方便詰者還恐也夏月雪消潔齋可登岩
 見然自古用來無之所
 〔回國雜記〕 かくて立山禪定侍りけるに先三途川にいたりて思ひつづけ
 ける

此のみよて渡るも嬉しみつせ川さりと後世にはまほし、
翌日下山のほいでにもろくの地獄をめぐりけるも熱湯の鉢火炎かどとり
くあさまありけせば、

去での山それまあや湧るへる湯玉に罪の敷を見せらん、
〔一宮巡詣記〕 七 元祿九年七月四日魚津を出なめり川三日市みさを過、
倉に留る五日立山へ趣く半道あまり馬にて行馬足叶はされと歩立に成て、
つたて山坂を越常願寺川を渡る水深き時藤網にて橋を渡し取付渡ると也、
金坂大小材木坂ぶせう坂をかりばりと云穴あり龍宮までぬけたりと云かむ
ろ坂禿杉又は狸々亂杉共云神の座給ふ木と云五かい程にて高さ五六尺枝
五六百本も有四方へしたれりぶな坂小鮎坂是より淨明り瀧見ゆる五段に落
桑が谷それより一里計過不動堂あり是を中の室と云彌陀が原二里程有一の
谷鐵のくさりに取付登る獅子がはな弘法護摩を修所也大岩平あり上市場
下市場通り室堂に留る六日立山権現の御前に登り拜む山坂けはく久雪をふ
み行夫より地獄廻りとして廣き谷合硫黄湯のわく所多し戻道にかへり姥ら懐
と云を通り朽木坂迄迎の人々來り坂路をおりて馬にのる立山の道九里八町

雀のみおどりと云五十町壹里也



白山三所一體の神と云是は絶頂の社圖立山麓御姥
の社芦倉村にあり富士に姥の木像六十六體有大宮
と云

立山神詠 芦峠村

風のぬき雪の立山十重はたへおりのへ衣たつかすみ哉

御嬢御前の神詠

浪たかく渡る瀬もなく舟もなく昨日もけふも人は越つゝ

御姥の社の前に川有土俗三途大河と云

若宮再興慈真上人也奥の方に墓有上人の歌

なにはがた芦の葉毎に風をちばよじかる舟のつくばかのきし

立山の絶頂にて小舢多くライノ鳥など見侍る雲の玉をふみ渡る時よめる

道おれとかねて願ひを立山の雪踏分る時もこそあれ

八日芦峠より岩倉迄三里此所にも立山の社あり妻帯の坊中多し富山城下迄

四里

〔越遊行囊抄〕下四ノ 從此邊山〇立山ミユル、加州白山ニオトラヌ高嶽ナリ、六月中近國他國ヨリ禪定スルモノ有山上ニ立山權現ノ社有社ヘハ岩上ニ鏡ヲカケテソレニスカリテ上ル、言語道斷ノ峻難也、

〔越中志〕

六

立山 名所追考云麓ニ姥村、在姥堂、是ヨリ山上迄九里八町ナリ、九ツノ峯アリ、尖ナル故ニ立山ト云、山上ニ大ナル原アリ、此上ニ帝釋カ峯一ノ谷、鎖ヲオロス、二十丈計ノ鐵鎖、小鍛冶宗近ト銘アリ、胎藏界金剛界兩部ノ山トテ、立山劔御前ト云、

芦峯寺

芦峯庄立山ト云、二百石、岩倉寺、文武天皇大寶三年三月十五日、教

或茲貞上人云、佐伯氏、眞上人蒙示現開之、勸請立山權現、護摩ノ岩屋ヨリ頂上ヘ五十町、走坂、火燒屋、千蛇カ池、北ニ柱朶山、劔ノ御峯ト云、米道村立

劔峰、劔御前、劔ニアリ、劔ノ里、

國常立尊思兼命、手力雄命

雄山 夫木集 俊惠 覺束、越のを山の椎柴の青葉も見え、

岩倉川、流森、練合里、廻國雜記云かくて越中國といふるなりれの森といふよて、

年ちりのなりれの杜よ立よれ、老の涙もその名をりけり、

縁りあひといへるさとに野人とも物語しけるを見て、同行よされおと

さを、

足よひき老のちりらにともなひておきるもあゝ縁りあひの里、

岩藏川といへる大河侍りふる里なり、谷近きその名を思ひ出で、

故郷の山よちりしとこひをさる岩くら川のりけもなつりし、

立山 堯惠法師北國紀行云立山のふもとを過て越中の國ようつりぬ、

昔誰なつより道をたて山の雪よ消せぬほとけ残る

立山産物 越中舊事記云熊膽 黄連

三月朔丁亥

二十三日、己酉正六位上楯杵神に従五位下を授く、

〔三代實錄〕

八

廿三日己酉、授和泉國從五位上積川神從四位下、〇越中國正

六位上楯杵神並從五位下、

〇貞觀十三年十一月十日條參看すべし、

〔參考〕

清和天皇貞觀五年

〔神社叢錄〕九三〇 楯杵神社、祭神經津主神、武甕槌命神社射水郡白川村に在す、同上

〔神祇志料〕十五 楯杵神、今射水郡白川村にあり神社蓋健御雷命

經津主命を祀る倭人

〔大日本史〕二百五十九 神祇志、神社、越中

官帳不載者

楯杵神社、今在射水郡川村、白傳言、祀經津主武甕槌二神郡名、貞觀六年自正六位上授從五位下、十三年陞從五位上、元慶六年進正五位下進階與原階同故今

貞觀七年乙酉 紀元千五百二十五年

正月 朔癸未

二十七日、己酉、下野守棟貞王、越中守に、散位久賀三常、權守に任す、

〔三代實錄〕十 二十七日己酉、從四位下行下野守棟貞王、爲越中守、散位從五位

上久賀朝臣三常爲權守、

〔大日本史〕三百八十四 國郡司、越中、關

擬大領名關郡利波安真、貞觀四年八月見

轉擬大領名關郡品治部稻積真、貞觀五年四月見

擬少領名關郡飛鳥戶貞門真、貞觀五年四月見

擬少領名關郡飛鳥戶今貞真、貞觀六年七月見

貞觀八年丙戌 紀元千五百二十六年

正月 朔戊寅

十三日、庚寅、右大史菅野宗之、越中介に任す、

〔三代實錄〕十二 十三日庚寅、外從五位下行右大史菅野朝臣宗之、爲越中介、

五月 朔甲辰

十九日、壬戌、越中等諸國每年貢する所の馬革の數を改む、

〔三代實錄〕十二

十九日壬戌、太政官處分、停伊賀、越前、加賀、越中、丹波、丹後、因幡、播磨、備中等九國年貢馬革百張、造兵司修理年祈甲百領、令諸國貢馬革二百張、以宛彼祈、貞觀五年減修理五十領、仍半折輸焉、

十月 朔壬申

清和天皇貞觀七年 八年

八日、乙越中國の奏請に依り故郷に歸らざる國司博士醫師に交替丁を給する
ることを停む、

〔類聚三代格〕六

太政官符

應停給不歸故郷國司並博士醫師交替丁事、

右得越中國解僞、謹檢和銅五年五月十六日格、備諸國司等遷代之日、宛給夫馬令
送故郷者、承前國幸、備依此格、浪人便任史生以上、及土人被拜博士醫師之輩、宛給
件丁其來尙矣、夫交替丁者、既作送歸之資、非是輸物之備、而不熟格旨、歷世給來、固
茲貧人求利、苛勸功物、彫弊之民、舉門逃亡、求之政途、益害最甚、望請被從停止、濟此
窮民謹請、官裁者、右大臣(相)宣奉、勅依請自余諸國又宜准此、

貞觀八年十月八日三代實錄第五十三

貞觀九年丁亥紀元千五百

二月辛未

二十七日、丁從四位上鵜坂神に從三位を、從四位下日置神に從四位上を、正
五位上新川神に從四位下を授く、

〔三代實錄〕十四 廿七日丁酉、授近江國正四位下勳八等兵主神正四位上、越中

國從四位上鵜坂神從三位、從四位下日置神從四位上、正五位上新川神從四位下、

○鵜坂日置二神のことは、承和十二年九月一日の條に見ゆ、新川神の陸叙は、

貞觀十八年七月十一日に在り、參看すべし、

〔參考〕

〔神社叢錄〕九三 新川神社、祭神大己貴命、大新河命、面足尊、惶根尊、社新川

郡町新庄村に在り、上

〔大日本史〕三百五十九神祇志社越中

官帳不載者

新川神社、今在新川郡郡名神祇志、土人傳言、祀大新川命、土人貞觀九年、

自正五位上授從四位下、十八年陸從四位上、名脱用書

十月丙寅

五日、庚越中國御田神等に從五位上を授く、

〔三代實錄〕十四 五日庚午、授讚岐國正五位下田村神從四位下、中越中國從

五位下御田神等、並從五位上、

○元慶三年二月に加叙す、本條あり、

〔参考〕

〔神社叢録〕九三〇 御田神社、祭神菊理媛伊弉諾尊伊弉冊諾尊神社、射水郡佛生寺村に在す同上

〔大日本史〕二五十九 神祇志、神社、越中官帳不載者

御田神社、今在射水郡○在佛生寺村、相傳祀御年大年二神郡名、神社、貞觀九年、自從五位下進從五位上、元慶三年陞正五位下、

貞觀十年戊子 紀元千五百二十八年

正月 丙申

十六日、辛良秀王、越中守に任す、

〔三代實錄〕十五 十六日辛亥、散位從四位下良秀王、爲越中守、

三月 乙未

七日、辛越中國の雜掌調庸を免す、

〔三代實錄〕十六 七日辛丑、停越中國調集雜掌一人、免稅帳雜掌調庸、

貞觀十一年己丑 紀元千五百二十九年

三月 己未

二十三日、己源弼、越中權介に任す、

〔三代實錄〕十六 散位從五位下源朝臣弼爲越中權介、

九月 乙卯

十五日、己越前介志紀氏經、越中介に任す、

〔三代實錄〕十六 十五日己巳、以外從正位下行越前介志紀宿禰氏經爲越中介、

貞觀十三年辛卯 紀元千五百三十一年

九月 甲戌

八日、辛佛像七十二鋪を太政官及五畿七道に分置し、北陸道には七鋪を分つ、

〔類聚三代格〕二

太政官符

應安置一萬三千畫佛像七十二鋪事、

各廣六幅 高一丈六尺

太政官一鋪 圖書寮一鋪 五畿内五鋪

清和天皇貞觀十一年 十三年

東海道十五鋪 東山道八鋪 北陸道七鋪

山陰道八鋪 山陽道八鋪 南海道六鋪

西海道十二鋪 太宰觀音寺一鋪 八幡神宮寺一鋪

右得元興寺傳燈大法師師賢謹陳稱先師故律師傳燈大法師位靜安兼和年中奉勸國家禮拜佛名始行內裏漸遍天下遂詔諸國並令修之又本作是念佛經共寫鑲護國家即寫經典分置諸國未畫佛像忽隨冥期方今遺教在耳追思增悲苟為弟子當述師志回茲發心致誠奉造如件望請分置內裏并諸國永付公帳每至御願懺悔之會即便修此像前但內裏新納圖書寮然則國家安樂社祚延長謹請 官裁者從三位守大納言兼左近衛大將行陸奥出羽按察使藤原朝臣基經宣依請

貞觀十三年九月八日政事要畧第廿八

十一月朔癸酉

十日壬午從五位下楯杵神に從五位上を授く、

〔三代實錄〕二十 十日壬午授越中國從五位下楯杵神並從五位上

○貞觀六年三月廿三日條參看すべし、

貞觀十五年癸巳 三紀元千五百三十三年

四月朔乙未

二十一日乙未越中守峰雄の女賀茂氏所生の皇子長猷等、源氏となり、左京一條一坊に貫隸せしめらる、

〔三代實錄〕二十 是日、○二十定親王八人源氏四人略○中皇子長猷母賀茂氏、越中守峰雄之女皇子長淵母大野氏、前石見守鷹取之女、皇子長鑿母佐伯氏、信濃權

介子房之女皇子載子、長猷同母、並為源氏貫隸左京一條一坊、

〔參考〕

〔纂輯御系圖〕

清和天皇 ○御事畧畧す、

陽成天皇 ○天皇の御事畧及び貞固親王以下九親王、四内親王畧す、

源朝臣長猷母賀茂氏、越中守峰雄女、

源朝臣長淵母大野氏、石見守鷹取女、

源朝臣長鑿母佐伯氏、信濃介子房女、

源朝臣長賴母同、

源朝臣載子母同源長猷、

清和天皇貞觀十五年

二十八日、庚申越中守橘宗嗣の子貞根卒す、

〔三代實錄〕

四十

廿八日庚申、從四位上行彈正大弼橘朝臣貞根に、本書の頭書に貞根原作貞根、相傳諸本紀略及上文改あり卒、貞根者左京人也、越中守從五位下宗嗣之子也、美髯髯、身長纒

五尺、腰圍甚大、幼年侍奉嵯峨太上天皇、頗蒙恩幸、及成人年二十五、承和五年六月、擢授從五位下、十年拜中務少輔、頃遷侍從、十一年從五位上、天安二年增正五位下、嘉祥三年遷安藝守、不之任、貞觀三年拜右京大夫、六年授從四位下、十一年授從四位上、十五年遷彈正大弼、卒於官年五十八、無才學、常侍嵯峨南北內宮、復仁明天皇之外戚、故名位稍進、

十二月 朔 壬辰

十五日、丙午越中國賀積神に從五位下を授く、

〔三代實錄〕

十四

十五日丙午、授長門國從五位下忌宮神從五位上、正六位上、武智石打命神、意久神、土地神、越中國賀積神、並從五位下、

〔參考〕

〔神祇志料〕

十五

賀積神 今新川郡宮津村にあり、賀積郷總社といふ、新川縣式

中略凡毎年三月十四日八月十五日祭を行ふ、新川縣式

〔大日本史〕

二百五十九
神祇志、神祇、越中

官帳不載者

賀積神社、今在新川郡、郡名據土人說、○在宮津村、稱正貞觀十五年、自正六位上加

從五位下、三代實錄

貞觀十八年丙申

紀元千五百三十六年

正月 朔 己卯

二十七日、乙巳越中國白雉を獻す、

〔三代實錄〕

八十

廿七日乙巳、越中國獲白雉而獻、

四月 朔 戊申

十一日、戊午大學博士善淵永貞をして、越中守を兼ねしむ、是日、永貞等火災廢

朝の議を上言す、

〔三代實錄〕

八十

四月十一日戊午、詔召明經紀傳博士等曰、大極殿災、皇帝廢朝、以不及群臣從政如何、從五位上行大學博士兼越中守善淵朝臣永貞、從五位下行

助教船連副使麻呂善淵朝臣廣岑直講正六位上美努連清名小野朝臣常岑等言、

禮記檀弓曰、有焚其先人之室、則三日哭、故曰新宮火亦三日哭、左氏傳曰、昭十八年五月壬午、宋衝陳鄭災、三日哭、國不市、依此言之、天災人火皆三日哭、是憂戚火災若喪之意也、既曰三日哭、何得在正寢聽政、又春秋之義、國有災異、則君親素衣縞冠、帥群臣而哭之、然則公卿從事、隨而可知、

○永貞兼任中、元慶元年二月十四日喪服に就きて、同二年四月一日日蝕に就きて、意見を奏したること本書に見ゆ、今略して收めず、

〔參考〕

〔大日本史〕

三百八十四 國郡司、越中守、櫛善淵永貞貞觀十八年四月見、

〔大日本史〕

二百五 善淵永貞、初名福貞、本姓六人部、火明命後也、世居美濃厚見郡、後與弟愛成等遷隸左京職、賜今姓、貞觀中擢直講、叙外從五位下、爲助教、兼越後介、十四年上表請辭職、侍母病、尋進從五位上、遷大學博士、兼越中守、光孝帝、讀孝經、永貞爲侍讀、進正五位下、仁和元年卒於官、年七十三、

七月丙子

十一日、丙戌新川神に從四位上を、櫛田神に從五位下を授く、

〔三代實錄〕

九十二 十一日丙戌、授甲斐國從四位下勳十二等物部神、越中國、新川神並從四位上、甲斐國正五位下、美和神正五位上、美濃國正六位上、兒安神、越中國櫛田神並從五位下、

○貞觀九年二月廿七日條參看すべし、

〔參考〕

〔延喜式〕

神名 越中國射水郡櫛田神社、

〔神社叢錄〕

九三〇 櫛田神社 祭神素盞鳴尊、奇稻田姬命、神社 櫛田村に在り、

〔越の本草〕

三 櫛田大明神、東條郷串田村大同二年の勸請也といふ、往昔は繁昌なる社にて、社家も軒を列らね、競馬の場まで有りしといふ、今も猶松杉深く立ならび、ゆへある社と見ゆる也、
里人傳へていふ、昔串田村と圓車池村との間の谷に大なる池あり、今はと書く、此池に大蛇住みて年々野人村女をとりて呑しに、一縣是を爲になやまさるゝ事幾としといふことなき、ある年田を植る女を呑しに、女のさしたる櫛蛇の咽にかゝりて、終に蛇もむなしくなりて水にうかみ出けると也、里人村老四方より集り嬉ぶ事限りなし、櫛の爲に害せられ萬人の愁ひをのがれ侍る恩を謝し

てかの楠と女を神にまつて社を建しと也池のぬしなる大蛇亡びければ水も次第に涸れて田となりしとて今に其池ありといふ田づらふ池の形を殘せる也

〔神祇志料〕十五 楠田神社按本書田字を脱せり今三代實錄今東條郷楠田村に在り楠田明神と云ふ舊事紀越中下草蓋楠名田比賣命を祀るに其指楠に畏れて得近かす其書を免る因て其蛇ありて一女を呑むとす時云り此は奇稻田媛を祭れるに因備ふ○中畧 凡毎年四月九月十日祭を行ふ

新川縣式
元慶二年戊戌 紀元千五百三十八年

正月丁酉

十一日丁未平定相、越中介に任す、

〔三代實錄〕三十一 十一日丁未從五位下平朝臣定相爲越中介、

二月丁卯

十五日辛巳大和權介春岳冬通、越中權介に任す、

〔三代實錄〕三十一 十五日辛巳從五位下行大和權介春岳真人冬通爲越中權介

〔大日本史〕三百八十四關

介大春日安永元慶二年二月見

據伴右也元慶二年二月見

二擬大領名○都品治部鳴雄元慶三年三月見

三擬少領名○都飛鳥戶真氏元慶三年三月見

五月丙申

八日癸卯越中國正六位上手向神に從五位下を授く、

〔三代實錄〕三十一 八日癸卯授越中國正六位上手向神從五位下、

〔大日本史〕三百八十四關

〔神社叢錄〕九十 手向神社 祭神一云三女神一云熊野三座神社在所分明か

〔大日本史〕二百五十九 越中

二官帳不載者

手向神社在彌波郡世呼曰彌波山手向神萬葉集○今關加賀在河北郡俱利伽羅

也元慶二年自正六位上進從五位下、

八月 朔 甲子

四日、丁卯越中、越後兩國に命して、軍糧一千斛を送らしむ。

〔三代實錄〕三十四 四日丁卯、送致絲帛一百三十疋於出羽國、班祿俸四、又令越中

越後兩國各送米一千斛以充軍糧。

元慶三年己亥 三紀元千五百三十九年

二月 朔 辛酉

八日、戊辰從五位上御田神に正五位下を授く。

〔三代實錄〕五十三 八日戊辰、授越中國從五位上御田神正五位下。

○貞觀九年十月五日條參看すべし。

十月 朔 丁巳

二十九日、乙酉從四位下雄神に從四位上を、正六位上石武雄神に從五位下を授く。

〔三代實錄〕六十三 廿九日乙酉、授越中國從四位下雄神從四位上正六位上石武

雄神從五位下。

○延曆十四年八月十八日條參看すべし。

〔參考〕

〔神祇志料〕十五 石武雄神、今彌波郡野尻村にあり、按其近傍の地野尻岩武

二村の氏神也。

〔大日本史〕二百五十九 神祇志神祇越中

官帳不載者

石武雄神社、今在彌波郡郡名野尻村地名にあり、社地近野尻元慶三年、自正六位上授從五位

下。

元慶七年癸卯 紀元千五百四十四年

正月 朔 戊辰

二十六日、己卯越中國等に命して、渤海の客を饗するため、酒穴魚鳥蒜等を加

賀國に送らしむ。

〔三代實錄〕三十四 廿六日己卯、令山城、近江、越前、加賀等國、修理官舍道橋、埋瘞路

邊死骸、以渤海客可入京也、下知越前、能登、越中國、送酒穴魚鳥蒜等物於加賀國、爲

勞饗渤海客也。

二月 朔 戊戌

源湛、越中守に任す。

清和天皇元慶七年

〔大日本史〕國郡司越中守關

源滿元慶七年二月任

〔大日本史〕國郡司越中關

權掾冰康宗元慶五年

擬大領名國郡司越中關

擬少領名國郡司越中關

利波氏高元慶七年三月見

〔類聚國史〕七十三 二年六月廿五日癸酉任相撲司

正五位下兼行越中守源朝臣湛

三人爲右司

三月朔

四日越中國調貢期限の延期を請ふ之を許す

〔三代實錄〕四十四 四日庚午越中國司言貢調期限在當年十一月望請延期明年

四月卅日以前貢進太政官處分四箇年依請焉

三月朔

二月

正月

十二月

十一月

十月

九月

八月

七月

六月

五月

四月

三月

二月

正月

十二月

十一月

十月

九月

八月

七月

六月

五月

四月

三月

二月

正月

十二月

十一月

十月

九月

八月

七月

六月

五月

四月

三月

二月

正月

光孝天皇

二十八日、正六位上、新治神に從五位下を授く、

〔三代實錄〕四十四 廿八日庚申、紀伊國從四位下、勳八等丹生比賣神、伊太郡倉神

並授從四位上、越中國正六位上、新治神、因幡國正六位上、虫井神、伯耆國正六

位上、天照高泊女神、天乃神、奈斐神、天高神、安藝國正六位上、風伯神、並從五位下、

〔參考〕

〔神社叢錄〕三十九 新治神社 祭神八幡三座 神社 新川郡生地村に在る、同

〔神祇志料〕十五 新治神 今新川郡生地村にあり、神社叢錄新川縣式社調撰

波に没し、社殿悉く敗れ、今五十町

〔大日本史〕二九十九 神祇志料 越中國正六位上、新治神、因幡國正六位上、虫井神、伯耆國正六

〔三官帳不載者〕

新治神社、今在新川郡、舊中津郡、海邊村、海邊村、見、社址、後世潮退、乃更治荒蕪、名生地

社、此元慶七年、自正六位上、進從五位下、實錄

二月

正月

十二月

十一月

十月

九月

八月

七月

六月

五月

四月

三月

二月

正月

十二月

十一月

十月

九月

八月

七月

六月

五月

光孝天皇

仁和二年丙午 紀元千五百四十六年

正月 辛巳

十六日、^丙左京權亮藤原高尙、越中介に任す、

〔三代實錄〕^{四十四} 十六日丙申、左京權亮從五位下藤原朝臣高尙、爲越中介、

○仁和三年二月十七日の條に、從五位下行越中權介藤原朝臣高松爲左京亮の文あり、尙松音相同し、或は同人ならん、

〔大日本史〕^{三百八十四} 國郡司、越中、關

介良峯農省元慶七年三月見

十二月 乙巳

十八日、^{壬戌}新川郡擬大領伊禰頭眞益、私物を以て官用を助けしに依り、外從五位下を授く、

〔三代實錄〕^{九十四} 十八日壬戌、越中國新川郡擬大領正七位上伊禰頭眞益、以私物助官用、代民濟公、仍授借外從五位下、

〔參考〕

〔大日本史〕^{三百八十四} 國郡司、越中、關

新川郡擬大領伊禰頭眞益、仁和二年十二月見

仁和三年丁未 紀元千五百四十七年

二月 乙巳

五日、^{己酉}貢調の期を違へる爲め、越中國司等の位祿公廨を奪ふ、

〔三代實錄〕^{五十} 五日己酉、奪美濃下野若狹能登越中越後丹後但馬因幡伯耆石見等國司位祿公廨、以貢蘇遠期也、舊制、貢蘇遠期、國司五位已上科違勅罪、六位

已下不論廢贖、決答六十、今改前格、施此新制、

十七日、^{辛酉}治部大輔橘休蔭、越中守に任す、

〔三代實錄〕^{五十} 十七日辛酉、從五位下行越中權介藤原朝臣高松爲左京亮、^中界治部大輔正五位下橘朝臣休蔭爲越中守大輔如故、

〔大日本史〕^{三百八十四} 國郡司、越中、關

權掾小野美材仁和三年二月任

宇多天皇

〔大〕寬平七年乙卯（紀元千五百八十五年）

十二月（癸未）

九日、（癸未）越中國に弩師を置きて、不虞に備ふ。

〔類聚三代格〕（五）

本政官符

右得越中國解備此國有弩無師不習機發若有不虞卒爾何爲望請省史生員置弩

師者大納言正三位兼行左近衛大將皇太子傅民部卿陸奥出羽按察使源朝臣能有宣奉勅依請

寬平七年十二月九日

寬平九年丁巳（紀元千五百五十二年）

正月（丁巳）諸國點貢の采女の數を定め、越中國は一人とす。

〔類聚三代格〕（四）

太政官符

一應改貢支額采女卅七人

山城國一人（大和以下）越中國一人（丹波以下）

右中納言兼右近衛大將從三位行春宮大夫藤原朝臣時平宣奉勅頃年點貢支

額采女或國五六人或國無一人尋其由緒緣無乏例爰甲國有死關替用乙國之人

政之無例競望不絕自今以後宜依件限唯本數過此之國若有其闕更不補替願宛

新加之國漸令點進

寬平九年正月廿五日

六月（乙巳）

橘秋實越中守太少

〔大日本史〕（三百八十四）

橘秋實寬平九年六月見

權掾橘正行寬平三年三月見

擬大領（國）秦常岡寬平三年三月見

宇多天皇寬平九年

一六九

宇多天皇

〔一〕寬平七年乙卯紀元千五百五十五年

十二月癸未

九日、越中國に弩師を置きて、不虞に備ふ。

〔類聚三代格〕五

本政官符

〔應省史生員置弩師事〕

〔右得越中國解備此國有弩無師、不習機發若有不虞卒爾何爲、望請省史生員置弩師者、大納言正三位兼行左近衛大將皇太子傳民部卿陸奥出羽按察使源朝臣能有宣奉勅依請。〕

寬平七年十一月九日

寬平九年丁巳紀元千五百五十七年

正月朔

二十五日、諸國點貢の采女の數を定め、越中國は一人とす。

〔類聚三代格〕四

本政官符

〔應改貢交額采女冊七人事〕

山城國一人大和以下越中國一人丹波以下

右中納言兼右近衛大將從三位行春宮大夫藤原朝臣時平宣奉、勅、頃年點貢交額采女或國五六人、或國無一人、尋其由緒、緣無之例、爰甲國有死闕、替用乙國之人、

政之無例、就望不絕、自今以後、宜依件限、唯本數過此之國、若有其闕、更不補替、願宛

新加之國、漸令點進。

寬平九年正月廿五日

六月乙巳

橘秋實、越中守太沙。

〔大日本史〕

橘秋實、寬平九年六月見。

權掾橘正行、寬平三年三月見。

擬大領名聞秦常岡、寬平三年三月見。

宇多天皇寬平九年

介貞登寬平四年二月任 伊權守
 掾紀典雄寬平九年六月見
 擬大領名 飛鳥戶春實寬平九年六月見
 擬少領名 栗田時世寬平九年六月見
 擬少領名 物部茂生寬平九年六月見
 介藤原俊蔭延喜二年十月任

醍醐天皇

延喜三年癸亥

紀元一千五百六十二年

六月

庚午朔

二十日、已越中等十一國に讀師を置く、

〔類聚三代格〕三

太政官符

應置十一箇國讀師事

- 山城國 攝津國 伊賀國 參河國 伊豆國 若狹國 加
- 賀國 能登國 越中國 丹後國 淡路國

右得僧綱條條謹案齊衡二年八月廿三日格條、頃年之例立五階三階令補講讀師是協格意量才委任、凡厥諸國置講讀師者、將令邦家照於戒珠之光天下護於禪定之化非智非行如此道何、宜自今以後緣件階業俾申補任者、而今至件等國只補講師不任讀師、每修御願以國分僧爲之讀師、件僧等既無階業安有智行、又立用施供不異正職、加以七大寺外加來立義、得業者其數不少階業之人八宗是多、補任之國七道數少、或年及七十、僅任讀師、或算至八十、被補講師、遂衰老之身亡於中路、著年之限暗於說經、望闕被補任件等國讀師以修御願、然則講讀之任自協格制、修學之輩莫愁身老、謹請 官裁者、右大臣源宣奉、勅除和泉志摩飛騨隱岐等國之外依請

延喜三年六月廿日政事要略第五十五

延喜八年戊辰

八月庚子朔

醍醐天皇延喜八年

醍醐天皇延喜二十年

礪波郡擬大領射水常行延喜十年七月見
礪波郡擬大領飛鳥戶嘉樹延喜十年七月見
礪波郡擬少領利波保影延喜十年七月見
礪波郡擬少領利波春生延喜十年七月見

延喜二十年庚辰 紀元千五百八十五年

二月 甲午朔

惟親、越中守たり、

〔大日本史〕 三百八十四國郡司越中守關

惟親 姓延喜二十年二月見

延喜中 紀元千五百六十二年より千五百八十二年まで

越中國の神社中、礪波郡の七座、射水郡の十三座、婦負郡の七座、新川郡の七座を、神名帳に載す、

〔延喜式〕 十、神祇十、神名下

越中國卅四座 大一座、小卅三座
礪波郡七座 小

高瀬神社

林神社

比賣神社

淺井神社

射水郡十三座 大一十一座、小二座

射水神社 名神

物部神社

久目神社

速川神社

礪部神社

草岡神社

婦負郡七座 小

姉倉比賣神社

白鳥神社

熊野神社

醍醐天皇延喜二十年

長岡神社

荊波神社

雄神社

道神社

加久彌神社二座

布勢神社

楯田神社

箭代神社

氣多神社

速星神社

多久比禮志神社

杉原神社

鶴坂神社

新川郡七座小並

神度神社

櫻原神社

日置神社

雄山神社

〔大日本史〕二百五

越中八日

彌波郡七座

高瀬神社又稱氣多社二月本實は寶龜十年略す

長岡神社今在縣中三十餘村總社村

林神社今在若

荆波神社本郡地名有紗本國新川郡有天荆郡荆訓也布萬葉集

比賣神社今在宮島

雄神神社今在收む延曆十四年八月

淺井神社今在赤丸村或云延喜制七座並列小社延喜

射水郡十三座

射水神社又曰二上神二月本實は寶龜十一年略す

道神社今在相傳祀道公祖彦屋主田心命其神裔今尙奉祀事稱宮川氏云

物部神社今在坂村

加久彌神社二座今在

久目神社今在池田傳言祀大來目命土人

布勢神社今在布蓋祀布勢朝臣祖大彥命延喜式

速川神社今在蓋祀瀨織津比咩神延喜式

櫛田神社今在蓋祀瀨織津比咩神延喜式

磯部神社今在

箭代神社今在八代村

草岡神社今在古

氣多神社今在宮村一宮山諸社根元記諸神記並延喜制十二座並列小社

延喜

延喜天皇延喜二十年

婦負郡七座

姉倉比賣神社、○今在新川郡舟倉村

速星神社、○今在門村

白鳥神社、○今在相傳、祀日本武尊土人仲哀帝時、越國獲白鳥於此地獻之、白鳥即

神靈所化、仍祀焉、取土人傳紀、參

多久比禮志神社、○今在鹽村

熊野神社、○今在新川郡

杉原神社、○今在田村

鵜坂神社、○今在收和十二年九月

新川郡七座

神度神社、○今在森尻村

建石勝神社、○今在吉島村

檨原神社、○今在河川町

八心大市比古神社、○今在市村

日置神社、○今在收和十二年九月

布勢神社、○今在施爪村

雄山神社、○今在收和五年九月廿

官帳不載者

鵜坂姉比咩神社

鵜坂妻比咩神社、二社今不詳所在、○婦負郡有鵜坂神社、或以爲此神、然位階不合、即其爲式外、明矣、故序于此、

移田神社、今在彌波郡、郡名據土人說、貞觀五年、三座竝自正六位上進從五位下、

楯杵神社、○今在收和六年三月廿

新川神社、○今在收和九年二月廿

御田神社、○今在收和九年十月

加積神社、○今在收和十五年十二月

手向神社、○今在收和二年五月

石武雄神社、○今在收和三年十月廿

新治神社、○今在收和七年十二月

越中の稅率、貢蘇の期限、交易雜物、運賃及ひ健兒器仗、驛傳馬の數を定む

〔延喜式〕二十六

主稅上

諸國出舉正稅公廩雜稻

越中國正稅公廩各卅万束大學寮新一万束國分寺新三万束京法華寺新二万五千束文殊會新二千束修理池溝新三万束救急新十三万束俘囚新一万三千四百卅三束

〔延喜式〕

主計十四

越中國日行程上九日十七海路廿七日

調白疊綿二百帖自餘輸白細屯綿浮瀝人別輸

唐韓橫州六合漆漆管銀五合自餘輸綿海橫便盛疊綿及白綿其積底各數中男作物紙紅花茜漆胡麻油鮭楚割鮭鮓鮭水頭鮭背腸鮭子雜腊

〔延喜式〕

民部十三

年析別納租穀

伊賀國石二千略中能登國斛四千越中國石四千越後國斛七千略

右二十五國各別納租穀內隨官符到充位祿季祿衣服等析

〔延喜式〕

民部十三

年析別貢雜物

伊賀國紙麻五斤略中越前國羊角五十管紙麻一百斤越中國羊角越後國羊角

國六具略中

右別貢雜物並依前件自餘雜藥見典藥式其運送係夫各給路糧

〔延喜式〕

典藥十七

諸國進年析雜藥

北陸道

略中越中國十六種

白朮白芷各十一斤藍漆大黃各五斤苦參夜干各十斤黃耆三斤樺子五升署預二斗九升桃人六升附子三斗蜀椒四升甘葛煎三升獺肝二具熊膽四具零羊角四具

略中

右依前件附貢調使送寮檢取訖即與返抄其太宰便附別貢使

〔延喜式〕

大膳十三

諸國貢進菓子

越前國甘葛煎一斗署預二加賀國甘葛能登國甘葛越中國甘葛煎越後國甘葛煎略中

國一斗葛煎略中

右依前件其數隨時增減隨到檢收附內膳司但甘葛煎直進藏人所

〔延喜式〕兵部二十三

諸國貢蘇番次

能登國九壺六口各大小一升

越中國十壺六口各大小一升

越後國十一壺七口各大小一升

右十箇國爲第四番辰戌年略○中

凡諸國貢蘇各依番次當年十一月以前進了略○下

交易雜物

略○上 越中國 絹百疋 布一千二百段 履折牛皮四張 曝黑葛 略○中

右以正稅交易進其運功食並用正稅但下野國砂金者使備夫採食亦充正稅其太宰雜油卅石中男作物若漏此數者更不交易

〔延喜式〕主稅上十六

諸國運漕雜物功貨

北陸道

略○中 越前國陸路廿四 海路廿比樂湊漕取賀津船貨石別稻七把挾抄賀能登水越

略○中 越中國陸路八東十 海路挾抄七東水手卅東自餘石准越前國二把
諸國健兒
山城國卅人 略○中 越前國一百人
加賀國五十人 能登國五十人
越中國五十人 略○下

〔延喜式〕兵部十八

略○中 越前國 征箭四領 橫刀十口 弓廿張 能登國 征箭一領 橫刀三口 弓七張

右每年所造具依前件其樣仗者色別一箇附朝集使進之略○下

〔延喜式〕兵部省八

諸國驛傳馬

北陸道

若狹國驛馬 彌美流 依

越前國驛馬 津原八正 鹿野藤五郎 丹生朝傳馬 敦賀丹生足羽
 加賀國驛馬 初倉湖津安宅比樂田傳馬 江沼加賀
 能登國驛馬 獨才越蘇
 越中國驛馬 坂本川合巨理白城縣瀨水傳馬 福波射水婦真

〔參考〕

〔和名類聚抄〕 五 越中國 國上府在射水郡行程管四步正公各千九百九町五段八十
 四萬四千三百三十五把雜稻 彌波止奈射水豆伊三婦負比爾新川加瀨布

○延喜式卷二十四主計上の行程日數と同じからず、

〔大日本商業史〕

國名	陸路		海路	
	行	程	行	程
若狹	上二日	十束五把	自野津至大津 船賃石別一升、挾抄功四斗、水手三斗、但挾抄一人水手四人酒米五十石	酒 貨
越前	上七日	廿四束	自比叺津渡敦賀津、船賃石別七把、挾抄四十束、水手廿束、但挾抄一人水手四人酒米五十石、加賀能登、越中國等亦同、自敦賀津運鹽津驛	貨
加賀	上十二日	廿四束	貨米一斗六升、自鹽津津、大津、船賃石別米二升、屋賃石別一升、挾抄六斗、水手四斗、自大津、運京、船賃石別米八升、自餘雜物斤量准米	貨
陸能登	下九日	七十八束	自加鴨津渡敦賀津、船賃石別二束六把、挾抄七十束、水手卅束、自餘准、越前	貨

道		陸		海	
越中	越後	佐渡	越中	越後	佐渡
上十七日	上十四日	上十四日	上十七日	上十四日	上十四日
下九日	下七日	下七日	下九日	下七日	下七日
七十八束	百五束	百八束	七十八束	百五束	百八束
廿七日	廿六日	四十九日	廿七日	廿六日	四十九日
前國、自直理渡津敦賀津、船賃石別二束二把、挾抄七十束、水手三十束、自餘准、越前	前國、自浦原津渡敦賀津、船賃石別二束六把、挾抄七十束、水手卅束、自餘准、越前	前國、自津渡敦賀津、船賃石別一束四把、挾抄八十五束、水手五十束、自餘准、越前	前國、自直理渡津敦賀津、船賃石別二束二把、挾抄七十束、水手三十束、自餘准、越前	前國、自浦原津渡敦賀津、船賃石別二束六把、挾抄七十束、水手卅束、自餘准、越前	前國、自津渡敦賀津、船賃石別一束四把、挾抄八十五束、水手五十束、自餘准、越前

この表は、延喜式の主稅式に出づる諸國運漕雜物功漕の項及び式に出てる諸國行程の項によりて之を作れり、

東海東山山陰の三道は、陸運によりて京都に輻湊し、北陸の一道は、敦賀津に輻湊して鹽津に運し、湖を横きりて大津に漕し、以て京都に達したり、○下

- 越中國官舍納穀交替記 首尾共開失ナルカ故ニ原本コノ題アル「ナシ」トカウニヨリテ如此名稱チ後ニ附シタルナリ、越中國印「ナシ」ト捺捺ス
- 借西外一倉 收納新稻貳仟束 借北外一倉 收納新稻參仟束
 - 東後二屋 收納新稻參仟束 借東後三屋 收納新稻參仟束
 - 東後四屋 收納 稻參仟束 借西外二屋 收納新稻參仟貳佰壹束
 - 借南外西一屋 收納新稻柒仟伍佰束
 - 右廿間延喜十年十月十五日 醫師大初位下依智泰公廣範
 - 國司 守從五位下清原真人正基 介從五位下上毛野朝臣茂實 權掾從七

位上伊勢朝臣茂行

郡司 擬大領從八位上射水臣常行 擬少領從八位上利波臣保影

川上村

東中一板倉收納楠肆伯伍拾陸斛捌斗參升除年々交替定

右一間延喜十年十月十五日 醫師大初位下依智秦公廣範

國司 守從五位下清原真人正基 介從五位下上毛野朝臣茂實 權掾從七

位上伊勢朝臣茂行

郡司 擬大領從八位上射水臣常行 擬少領從八位上利波臣保影

不動西第一板倉基分長二丈八尺二寸四分 上長二丈六尺二寸八分廣一丈四尺一寸 塞長五尺五寸

四尺五寸四分廣 上長二丈六尺一寸八分廣四尺六寸

底敷額稻肆伯壹拾束五積寸高

收納穀參仟貳百壹斛天平寶字二年以神護六年以往 滿委高三尺五寸

大同二年九月十四日 主典蔭孫大初位下阿保朝臣氏丸

使采女佐正八位上多治真人真成

國司 掾正六位上板井朝臣御笠丸 少目從六位上滋野宿禰馬澤

郡司 擬大領從八位下利波臣田人 擬少領利波臣豐成

交替定長一丈八尺二寸五分廣一丈六尺二寸 塞長五尺九寸一

底敷額稻肆伯壹拾束五積寸高

收納穀參仟貳百壹斛天平神護二年以神護六年以往 滿委高一丈三寸

竿勘乘柴拾玖斛

定參仟貳百捌拾斛

延喜九年交替實錄曰濕損欠拾斛填納延喜十年稅帳

不動西第二板倉長四丈九尺一寸四分廣一丈八尺 塞長七尺四寸四分

底敷額稻陸伯柒拾束五積寸高

收納穀參仟陸伯捌拾肆斛參合肆勺柒撮未滿委高三尺五寸

貞觀四年八月一日史生 少初位下和邇部宿禰國繼

國司 權守從五位下橘朝臣春成 擬大領從八位上利波臣安真

郡司

加委穀柴伯壹斛

合肆仟參伯玖拾伍斛參合肆勺柒撮

貞觀六年七月八日 史生大初位下大私部善子丸

國司 權守從五位下橘朝臣春成 介外從五位下菅野朝臣尊松

郡司 轉擬大領大初位下品治部稻積 擬少領飛鳥戶造今貞

不動西第三板倉基長一丈八尺五寸七分 上尺六寸高一丈五尺七分四寸六分

塞長六尺六寸二分 三尺九寸二分

收納穀參任陸伯參斛貳斗玖升伍合貳勺尺委高一丈四尺九寸三分

大同二年九月十四日 主典蔭孫大初位下阿保朝臣氏丸

使采女佐正八位上多治比真人貞成

國司 據正六位上榎井朝臣御笠丸 少目從六位上滋野宿禰馬澤

郡司 擬大領從八位上利波臣田人 擬少領利波臣豐成

交替定長九寸六分 高一丈四尺六寸二分 塞三尺九寸三分 末長六尺四寸五分 分尺六

收納穀參任陸伯參斛貳斗玖升伍合參勺大同二年委 滿尺委高一丈四尺九寸三分

竿勘乘貳伯玖拾陸斛柒斗肆合捌勺

定參任玖伯斛

不動北第二板倉長三丈四寸五分 廣二丈九尺四寸九分 塞長六尺八寸五分二分

底敷額稻柒伯伍束積高五寸

收納穀肆任柒伯伍拾斛陸斗尺委高三丈九寸五分

天長四年十一月廿一日 少目大初位下朝原忌寸四上

國司 介從五位下藤原朝臣越雄 據從六位下小治田福雄 少目正八位上

武生宿禰二腹

郡司 別擬少領從八位上飛鳥戶造浦丸 擬主政利波宮成 擬主政中臣家

成 擬主帳秦人部古綿

交替定長三尺四寸五分 廣一丈五尺四寸九分 四 塞長六尺八寸五分 穹隆高一尺八寸

底敷額稻柒伯伍束積高五寸

不動西第五板倉東長一丈四尺一寸五分 下脫五尺四寸五分 上五丈二寸五分 南廣三丈三寸六分 下脫

三丈三分 塞長四尺五寸五分 北廣上四尺八寸八分 下脫

底敷額稻陸伯壹拾伍束積高五寸

收納穀陸任貳伯陸拾斛捌斗伍升捌合貳勺陸撮一委高

自他倉屋遷委

東後外三板倉納穀肆佰捌拾貳斛參斗肆升貳合伍勺
 東後中二板倉納穀柒佰肆拾陸斛參斗壹升伍合伍勺貳撮
 東一校屋納穀伍百參拾肆斛貳斗伍升
 東中一校屋納穀捌佰參拾壹斛
 東後一校屋納穀柒佰捌拾柒斛
 東後二校屋納穀壹仟壹佰壹拾捌斛壹斗陸合壹勺肆撮
 東後三校屋納穀肆佰肆拾捌斗參升肆合壹勺
 東後四校屋納穀肆佰伍拾斛
 東後外一倉納穀捌佰陸拾參斛
 右倉屋納穀去昌泰四年七月三日言上今件失火燒損穀之內所全之數所委納也而不全材木有納物之尾加以交替實錄帳爲不中用穀之由注載已了然而官帳之穀不能除弄仍遷委全如件
 延喜十年七月九日 史生從八位下紀朝臣廣宗
 國司 守從五位下清原真人正基 權掾從七位上伊勢朝臣茂行
 郡司 擬大領從八位射水臣常行 擬大領從八位上飛鳥戶嘉掬 擬少領從

八位上利波臣春生

東第三屋長七丈高一丈廣二丈二尺四寸收納新穀伯陸拾壹斛
 借東後三校倉收納稻下壘 更納新稻肆仟束
 南二屋收納稻下壘 更納新稻參仟束
 借東外五少倉收納稻下壘 更納新稻壹仟肆伯陸拾束
 借東後外屋收納稻下壘 更納新稻參仟束
 借東五屋收納稻下壘 更納新稻參仟束
 西外屋收納稻下壘 更納新稻肆仟束
 西外一屋收納稻下壘 更納新稻參仟束
 東三屋收納稻下壘 更納稻伍仟束
 南三稅屋收納稻 更納新稻壹仟五伯貳拾束
 右十一間延喜十年十月十五日 醫師大初位下依智秦公廣範
 國司 守從五位下清原真人正基 介從五位上毛野朝臣茂實 權掾從七位
 上伊勢朝臣茂行
 郡司 擬大領從八位上射水臣常行 擬少領從八位上利波臣保影

意斐村

東後第一板倉四尺長二丈四尺四寸八分廣一丈二分八寸

收納楠陸佰貳斛貳斗參升除年々交

右一間延喜十年十月十五日 醫師大初位依智泰公廣範

國司 守從五位下清原真人正基 介從五位下上毛野朝臣茂實 權掾從七

位伊勢朝臣茂行

郡司 擬大領從八位上射水臣常行 擬少領從八位上利波臣保影

不動東後外第三板倉長四丈八尺四寸九分廣二丈 塞長八尺四寸五分

底敷額稻玖佰參拾束五積

收納穀陸仟伍佰玖拾斛 滿尺一丈一丈五

貞觀五年四月卅日 博士大初位上御船宿禰有行

國司 權守從五位下橘朝臣春成 介外從五位下菅野朝臣高松

郡司 轉擬大領外大初位下品治部稻積 擬少領飛鳥戶造貞門

延喜九年交替實錄曰濕損欠伍斛填納延喜十年稅帳

不動東第一板倉東長一丈九尺三寸三分南北高一丈七寸九分 塞長六尺五寸五分 上長

廣三尺

底敷額稻貳佰束五積

收納穀壹仟玖拾柒斛陸斗 滿丈一尺一

大同三年七月四日 蔭孫正八位勳七等讚岐公棟公

使正八位上守刑部少判事紀朝臣永成

國司 據正六位上板井朝臣御笠丸 大目從六位上滋野宿禰繼長

郡司 擬大領利波臣豐成 擬主政中臣家成

交替定長一丈九尺三寸三分廣一丈六 塞長六尺三寸五分欠一寸五分 末長六

三尺

底敷額稻貳佰束五積

收納穀壹仟玖拾柒斛陸斗神隱景雲 滿尺高一丈三寸七

不動東第二板倉四長一丈八尺九寸八分廣一丈 塞長六尺五寸

收納穀壹仟壹佰肆拾陸斛貳斗天平五年以後往觀也 滿尺委高九

天平勝寶二年六月廿七日 史生從八位下尾張連少炸

國司 介正六位上內藏忌寸繩丸

醍醐天皇延喜二十年

郡司 少領外從八位下利波臣虫足 主帳外大初位峻部北理

交替定 長二丈九尺一寸八寸 廣一丈八寸八分 塞長五尺五寸

收納穀壹仟壹佰肆拾陸斛貳斗 三年 平 委 滿 欠 四尺六寸

竿勘乘柒拾斛玖斗

定壹仟壹佰伍拾肆斛壹斗

延喜九年交替實錄曰濕損欠壹斛貳斗伍升填納延喜十年稅帳

不動東第三板倉 長四丈七寸七分 廣二丈八尺 塞長六尺五寸

底敷顯稻柒佰參拾束 五積寸高

收納穀柒仟貳佰玖斛參斗玖升 滿 一尺五寸

弘仁九年十月十二日 少目從八位下錦部村主稻手丸

國司 介從五位下石川朝臣國助

郡司 少領外少初位下利波臣豐成 主政外從八位下飛鳥戶造有成

交替定 長四丈七寸七分 廣二丈八尺 塞長六尺五寸 欠五穹隆高尺

收納穀柒仟貳佰玖斛參斗九升 弘仁 九 滿 五寸 欠一丈七尺

竿勘乘貳佰陸拾玖斛參斗玖升

定陸仟玖佰肆拾斛

延喜九年交替實錄曰濕損欠壹拾斛 填納延喜十年稅帳

不動東第四板倉 長四丈一寸七分 廣二丈七寸一分 塞長七尺九寸五分

底敷顯稻陸佰壹拾陸束 五積寸高

收納穀伍仟玖佰捌拾壹斛參斗 滿 尺二寸八分

天長七年八月三日 少目從七位上大神朝臣廣行

國司 介從五位下御野宿禰清庭 掾從六位上小治田朝臣稻雄

郡司 擬大領外正八位下利波臣甥丸 轉擬少領少初位下秦人部益繼

交替定 長一丈一寸七分 廣一丈七寸七分 塞長七尺九寸二分 欠二寸二分

底敷顯稻陸佰壹拾陸束 五積寸高

收納穀伍仟九佰捌拾壹斛參斗 年 委 七 滿 尺五寸八分五

竿勘乘貳拾捌斛玖升

定陸仟壹拾斛貳斗玖升

延喜九年交替實錄曰濕損欠壹拾伍斛 地 納 延 喜 帳

不動北外第二板倉 長八尺一寸六分 廣一丈四尺二寸

收納穀捌佰伍拾陸斛伍斗 滿委一尺六寸

延曆十年六月六日 大目正六位上勳七等豐津造人成

國司 守從五位下藤原朝臣應養

郡司 擬大領正六位上利波臣大田

交替定 長一丈六尺五寸廣一丈一丈 塞長四尺二寸乘二

收納穀捌佰伍拾陸斛伍斗 延曆十年 滿委六寸欠七寸一尺

竿勘乘貳拾參斛伍斗

定捌柒佰玖拾斛伍斗伍升

延喜九年交替實錄曰濕損欠壹斛捌斗柒升伍合 十年納延喜

不動北第二板倉 長一丈八尺一丈四尺一丈六 塞長六尺七寸三

收納穀參仟陸佰參拾肆斛 天字二年以前 滿委四尺

兼龜二年七月廿二日 正六位上守部公人成

國司 員外介正六位上勳七等藤原朝臣長繼

郡司 大領外正口位丁下利波真公

交替定 長一丈八尺一丈四尺一丈六尺 口六寸

收納穀參拾陸斛參拾肆斛 年委二 滿委長一尺

竿勘乘參拾陸斛柒斗

定參仟陸拾陸斛柒斗

不動北第二板倉前第二板倉 長一丈四分三寸四分一丈五尺九寸八分四尺 塞長六分九尺一六尺

底敷顯稻貳佰捌拾肆束 五寸高 滿委四尺六寸

收納穀貳仟玖佰伍拾斛 滿委四尺六寸

仁壽二年十一月七日 醫師從八位下角山公魚成

國司 介從五位下山代宿禰氏益

郡司 轉擬大領大初位下中臣御成 擬主政大初下春米吉良

不動南第一板倉 長一丈八尺一丈二尺二寸廣一丈一丈 塞長七尺八寸

收納穀參仟貳佰壹拾捌斛貳斗貳升 天字五年以前 滿委三寸

天平癸字元年十二月四日 從七位下田口朝臣大豆丸

國司 守從五位上茨田王

郡司 少領外從八位下利波臣虫足 主政外大初位上螭部北理

交替定尺一丈八尺二寸廣一丈六寸塞長五尺八寸欠三寸

收納穀參仟貳佰拾捌斛貳斗貳升元天平字滿三寸欠五寸

竿勘乘柒拾伍斛陸斗肆升

定參仟貳佰玖拾參斛捌斗陸升

不動南第二板倉長二丈一尺九寸一分廣一丈七尺四分塞長七尺五寸四分

底敷額稻伍佰肆拾壹束積高五寸

收納穀陸仟貳拾參斛貳斗柒升滿尺委高一丈九寸五分

齊衡二年六月廿九日 權史生從七位上大友由佐

國司 介從口位下橘朝臣門雄 據正六位上大原真人宗公

郡司 擬大領外從位上利波臣氏良 擬大領少初位下中臣御成

延喜九年交替實錄曰濕損欠伍拾斛

不動西第二板倉長二丈一尺九寸一分廣一丈七尺四分塞長七尺六寸五分

底敷額稻伍佰束積高五寸

收納穀肆仟參佰壹拾貳斛柒斗陸升

延曆二年六月廿一日 史生從八位刑部首越人

國司 據正六位上藤原朝臣真繼 大目正六位上平群清足

郡司 擬大領從七位上利波臣大田

交替定尺一丈二尺廣二丈六尺一丈三寸二分 塞長七尺六寸五分欠六寸五分

底敷額稻伍佰束積高五寸

收納穀肆仟參佰壹拾貳斛柒斗延曆二年滿一丈高一丈七尺

竿勘乘壹佰捌拾伍斛肆斗玖升

定肆仟肆佰玖拾捌斛貳斗五升

不動西第五板倉長一丈九尺八寸二寸廣二丈塞長八尺四寸

收納穀肆仟肆佰陸拾貳斛柒斗參升肆合陸勺

承和十三年九月一日 史生大初位下國瀨繩丸

國司 介外從五位下味真公御助丸

郡司 少領外從八位下利波臣與繼 主外少初位下中臣御成

延喜九年交替錄實曰濕損欠壹拾肆斛填納延喜稅帳

不動西第三板倉長二丈七尺七寸四分廣三丈三寸五分塞長七尺三寸三分

收納穀參仟伍佰柒拾捌斛柒斗肆升柒合壹勺九撮 滿尺委四寸三分

元慶七年三月十九日 史生從七位下佐伯宿禰河雄

國司 介從五位下良岑朝臣農省

郡司 擬大領從七位上穗積穀守 擬少領從八位上利波臣氏高

延喜九年交替實錄曰盜失欠壹拾斛填納延喜十年稅帳

不動 西第六板倉長二丈九尺四寸二分廣二丈六尺七分四寸五分 塞長三尺五寸五分

底敷額稻參佰陸拾斛 積高五寸

收納穀肆仟捌拾斛 滿委高七寸九分

元慶二年二月三日 史生從八位上矢部廣宗

國司 介外從五位下大春日朝臣安永 椽從六位上伴宿禰有也

郡司 擬大領外大初位下品治部鳴雄 擬少領白丁飛鳥戶造貞氏

不動 北外後第口板倉長二丈八尺五寸一分廣一丈一尺 塞長八尺五寸九分

底敷額稻參佰捌拾束 積高五寸

收納穀壹仟捌拾肆斛陸斗

加委穀參佰斛

合穀貳仟壹佰壹拾肆斛陸斗

寬平三年三月廿九日 史生從七位下小野朝臣真人

國司 權掾從八位上橘朝臣正行

郡司 擬大領正六位上秦忌寸常岡

延喜九年交替實錄曰濕損欠伍斛柒斗

不動 北外第一板倉長二丈七尺七寸廣一丈七尺

收納穀壹仟肆拾貳斛玖斗貳合貳勺 滿委高一丈二寸

寬平九年六月五日 醫師從七位佐伯宿禰尼主

國司 守從五位下橘朝臣秋實 掾正六位上紀朝臣典雄

郡司 擬大領正八位下飛鳥戶造春實 擬少領无位粟田時世 擬少領无位

物部連茂生

東後六屋收納穀下盡吏納新穀壹伯玖拾貳斛五斗貳升玖合伍勺

東後四屋收納稻下盡吏納稻貳仟束

借東後外一屋收納新稻參仟束

北外後第 板倉長九丈一分九寸一分廣一丈七尺八寸八分 收納新稻柒仟束

東第五板倉長一丈四尺九寸五分高八尺八寸

北第三板倉 長二丈六尺一寸三分、廣一丈

東第七屋 長四丈廣二丈、収納新稻壹萬壹仟束

延長八年庚寅 紀元千五百九十五年

六月 朔癸巳

葛井清明、越中守に任す、

〔大日本史〕 三國郡司、越中守 關

葛井清明 延長八年六月任

村上天皇

天曆中 同紀元千六百六十七年より

射水郡の一部、東大寺の封戸となる、

〔大日本史〕 四百 射水郡、中領郷十、和名 阿努、十三、在郡西北、略 中 天曆中、

爲東大寺封戸、東大寺字納、在阿努東北、有字奈比河、集 有箭代社、延喜 八代保、東

○今八代 莊 安乎浦 萬葉集 古江、○今古江村 有古江村 萬葉集 新 亦爲東大寺封
戸 東大寺 文書

圓融天皇

天祿元年庚午 三紀元千六百七十一年

僧海蓮寂す、

〔今昔物語〕 十四 越中國僧海蓮持法花知前世報語第十五、

今昔越中ノ國ニ海蓮ト云フ僧有ケリ、若ヨリ法花經ヲ受ケ習テ、日夜ニ讀誦ス
ル間、序品ヨリ觀音品ニ至ルマデ廿五品ハ暗ニ思エテ誦シケリ、殘テ三品ヲ年
來思エムト爲ルニ更ニ不思議ザリケリ、然レバ此ノ事ヲ歎テ、立山、白山ニ參テ祈
請ス、亦國國ノ靈驗所ニ參テ祈リ申スニ尙不思議、而ル間海蓮夢ニ菩薩ノ形
ナル人來テ海蓮ニ告テ云ク、汝デ此ノ三品ヲ暗ニ思ザル事ハ、前世ノ宿因ニ
依テ也、汝デ前生ニ蟋蟀ノ身ヲ受テ僧房ノ壁ニ付タリキ、其ノ房ニ僧有テ法花

圓融天皇天祿元年

經ヲ誦ス、蟋蟀壁ニ付テ經ヲ聞ク間、二入卷ヨリ七卷ニ至マデ誦シ畢ツ、八卷ヲ初一品ヲ誦シテ後僧湯ヲ浴テ息ヲムガ爲ニ壁ニ寄り付クニ、蟋蟀ノ頭ニ當テ被壓欲レヌ、法花ノ廿五品ヲ聞タル功德ニ依テ、蟋蟀ノ身ヲ轉ジテ人ト生レテ僧ト成テ法花經ヲ讀誦ス、三品ヲバ不聞ザリシニ依テ、其三品ヲ暗ニ思ユル事无シ、汝テ前世ノ報ヲ觀ジテ吉ク、法花經ヲ讀誦シテ菩提ヲ可期シト宣フト見テ、夢覺ヌ、其ノ後海運本縁ヲ知テ彌ヨ心ヲ至シテ、法花經ヲ讀誦シ、佛道ヲ願テ、勤ニ修行シケリ、海運天祿元年ト云フ年、失ニケリトナム語リ傳ヘタルトヤ、

〔元亨釋書〕

十九

釋海運、越之中州人、持法華、二十五品、諷誦通利、後三品不能誦、

勤力勵志、久如不通、乃上郡之立山及諸靈區、難行苦行、祈求誦憶、夢一菩薩語曰、汝先身為蟋蟀、在僧房壁、其比丘誦法華、蟋蟀聽之、普門品了、僧疲勞、放身於壁、蟀遭壓死、聞法力故、轉得人身而讀法華、不聞三品、故不能誦、覺後益勉、漸通三品、天德元年逝。

○元亨釋書、天德元年となす、恐らくは謬ならん。

天祿中

紀元千六百三十二年より
全千六百三十二年まで

藤原仲遠、越中守たり、

〔元亨釋書〕 十七 越中太守藤仲遠、天性慈順、雖在仕官、常志山林、軍中馬上、口唱經咒、其日課法華經、般若理趣分、普賢十願、尊勝隨求、彌陀大咒等、未有缺也、一生之間、讀法華萬餘部、聽法華講千餘座、造佛像、寫經典、不可勝記、臨終時、天樂天香、充塞家室、合掌曰、我今生兜率言已而逝。

一條天皇

長德三年丁酉

紀元千六百五十七年

八月 朔 癸巳

大内記紀齊名、越中權守たり、

〔本朝文粹〕

七

從五位下行大内記兼越中權守紀朝臣齊名解申進申文事辨申文章博士大江朝臣匡衡愁申學生同時棟省試所獻詩病累瑕瑾狀

○本文
省異ナ文

醍醐天皇天祿中 一條天皇長德三年

長德三年八月十五日從五位下行大内記兼越中權守紀朝臣齊名

〔參考〕

〔續往生傳〕 一條天皇者圓融院之子也、時之得人也於斯爲盛、略中文士則匡衡以言齊名、宣義積善爲憲、爲時孝道相如、道濟云々、皆是天下一物也、

長曆二年戊寅 九紀元千六百

八月 乙、丑

二十五日、丑伊勢齋王の大神宮に參入せらるを以て、大祓使を諸國に發し、北陸道には大中臣爲輔を遣はす、

〔類聚符宣抄〕

大祓使事

太政官符五畿内諸國司

使從五位下大中臣朝臣爲元

略○中

太政官符北陸道諸國司

使從五位下大中臣朝臣爲輔

略○中

右得神祇官解稱伊勢齋王來九月十一日可參入大神宮、仍爲令祓清諸國差件人、宛使依例申送者、發遣如件諸國承知、依例行之、符到奉行、

左少辨正五位兼衛門權佐土左權守平朝臣 右大史正六位上高橋朝臣

長曆二年八月廿五日

釋鈴一口 依位階、京畿不給

後冷泉天皇

康平四年辛丑 二紀元千七百

十二月 庚辰

源家賢、越中權守に任ず、是歲藤原正家、越中守たり、

〔大日本史〕 三百八十四 國郡司越中守 源家賢 康平四年十二月任權官、

後冷泉天皇康平四年

藤原正家 康平四年十二月見
 權介藤原泰時 永觀二年春見
 權介刑部理風 永觀二年春任
 權介飯高市光 長保元年秋任
 掾錦良正 寬弘四年 月任
 介藤原兼信 寬弘七年 月任
 介信任 長元四年七月見
 介源祐貞 長元五年春任
 權介源祐眞 承永二年 月任
 大目大原常行 康平元年正月任
 大掾射水好任 康平二年 月任
 康平七年甲辰 紀元千七百二十四年

三月 朔丁酉

前出羽守源義家、狀を上り征夷の功を以て越中守に補せられんことを請ふ、是に至りて之を許す、

〔朝野群載〕

史籍集覽本

依勤功申受領吏

前出羽守從五位下源朝臣義家誠惶誠恐謹言、

請特蒙 天恩依行口(行口一本作征夷之勳)功被拜任越中國守闕狀、

右義家謹檢案內諸州刺史辭退之後、拜任要國之輩、蹤跡多存、不遑毛舉、况乎儒學
 勳功之人採於(採)異常者也、爰親父賴義朝臣、當勤王之選、蒙征夷之詔、任與州刺
 史、兼任鎮守府將軍、且思家門之名、且恐朝廷之議、殊振武威、遠赴邊塞、戎狄之爲
 也、其力拔山、其居因嶮、騎驥之駿足、習虎狼之驍勇、及臨戰場、彌成激怒、百萬之衆
 戈鋌之勢、中國之人、不可敢當、而旁施兵略、不損皇威、討擊醜虜、平定蠻貊、斬魁帥之
 首、驚衆庶之眼、開關以來、未會有如此比、義家存扶親之誠、勵奉公之節、不顧身命、無
 避矢石、其擊夷戎、新蒙褒葬、以賴義朝臣任伊豫守、以義家任出羽守、然而南海東山
 其程渺焉、雖喜仁恩之適及、猶恨勳功之遠隔、是以爲專孝、思辭出羽守、然間越中國
 守、已有其闕、若優軍功、何不拜任哉、昔班超之討西域、早遇漢家封侯之賞、今義家之
 征東夷、欲浴越州(越)傳城之恩、所申之旨、誰謂非據、望請 天恩依征夷之功、被拜
 任越中守闕將令、後昆勵立身報國之志、義家誠惶誠恐謹言、

後冷泉天皇康平七年

康平七年 月 日

〔本朝通鑑〕

三十 三月、出羽守源義家上狀曰、〇狀は朝野に群載し、勅許之、伊夜比國

古社記謂義家在奥州之間、道大宅光任所、此神成功之後、奉之

〔大日本史〕

國郡司越中守欄

源義家 康平七年三月任

大掾平貞度 康平六年 月任

介藤原爲長 康平七年十月任

康平中 同紀元千七百二十四年より

越中介射水親元卒す、

〔元亨釋書〕

十七 越州別駕射水親元、身嬰國務、心鄉佛乘、休退之暇、修法華會、寫

大般若經、六齋十齋、必事勤修、康平之年、春初罹疾、謂曰、我雖枯病、席念佛六萬聲、未

嘗缺、只願二月、半同世尊取滅、至二月、既望、扶兒孫沐浴着新衣、十五日朝、謂家人曰、

今日死期、多時所望也、至午時、令人念佛、又自唱、日之昃、或思勞困、勸漿粥、辭曰、我頃

者以此日、或持齋、或絕食、何于今破齋戒乎、遂不受、寂爾而逝、

治曆元年乙巳 同紀元千七百二十五年

九月 朔戊午

一日、^{戊午}太政官符を越中國司に下し、莊園を禁し、運漕の調物を割取することを遏めしむ、

〔勅仲記〕

十弘安

太政官符越中國司

雜事二箇條

一 應任先符旨、停止所々庄園、兼注進其年紀、及召進好立輩事、

右得彼國今七月廿四日解狀、備案云、寬德二年下五畿七道諸國官符、備內大臣宣

奉勅、停止前司任中、以後新立庄園、若不遵符有違犯輩、國司解却見任、永不叙用、百

姓將處重科、敢不寬宥者、又天喜三年三月十三日、同賜五畿七道官符、備右大臣宣

奉勅、宣仰諸國、寬德二年以後庄園、且加禁遏、永令停止、且所好立之輩、勸錄子細、召

進其身、若致對捍、早不參上、憶注姓名、須注言上、國司且忘符旨、無心勸行、解却見任、

永不叙用者、件庄園等、不唯成土民拒捍之煩、兼又有國司解任之文、縱募權勢、何不

言上乎、當國往古、無有庄園、而近代之間、所部百姓、爲逐公役、爲權門而立庄園、語幸

吏而領田地、不辨調庸、不勤課役、拒捍國務、侮慢朝章、爰寬德二年以後庄園、前司任

後冷泉天皇治曆元年

二一一

中依符旨悉所停止也而及得替期更以興立又臨任終年新又加立回之公役之民不幾應輸之田甚少恒例及貢銀難進濟而拒捍之民空忘論旨無辨租調權勢之家不用制符好立庄牧雖施治略其可得乎重不賜官符何以行吏務望請官裁任格條并度々官符旨被停止件庄園若猶不隨制旨者國司召進庄牧司若致對捍不能召進注名言上比按公驗新制以後所立庄園早以停止若不出公驗又從停止者右大臣宣奉勅依請者

一應停止路次國々津泊等號勝載新割取運上調物事

近江國 鹽津 大浦 木津

若狹國 氣山津

越前國 敦賀津

右得同前解狀稱謹檢案內當國者北陸道之中是難治之境也九月以後三月以前陸地雪深海路波高僅待暖氣之期運漕調物之處件所所刀禰等稱勘過新物留新物割取公物究凌綱丁徒送數日沙汰之間空過參期遲留之怠職而此由是非只官物之減口兼又致進濟之難望天恩回准傍例被停止件所々勘過新將全行程之限稱致合期之勤者同宣奉勅依請者下知彼國々既畢

以前條事如件國宣承知依宣行之符到奉行

權左中辨源朝臣

左大史小槻宿禰

治曆元年九月一日

〔參考〕

〔大日本史〕十三三三 治曆元年越中言新立莊園禁制已久國之蠶害茲焉莫甚本國古無莊園至于近世所部百姓爲道公役爭屬權門以立莊園不辨調庸不勤課役侮慢朝憲拒捍國務前司始據寬德符停廢新置莊園然及得替期更復興立臨任終年反加新置是以公役之民益減應輸之田甚渺恒例納貢殆難辨濟權家犯法奸民得勢欲施治略其可得乎伏請官符禁遏莊園不遵制旨者國司拘致莊牧司若致捍對錄名言上從之

治曆三年丁未 紀元千七百二十七年

十月 丙午

七日 壬子 越中守豐原奉季造橋の功に依り任を延はす

〔扶桑略記〕九二 越中守豐原奉季依造橋之功延任

白河天皇

承暦元年丁巳 三十九年七月

十月 朔 戊寅

藤原資清、越中守たり、

〔大日本史〕 三百八十四 國郡司、越中守欄

藤原資清承暦元年十月見、

承暦四年庚申 三十九年七月

正月 朔 乙丑

藤原公盛、越中守たり、

〔大日本史〕 三百八十四 國郡司、越中守欄

藤原公盛承暦四年正月見、

六月 朔 壬辰

十日、辛御體御下奏に依り、使を越中國の鵜坂、白鳥三宅の諸神社等に遣はし、社司に中祓を科せしむ、

〔朝野群載〕 六

神祇官謹奏

天皇我御體御下爾率下部等天大兆爾ト供奉留狀奏親王諸臣百官人等四方國乃賓客之政風吹雨零旱事聞食手抑放置天間給久部其自來七月至于十二月御在所平氣久御座衣止供奉須留御ト火數百六十火之中直ト百十火災交トト十一廿火地相ト六火天相ト十二火神相ト八火人相ト六火兆相ト七火以是ト求仁座伊勢國大神宮御領伊賀神戶領參河本神戶同新神戶領預等遠江本神戶同新神戶等同宮御領服織殿神部等依遇禊神事崇給遣使科上祓可令清祓奉仕事又座若狹國若狹比古神常神此下越前加賀能登の又座越中國鵜坂神氣多神白鳥神三宅神此下越後佐渡丹波因幡伯耆出雲淡又座伊豫國村山神大山積神野間神社司等依遇禊神事崇給遣使科中祓可令祓清奉仕事又至來秋季可有土公之祟氣鬼祟速季初祭治大宮四隅京四隅山城國六堺兼又祭日供奉御稷事此等參條奏怪ト事行治忌慎給波御在所平氣久可御座狀ト供奉給止波久奏以前大兆仁ト供奉留御體御ト如件謹以申聞奏

承暦四年六月十日 宮主正六位上行權少祐卜部宿禰兼宗

中臣從六位下行大祐大中臣朝臣惟維
○鶴坂神の事は承和十二年九月條に見ゆ、康和五年六月にも社司に中祓を
科するおとあり、參看すべし、

〔參考〕

〔延喜式〕

名十神

越中國婦負郡白鳥神社、

〔神社叢錄〕

六八ノ

白鳥神社

白鳥は志良登利と訓べし、○祭神日本武尊、考比

古○寺町村に在り、考證

例祭月日、

○日本紀仲哀天皇元年十一月乙酉朔、詔群臣曰、

朕未逮于弱冠、而父王既崩之、乃神靈化白鳥上天、仰望之情一日勿息、考證略聞十一月

乙卯朔戊午、越國貢白鳥四隻、

〔神祇志料〕

十五

白鳥神社

今三田村堂園にあり、新川縣式蓋日本武尊を祀

る、傳云ふ、仲哀天皇御世、勅して白鳥を求給ふ時、越國より白鳥四隻を貢る、即此

地也、仍て此神を祭る、考證日本書紀土人傳説

堀河天皇

寛治五年辛未 紀元千七百五十二年

正月 朔辛酉

橘賴里、越中守たり、

〔大日本史〕

三百八十四

越中守橘

橘賴里、寛治五年正月見、

介藤原公經、寛治三年正月任、

康和元年己卯 紀元千七百五十九年

正月 朔甲辰

二十三日、壬寅藤原通季、越中權守に任す、

〔公卿補任〕

藤通季

爲殿上小舍人、承德二正六叙爵、中宮御給、同三正廿三、越

中權守、康和二正廿八、右兵衛佐、永久三年の條

〔大日本史〕

三百八十四

越中守橘

權掾伴依武、嘉保元年月任、

堀河天皇、寛治五年、康和元年

康和二年庚辰

百六十七年

七月

朔

二十三日、于藤原基實越中守となり、是日狀を上り、造内裏の功を以て一階を加叙せられんことを請ふ、

〔大日本史〕

三百八十四 國郡司越中守欄

藤原基實康和二年七月具

〔朝野群載〕

九 史籍集覽本

以造内裏功申加階

從四位上行越中守藤原朝臣基實、誠惶誠恐謹言、

請被殊蒙、天恩因准先例、依造進昭陽舍功叙一階狀、

右基實謹檢案内、造進宮城殿舍廊門之輩、遷幸之後、皆預勸賞者、古今之例也、而件昭陽舍、當國所課、合期造了、情尋先蹤、宜蒙殊賞、望請、天恩因准先例、依件功被叙一階、將知造勞之有功矣、基實誠惶誠恐謹言、

康和二年七月廿三日

從四位上行越中守藤原朝臣基實

康和五年癸未

紀元千七百六十三 年

六月

朔

十日、于御體御卜奏に依り、使を越中國の高瀬・鵜坂・白鳥・速川の諸神社等に遣はし、社司に中祓を科せしむ、

〔朝野群載〕

六 史籍集覽本

神祇官謹奏

天皇我御體乃御卜仁率卜部等、天大兆仁ト供奉留狀奏、親王諸王諸臣百官人等四方國乃賓客之政、風吹雨零、早事聞食、天抑折ト放置、且問給部、良久、自來七月、至子十二月、御在所平氣、久御座、止ト供奉留御卜火數、百八十三、二ト火之中、直ト百三火、災交歎、下十九火、地相ト十六火、天相ト十四火、神相ト十二火、人相ト十二二ト無ト火、地兆ト相ト七火、以是ト求、爾座伊勢國太神宮御領、服ト織殿、麻績少神部、三重郡司、柴田鄉專當、一志神戶預、安濃神戶預、河曲神戶預、多氣郡司等、依過祓神事、崇給、遣使科中祓可、令祓請奉仕事、

又座、近江國、小津神、多河神、水尾神、都惠神、此下美濃、信濃、上野、陸奥、若狹、越前、加賀、能登の諸神名を載す、合略す

又座、越中國、高瀬神、鵜坂神、白鳥神、速川神、又座、越後國、大神々（社神ト）坂本神、荒

河神、石井神社司等、依過穢神事崇給遣使科中祓可令祓清奉仕事、又至來冬季可有土公崇、速季初祭治大宮四隅、京四隅、山城國六堺、兼又祭日可供奉御禊事、

此等貳條事、行治忌慎給波、御在所平氣久可御座狀、卜供奉給止波久奏、以前大兆、爾卜供奉、留御體御卜如件、謹以申聞奏、

康和五年六月十日

宮主從五位下行少祐、卜部宿禰兼良、中臣從五位上行權少副大中臣朝臣輔清

○高瀬神の事は寶龜十一年十二月條に、賴坂神の事は承和十二年九月條に、白鳥神及び中祓を科するおと承曆四年六月條に在り、參看すべし、

〔參考〕

〔延喜式〕

神十名

越中國彌波郡林神社、

越中國射水郡速川神社、

〔神社叢錄〕

九三

林神社

祭神林氏祖歟、神社、土煮、尊、面足、尊、根、尊、泥、土、林、

〔神社叢錄〕

九二

速川神社

祭神速秋津彥命、神社、早借村に在す、

〔越乃下草〕

一

林神社 若林郷林村也といふ、又般若郷賴成村ともいふ、

〔越乃下草〕

三

速川神社 上ノ庄早借村、神職笹波播磨

〔大日本史〕

神二百五十九

林神社、越中

林神社、○今在若林郷林村、

速川神社、○今在蓋祀瀬織津比咩神、水郡十三座の、

八月 朔戊申

源重資、越中權守たり、

〔大日本史〕

三百八十四

越中守權

源重資 權官、康和五年八月見

權介藤原實棟 康和五年十一月任

嘉承元年丙戌

紀元千七百六十六年

十一月 朔己丑

高階宗章、越中守たり、

〔大日本史〕

三百八十四

越中守權

高階宗章 嘉承元年十一月見

細河天皇康和五年 嘉承元年

細河天皇嘉承二年

大掾藤原經良 長治二年 月任

嘉承二年丁亥 紀元千七百六十七年

正月 朔成子

二十八日、乙卯前越中大掾藤原爲兼、狀を上り穀倉院學問料を給せられんことを請ふ、

〔朝野群載〕十三史籍集覽本

文章生申給學問折

前越中大掾正六位上藤原朝臣爲兼誠惶誠恐謹言、

請殊蒙 天慈因准先例被給穀倉院學問折狀

文章生給學問折例

橘敏通 延長七年補文章生、承平二年給學問折、菅原文時、承平三年補文章生、

高階成忠 天曆二年補文章生、五年任美作權大掾、八年給學問折、

右爲兼謹檢案内給學問折者所以抽勸學之士、勸屬文之徒也、因茲謂重代謂起家、携益雪者先應其舉、疎典籍者不當其選、爲兼雖爲前尾張守憲房朝臣之後、被養彈正大弼行家朝臣之家、久遊洙泗之浪、偏慕檉梓之材、然聞去承德二年應鄉貢之舉

也、預及科之列、然而纔雖折一枝之桂、猶欲望九枝之燭、是雖無軼人之用、只爲繼養

父之蹤也、抑爲進士者給學問料者、方尋先跡、載于狀右、採擇之處、誰謂非據、望請

天慈、被給件學問料者將戴 朝恩、彌勤夜學、爲兼誠惶誠恐謹言、

嘉承二年正月廿八日

五月 朔丙戌

藤原宗隆、越中權守たり、

〔大日本史〕三百八十四國郡司、越中守、攝

藤原宗隆、權實、嘉承二年五月見

鳥羽天皇

永久二年甲午 紀元千七百七十四年

二月 朔丁未

源俊親、越中守たり、

鳥羽天皇永久二年

〔大日本史〕三百八十四 越中守 欄

源俊親 永久二年二月見

介藤原敦光 天仁三年正月任

介藤原永實 永久二年正月見

崇徳天皇

天治元年甲辰 八千七百四十四年

十月 朔甲辰

中原成俊、越中權守たり、

〔大日本史〕三百八十四 越中守 欄

中原成俊 權官、天治元年十月見

權掾藤原國明 永久四年 月任

大掾高橋國行 永久五年正月任

少目弓削武松 保安元年正月任

大治元年丙午 八千七百八十六年

二月 朔丁酉

二十四日、藤原公能、越中守に任す、

〔公卿補任〕藤原公能大治元年二月廿四日任越中守(新院分)同二年正月十九日

右兵衛權佐、○保延四年の條

〔参考〕

〔大日本史〕三百八十四 越中守 欄

藤原公能 大治元年二月任

大治二年丁未 八千七百八十七年

五月 朔庚寅

源仲經、越中守たり、

〔大日本史〕三百八十四 越中守 欄

源仲經 大治二年五月見

十一月 朔丁亥

崇徳天皇大治元年二年

四日、庚寅鳥羽上皇高野山に登り東塔を供養し給ふ、塔は越中守公能の造進に保かる、

〔百鍊抄〕

十一月四日、太上天皇於高野供養御塔、件御塔越中守公能造進之

〔本朝通鑑〕

冬十月、法皇上皇同行登高野山、上皇建東塔、令藤敦光作願文、

曰、蓋聞惠日高照、總持之欄楯、抑天密雲、遍幢大慈之窟室、峙地塔婆之基、其義遠矣、伏惟弘法大師、延曆聖代、御絲綸以忽入李唐、大同皇朝、查綸綍以欲歸華夏、孤帆未飛、蒼波之上、三針遙投、白雲之中、照著幾程、紀州高野之靈嶽、計會何日、慈氏出世之佳期、就其與區、座于定室之後、往歲之比、大塔之西、起九丈之寶塔、安五智之尊容、而梁柱早壞、基趾纒存、弟子脫履之時、先詣此山、專依願念之內勤、既有言約之外宣、課魯般之功、修以鴈塔、憑衛權之力、祈以鶴齡、因茲土圭測景、棟莖之勢仍舊、壁壘含暉、輪奐之美惟新、其中奉安置金色八尺大日如來像、五尺阿闍梨生無量壽、不空成就等像各一體、奉書寫金字紺紙妙法蓮華經一部八卷、無量義觀、普賢般若心經各一卷、奉模寫色紙妙法蓮華經二十部、無量義觀、普賢各一卷、丁未之年、建子之月、促幸臨於其砌、致敬禮於其庭、於是禪定法皇同廻仙駕、蔭松栢而代鳳蓋、聞浮樹之風移、儀、繡莓苔而設龍床、吉祥草之露比跡、晨昏于坐禪之前、追隨于經行之下、當山長吏

法務權僧正法印大和尚位勝覺為唱導之師、結秘密之印、豁深兮啼鳥兩三聲、鐘磬和韻、寺靜兮高僧二十口、薛羅樓、樓梵唄讚、歎供養演說、彼周穆王之會靈山也、綠耳之駿馬、唯有八焉、隋高祖之達華塔也、葛衣之異僧、常贈一矣、在今憶古、旨趣自同者、歟、弟子幼而受圖、少而未識、取俗之化、惟疎遜位之思、云、遂初當萬邦之有辜、雖引德於眇身、更任一念之不退、猶運志於真際、仰願周遍法身、擁護庸質、寺是金剛之道場、宜授金剛不壞之身處、又南山之靈峴、定保南山無礙之壽、况十善者往古之勝因也、罪障何妨、三會者當來之宿望也、值遇豈疑、重請聖主之為長嫡、北辰位穩、國母之為正妃、陰教德昌、云、藩王、云、公主、或如玉、或如金、紫芝養味、赤松讓齡、朝野歡娛、上下凱樂、凡厥蠢動、幼居法界、衆類皆驚、邪犯之眠、悉取正覺之路、

是月、平忠盛、越中守たり、

〔大日本史〕

三百八十四 國郡司、越中守 關

平忠盛 大治二年十一月見、

大治四年己酉 紀元千七百八十九年

十二月 乙亥

藤原顯長、越中守に任ず、

〔大日本史〕三百八十四 國郡司、越中守、藤原顯長

大治四年十二月任、參河守、保延三年十二月任

大治五年庚戌 紀元千七百九十年

二月甲戌朔

四日、丁卯天皇三條京極第より土御門内裏に遷御せらる、内裏は越中守顯長の造進に係かる、

〔百鍊抄〕六 三月四日、天皇自三條京極第保朝臣第遷御土御門内裏越中守顯長造進之

八月辛未朔

源雅光、越中權守たり、

〔大日本史〕三百八十四 國郡司、越中守、源雅光

權守大治五年八月見

長承元年壬子 紀元千七百九十二年

正月癸巳朔

源忠兼、越中權守に任す、

〔大日本史〕三百八十四 國郡司、越中守、源忠兼

源忠兼 長承元年正月任權守

長承二年癸丑 紀元千七百九十二年

二月丁亥朔

源顯定、越中守たり、

〔大日本史〕三百八十四 國郡司、越中守、源顯定

長承二年二月見

保延元年乙卯 紀元千七百九十五年

正月乙亥朔

二十八日、壬寅文章博士、藤原顯業、越中權介に任す、

〔公卿補任〕藤原顯業 長承三年四月二日、叙從四位下、策同十一月廿六日、兼文章博士、同四年正月廿八日、越中權介、保延三年十月六日、轉左中辨、保延七年

保延二年丁巳 紀元千七百九十七年

十二月戊午朔

十六日、癸酉源資賢、越中守に任す、

〔公卿補任〕國史大系 本源資賢 保延二正廿二重任、三川兼佐、同三正五正五下、

〔佐〕同四月兼左少將〔廿五〕同十二月十六日越中守同五正五四位〔少將〕同十月廿六日從四上〔前齋院御給成勝寺供養〕康治二正三正四下〔朝觀行幸院司〕久安二正廿一〔廿三〕コクヒ備後守〔得替年任之〕〇應保元年

〔大日本史〕三百八十四國郡司越中欄

大掾大江有景保延三年二月見

保延五年己未 紀元千七百九十九年

八月 朔戊申

四日、拜算博士三善爲康卒す、

〔新修往生傳〕 算博士三善爲康者越中國射水郡人也、其先祖以射水爲姓、治曆三年、始十八、雖士入洛、師事算博士三善爲長朝臣、即爲入室弟子矣、非普通算道、亞學紀傳、望在鄉貢、屢省試、遂處不第、香恨而罷、暮年變節、補少內記、依本局勞彼、備堀川院御宇、以熟算術、抽任算博士、後兼任諸陵頭、到正下五位、博士自幼少之時、偏歸觀音、誦如意輪大咒、遍數不限、天仁二年以後、每日誦千遍、多有靈驗、三十以後、住道心、五十以後、日別念佛一萬遍、每修善事、廻向極樂、承德二年八月四日夢、已終、生涯將入死路、彌陀如來、率諸菩薩、欲來迎爾、時有人告曰、汝命限未盡、後年八月四日可

來迎者、覺後思惟、若是妄想歟、但祈三寶、須是一決、康和元年九月十三日、參天王寺、正修念佛、歷九箇日、滿百萬遍、即祈請曰、吾順次往生之願、彌陀來迎之夢、俱非虛妄者、舍利三粒、可出現、併再三祈念、把盃沃之、有金玉聲、依數出現、已如祈願、感淚不留、此本詳注其後永斷胎欲事、彌修念佛經論之中語、近往生者、抄而集之、名曰世俗往生決疑、又訪往生人、隨喜記之、拾遺往生傳、後拾遺往生傳各三卷是也、大治三年、或人夢、博士有往生極樂之瑞、詳注又有一老尼、談夢云、欲見決定往生之人、可見算博士、即語此事、進名簿云、願以今生之結緣、必爲來世之善因、承德元年以後、每日誦誦金剛般若經三卷、讀誦之間、全絕餘言、感經卷功能、作驗記一卷、永久四年以後、讀心經三百卷、臨終之時、爲獲魔障也、保安元年以後、永斷肉食、兼禁殺生、大治三年秋、手自書寫如法經、自爾以降、禁絕飲酒、凡厥每日所作、心經三百卷、念佛一萬遍、阿彌陀九卷、金剛般若三卷、如意輪大咒千遍、以爲終身之勤、保延五年六月三日、身有病患、不能起居、語左右云、來八月終焉之期也、命期在近、宜修善業、念佛之外、不能他事、猶子行康相勸而言、出家持戒、可協法器歟、如何、答云、往生極樂、可在信心、不可必依出家、念佛功積畢、命爲期、十即十生矣、自七月廿七日、屈僧徒行懺悔法、此時沐浴、齋身、着袈裟、向彌陀尊祈請而言、多年念佛、逐日不怠、臨終正念、必垂引接、沒後善事、

現存相營、八月四日、於後夜分、捧誓願文、此文觀念也、向西氣絕、春秋九十一、懺法七日、結願當于此日、命終之期一如夢想、沒後三箇日、氣暖如平生、身體有薰香、然則生前之善、滅後之瑞、豈非往生人乎、

〔元亨釋書〕十七 算學博士善為康者、越之中州射水郡人、治曆二年、年十八入洛、師事算博士善為長、所業外肆、進士明經二科、寬治帝以其精算術、抽為博士、遂至朝議大夫、少年愛佛教、能持如意輪大咒、承德元年以來、每日誦金剛般若經三卷、乃著驗記一篇、康和元年以來、絕色欲、修念佛、亦著拾遺往生傳、永久四年以來、每日誦般若心經三百卷、為臨亡除魔障資、保安元年以來、永絕肉味、大治三年秋、書如法法華經、爾來禁酒、凡日課金剛心經如上、并彌陀經九卷、如意輪大咒一千反、念佛一萬反、終身不缺、及諸禁酒、無弛、保延五年六月病、謂左右曰、仲秋是我溢焉之期也、于時猶子行康問曰、出家持戒淨土之勝業乎、對曰、爾也有之、堅信而已、念佛功成、不必出家、十即十生、百即百生、八月四日後夜、手擎願文、向西而卒、年九十一、後三日、身體尚暖、異香郁然、

〔諸家系圖纂〕

南家系圖

清行——良助——連行——茂明

雅賴——大內記淡路守 算博士為長——為康——行衡

〔本朝書籍目錄〕

朝野群載 三十卷 體記作文書札等
懷中曆 十卷 三善為康抄

〔朝野群載〕一序 予曾無捨芥之智、唯守株之愚、多集反故之體、以為知新之師、部類成三十卷、號曰朝野群載、可謂不昇青雲、高見紫宮之月、不出一室、遙知萬邦之風、但慙老久、拙編次、一本有惟字、性慵疎、涉獵、以指、揖、後昆、宜補所闕、于時永久之曆、丙申之年、善家、竿儒、為康抄之、

〔拾遺往生傳〕上序

三善為康

予所慕者極樂也、所歸者觀音也、每修善事、不論龜細、盡以其業、廻向彼土、即發願曰、吾於順次生、必往生極樂、疾得無生、忍深入諸三昧、以彌陀願為吾願、以普賢行為吾行、以觀音心為吾心、於此娑婆國土、當利一切衆生、乃至利益十方世界、亦復如是、發此願之後、歲月其徂焉、而問承德二年八月四日己卯、曉夢已終、生涯將入死路、修家

後十念，只在此一時，故揚聲稱讚，雙眼望西方，暗夜自破，光明忽見，既而彌陀如來丈六特尊，穿虛雲之色，現真金之膚，高坐蓮臺上，徐來草廬前，舒金色手，授白紙書，予敬持此書，仰瞻其尊，即傍人告曰：汝命根未盡，此度不迎，爾有質直心，故先所來告也。云々忽兮夢覺，恍兮神殘，便知質直之心，往生之門也。經曰：柔和質直者，即皆見我身，恐此之謂歟。但夢境難信，妄想難識，重祈冥顯，欲驗虛實，爰康和元年九月十三日，參天王寺，修念佛行，經九箇日，滿百萬遍，于時往詣金堂，奉禮舍利，即祈請曰：吾順次往生之願，彌陀現前之夢，俱非虛妄者，舍利併可出現，若不然者，勿顯現，救世觀音，護世四王，太子聖靈，護法青龍，同可證明，如是再三祈請，奉寫舍利，瑠璃，虛裏有金玉聲，予合掌念之，寄眼見之，舍利三粒，依數出現，予歡悅之淚，不覺而下，隨喜之人，不期而多，信敬已訖，作禮而去，今接江家續往生之傳，豫記其古今遺漏之輩，不更名聞，為利養而記，只為結緣為勸進而記矣。若使知我之者，必為往生之人，故述此言，以置序首云爾。

〔拾遺往生傳〕中序

三善為康

予為勸後人念佛之行，豫拾先達傳記之遺，都盧三十人，卷軸已成矣，其後闕國史別傳，求京畿邊外所訪得有數矣，欲罷不能，重更記之，冀以今生集類之結緣，必期來世順次之迎接，其人誠有靈遙照于我，願毀譽此記之者，施利益亦復如是，但恨隨聞而記，不次時代云爾。

〔後拾遺往生傳〕上序

三善為康

夫彌陀有誓于娑婆，雖一念不捨，南浮有緣于西土，雖十惡無嫌，屠兒終命之曉，覺月照發露之臆，獵徒瞑目之時，奇香薰見火之室，彼何人乎，誰不庶幾，是以一為結緣，一為勸進，接慶江兩家之記，拾古今數代之遺，都盧九十五人，勒載一部三卷，名曰拾遺往生傳，世以知之，欲罷不能，今亦記之，故以後拾遺往生傳續為其名矣，冀以今生結集之業，必為來世值遇之緣，毀譽此記之人，亦復如是云爾。

〔後拾遺往生傳〕中序

三善為康

愚雖有多年往生之望，猶疎一心念佛之行，唯為結緣為勸進，目視耳聽往生人，先拾遺往生傳九十五人，後拾遺往生傳上卷二十人，都盧百十五人也，今所記以為下卷，而問大治二年朔二日壬辰夜半，按察使藤納言顯隆家侍學生惟宗遠清夢，有一高殿棟階莊麗，其東對廊立大高座，有一老人坐其上，合掌向西，即傍人告曰：此是諸陵頭三善為康，今日可往生，即其人也者，為見此事，自四門群來人，不知幾多少，于時紫雲自西垂布，其廣二許丈，覆于其上，相續金色光兩三行，穿紫雲之粧，照東廊之砌，此時彼人忽乘紫雲指西而去，夢想揭焉，心腸欲斷云云，衆人聞者，隨喜，皆相曰：便知彼

人決定往生極樂之儀也其聽及廣來告人多矣故不能賦止爲示後人豫錄萬一以置卷初云爾

〔本朝文集〕

重蒙頌頌序

三善爲康

右親衛藤員外次將相願曰所統者鳴絃也既得知聲所好者言語也未能諳韻汝撫少切之文宜作大都之頌不可及披露故勿養詞華不可疑思風故勿索義實僕再三固辭一二不許遂課短毫愁成狂簡凡二千九百五十五言除重點三十七字但恥結搆是疎採椽之材不削琢磨猶爛白珪之瑕難改隨次將之命不願後人之嘲于時天仁二年四月謝吐風而綴文非獲麟而絕筆云爾重蒙頌頌序

〔朝野群載〕

集覽本

跋

右朝野群載所見存者二十一卷考三善爲康朝臣自序云全三十卷所散逸者第十第十四第十八第十九第二十三第二十四第二十五第二十九第三十凡九卷或云第十第十四二十卷猶存矣未知果然否余所閱諸本誤脫錯亂不耐下句讀掩卷而止者數矣問者得見或人所藏一校本云校以禁本官本林本異本與其本書合五本也別得一秘本稱尾本其中間載他本按字又別二本其一本中頗按異本校字都合十本彼此互相校不啻焉馬魯魚至有葛一字作廿四日三字行大目三字作則十一日三字作歲或走或上之二字身人部三字作自分二字

或自入ア三字小槻二字作痴一字日能二字作罷一字者蓋真草雜書數經轉寫致此艱澁耳推究誤字之所由來之意使人喫一笑矣今所按諸本紙頁字行大抵相同意者原唯一本轉轉相寫或誤或脫或竊損磨滅致此區分而已今逐一參互校訂雖有可疑者不妄意改或兩可難裁或有無益無損者皆存而不削又諸本區別無知適從者朱書其字旁凡所校訂諸本四分五裂煩碎雜出不暇枚舉今託一二好士新寫一本通讀一過聊施句讀如始見面目者後來復得別本重下楮墨所謂缺本二卷果有否庶幾復舊時之觀矣抑余之注意于此書頗費日月者豈受詩賦文章制度事情可越而覽者存矣同志之徒若有轉寫者幸莫使有誤寫焉

附言新修往生傳云算博士三善爲康者越中國射水郡人也其先祖以射水爲姓治曆三年年十八離土入洛師事算博士三善爲長朝臣即爲入室弟子矣非普通算道亞學紀傳望在鄉貢屢省試遂處不第吞恨而罷暮年變節補少內記依本局勞叙爵堀川院御宇以熟算術抽任算博士後兼任諸陵頭到上下五位元亨釋書云承德元年以來每日讀金剛般若經三卷乃著驗記一篇保延五年六月病謂左右曰仲秋是我溘焉之期也云云八月四日後夜擊願文向西而卒年九十一按本書載大治五年越前權介兼任官符則爲當官可知矣又長秋記及著聞集天承元年三月廿二日藤

原宗忠朝臣尙齒會七叟中、載算博士正五位上三善爲康集作八十三、善本朝書籍目錄云、朝野群載三十卷、記作文書札等體、三善爲康撰、又云、懷中曆十卷、三善爲康抄、然今世未聞有懷中曆者、余所目見、掌中曆上缺本一卷、序云、廟陵盛朝請大夫算博士三善爲康抄、蓋所謂懷中曆、謂十者疑誤、二或三字、又濫觴抄申曆條引三善爲康三元九紫法、然驗記及三元九紫法未聞存否、

天保八丁酉歲四月

伴信友記

〔本朝通鑑〕

三十 永久甲午二年十二月、算博士三善爲康與諸博士率諸生會江

某其名疑是匡房孫匡周乎、文章祭先聖影、柳擬釋奠爲康作祝文曰、永久二年窮冬暮天、敢昭

告先聖文宣王、學海之津源出孔泉、智水之浪流赴涑川、明知日月萬代猶圓、德被尊

卑、四科是全、更改犧牲、薦以蔬蠶、殊備黍稷、屬以豆籩、博士初獻、傾冕周施、諸生後供

撫衣聯翩、所奠何因、爲重書籍、所禱何事、欲遇文田夫子一聖、顏氏十賢、達者七十、門

徒三千、謹請尙饗、冀垂矜憐、

〔本朝文集〕

見善算博士千字文聊有所感矣

吏部侍郎敦光

才能術學藝旁分出、自士林更拔群載、筆早趨堯闕、月飛纓高、嘯魯山雲、遐齡多過八句、算麗句新成、千字文理趣幽深、猶郁郁周興嗣後世稱君、

續千字文者、爲勸小童之愚學、先經大卿之賢覽、殊無破却之命、還賜感懷之什、手

頻握玩、目不暫捨、遂以自謙之詞、謹代奉和之禮、本韻

算學博士三善爲康

苟携術業道雖分、燕雀庶幾鴻鶴群、詞課虛無唯翫月、材非富有是浮雲、四篇更做李

家韻李翰梁求之頌李翰百咏、千字重推周氏文、學校遂爲昇進地、從微至著奉明君、

奉同李部大卿見算博士續千字文之佳什矣、本韻

朝散大夫藤廣兼

高才與智軌涯分、以道起家勵後群、送老書淫猶映雪、迎秋學稼轉如雲、博士六十以

故韻連三十皆同理、字掇一千各異文、覃思續來周氏跡、倭唐之際只聞君、

近日算學博士作千字文、蓋倣周興嗣之作、此書頒行天下也、李部大卿當代詞宗、

累葉名儒、美其文綴、以詩非唯覽文起予、又是因道重士之故也、人皆響應、余亦繼

之、本韻

能州前司馬藤宗支

多日競陰寸又分窺來烏篆幾成群研精功積孫恣雪鑽仰道深尼嶺雲風雅任他三百首華詞可觀一千文白頭老後携黃卷傳癖書淫不若君
吏部侍郎見善博士續千字文有感懷之什予又見之感激尤深仍試拙鄙懷想押本韻而已

詞林老父基俊

詩書術業派相分學海朝宗皆作群天地玄黃詞藻露乾坤迢遞義凌雲聲聲玉脆數行韻字字花鮮百千文都邑少年耽讀者更爲口實只希君

算道善博士作續千字文贈吏部大卿大卿耽其金玉之佳句忽裁錦繡之麗文爰前左金吾及巧語之者一兩許雅各有唱和之作輔職照目氷雪在廣豈依王澤之廣被非頌聲之旁與哉抑博士學涉九流齡過八旬朝撰溢身久居三官之要路宿慮已足早昇五品之正階學者之祿見之取信昔王右軍之書八字誰稱勝事今善博士之續千字人爲美談加之術藝極幽委詩情傲元白誠是朝之簡要道之規模也不堪感荷追加拙藻而已本報

泉州史藤原宗兼

云倭云漢境雖分勝趣相同典籍群八十年勤收白雪博士生年八十四也稽一千字古之學于今匪懈故云

韻入青雲詞中鑿出驪珠彩機外織成鳳錦文術藝詩情窮奧旨宜哉博士事堯君
〔本朝無題詩集〕
傳聞我道英才賀算道善博士九十年算之詩會不堪情感聊成諷吟而已

藤原茂明

嗜道何唯才是賢君爲仁者保天年長生加算人間壽却老得方地上仙心慕善日歸戒乘口嘗妙味斷葷羶博士多年之間身持齋戒口斷講經日日薰修積定識遂開西主運詩席會之次風

近衛天皇

久安二年丙寅百紀元千八

正月辛未

藤原顯成越中守に任す

〔大日本史〕三百八十四國二郡司越中守欄

近衛天皇久安二年

近衛天皇久安四年 仁平二年

藤原顯成 久安二年正月任 仁平三年閏十二月罷

介藤原永範 永治元年正月任

大掾藤原親廣 康治元年正月任

大掾藤原有倫 康治二年正月任

大掾中原俊光 久安二年正月任

久安四年戊辰 紀元千八百八十八年

正月 朔庚申

高階政家、越中權守に任す、

〔大日本史〕 三百八十四 越中守欄

高階政家 久安四年正月任 權官

少掾平維基 久安三年正月任

大掾紀資定 久安四年正月任

權掾清原頼安 久安四年正月任

仁平二年壬申 紀元千八百二十八年

二月 朔丙寅

二十九日、甲午、前越中守源俊親卒す、

〔本朝世紀〕 二月甲午、九日、前越中守源朝臣俊親卒、

〔尊卑分脈〕 源氏村上

顯房 雅俊

顯重 右少將、神祇伯、正四下、母備中守為宗女

顯俊 上總介、從四下

顯親 攝磨守、右京大夫、正四下、七十三歳、母同永曆元七廿四卒

俊親 越中守、從五下、母掌子高階業子

憲俊 近江守、右少將、太宰大貳、正四下、母近伊與守國明女

顯定 左馬權頭、正四下

仁 元海

仁 寬雅

與 玄雅

寺 行顯

山 遍覺法眼

近衛天皇仁平二年

仁 行雅
仁 昌雲

閏十二月 朔乙酉

藤原隆教、越中守に任す、

〔大日本史〕三百八十四 越中守欄

藤原隆教 仁平三年閏十二月任

權介丹波實康 久壽元年正月任

少目藤井秋次 仁平元年正月任

大掾藤原基業 仁平三年正月任

久壽元年甲戌 百七十四年

八月 朔壬午

十日、辛卯新川郡新治村、海嘯のため陥没す、

〔大日本史〕二百五十九 新治神社今在新川郡郡名據神社殿錄土人既〇在生地村

没海、幾見社址、後世潮退、乃更治荒蕪、名生地村、復本社于此。

〔下新川郡生地町役場調査〕久壽元年甲戌八月十日午刻より十一日卯刻

に至りて海嘯あり、新治村一圓陥没して滄海と變し被害、面積四十萬坪、人家七十餘、寺院二、神社一、人畜死傷無數と称せらる、

〔下新川郡生地町役場調査〕本村ハ今ノ生地町西方現在ノ海岸ヨリ、約十町

沖、芦崎ヨリ四ツ屋ニ亘リシナリト云フ、潮退キシ後、更ニ荒蕪ヲ治メテ生地村ト称セリ、

後白河天皇

保元二年丁丑 百七十七年

十一月 朔癸巳

藤原光隆、越中守に任す、

〔大日本史〕三百八十四 越中守欄

藤原光隆 保元二年十二月任

少掾藤原光範 久壽二年正月任

後白河天皇保元二年

二條天皇

平治元年己卯 百九十九年

十二月 辛亥

二十七日、平平教盛藤原信賴を亡ほし功を以て越中守に任す、

〔公卿補任〕 平平教盛 保元三十二年廿九日遷大和守平治元十二年廿七遷越中

守、勳也權頭如元永曆元正廿一遷常陸介、〇仁安三

大日本史 百十四 平治元年右衛門督藤原信賴作亂、教盛與弟賴盛等率官兵攻

之、信賴伏誅、平治以功任越中守、公卿補任岡崎 永曆元年遷常陸介、累叙正四位下、

補任

〔大日本史〕 三百八十四 中欄

少掾藤原知孝 保元三年正月見

權介藤原長光 平治元年正月任

少掾紀貞光 平治元年正月任

永曆元年庚辰 百九十九年

正月 庚辰

藤原光雅、越中守に任す、

〔大日本史〕 三百八十四 中欄

藤原光雅 永曆元年正月任 參河守

長寛二年甲申 百九十九年

正月 丁亥

藤原定隆、越中守に任す、

〔大日本史〕 三百八十四 中欄

藤原定隆 長寛元年七月任 伊豫守

大掾藤原爲仲 長寛元年正月任

永萬元年乙酉 百九十九年

七月 戊申

藤原資賴、越中守に任す、

二條天皇永曆元年 長寛二年 永萬元年

〔大日本史〕

三百八十四
國郡司越中守關
藤原資頼
永萬元年七月任
仁安元年八月罷

六條天皇

仁安二年丁亥

紀元千八百
二十七年

七月

朔

二十五日、庚申越中守藤原隆保卒す、

〔顯廣王記〕

七月廿五日庚申、越中守藤原隆保死、年十四、疾病云々、左京大夫定隆

朝臣二男

〔尊卑分脈〕

藤氏 閑院左大臣冬嗣公六男、内舍人良門子利基流

定隆

保隆 從五下、越中守、
爲蛇被書

上俊隆 本名時繼、母下野守源盛邦女、
正五下、參川守

女子 母同太政大臣頼實室、
陽明門院母

女子 參議親雅室、
親房母

仁安三年戊子 紀元千八百
二十八年

正月

朔

源有雅、越中權守に任す、

〔大日本史〕

三百八十四
國郡司越中守關

源有雅 仁安三年正
月任權官

大掾大江忠房 仁安二年正月任

介藤原盛遠 仁安三年正月任

高倉天皇

安元元年乙未

紀元千八百
三十一年

六條天皇仁安三年 高倉天皇安元元年

高倉天皇安元二年

八月己酉

平盛俊越中守たり、

〔大日本史〕三百八十四守欄

平盛俊安元元年八月見

〔参考〕

〔三州志〕

來因概覽 而シテ越中次郎兵衛盛嗣 東鑑ニ盛國政ヲ執リシカニ盛記
關ハ越中佐賀野ノ越波中次郎兵衛ハ村名トナレリニ住シテ能登ノ目代ヲ兼メ
ト云フ越人相傳フ越中次郎兵衛ハモト五十嵐氏ニテ其古墳今宮山稻荷町ノ
末ニアリト云東鑑ニ建久三年上總五郎兵衛忠光鼻首越中次郎兵衛盛嗣ノ
ニツキ去年ノ頃ヨリ丹波久三年上總五郎兵衛忠光鼻首越中次郎兵衛盛嗣ノ
下ノ文アリ又同書ニ同四年三月十六日早ク盛繼以是ヨリ先キ盛嗣ノ父右兵衛
尉盛俊モ之守ニ越中ニ任スト見ユ即チ越中前司ノ號アリ

安元二年丙申

三紀元千八百

正月丁未

清原頼業越中權守に任す、

〔大日本史〕三百八十四守欄

清原頼業安元二年正月任權官

治承三年己亥

三紀元千八百

正月庚申

藤原雅隆越中守たり、

〔大日本史〕三百八十四守欄

藤原雅隆治承三年正月見

權介源定宗治承二年正月任

治承四年庚子

百紀元千八百

正月甲寅

平業家を越中守に、藤原宣親を越中權守に任す、

〔大日本史〕三百八十四守欄

平業家治承四年正月任

藤原宣親治承四年正月任權官

高倉天皇治承三年 四年

安徳天皇

養和元年辛丑 紀元千八百四十二年

二月 戊寅朔

七日、甲申前越中守平盛俊を丹波國諸庄園總下司と爲す、

〔玉海〕二月八日、入夜大夫史隆職來、略又被下宣旨注出持參也、其狀如此、

治承五年二月七日 宣下

以前越中守平朝臣盛俊宣爲丹波國諸庄園總下司、

件宣旨上卿時忠卿職事行隆云々、余密問云、以宣旨被補庄園下司有例哉

如何、答云、未曾聞云々者、

壽永二年癸卯 紀元千八百四十三年

五月 甲子朔

十一日、辰甲源平兩軍、般若野に戦ひ、平軍敗れ加賀に退き、尋て又礪波山に戦ひ、是日、義仲、戦捷を埴生八幡社に祈り、夜に乗して平軍を襲ひ大に之を破る、

〔玉海〕五月十六日、己未去十一日、官軍前鋒乘勝入越中國、木曾冠者義仲、十郎藏人行家、及他源氏等、即迎戰、官軍敗績、過半死了云々、

〔百鍊抄〕五月十一日、於越中國合戰、官軍敗北、

〔一代要記〕五月十一日、越中前司盛俊、平家以五千騎勢於越中加賀境礪波山、

合戰、自未刻及晚、以平家方被打落了、

〔歷代皇記裏書〕四月、自京平氏等發軍勢、聞下向北陸之由、漸自越後向越中領、

兵衛佐合戰未安堵之間、有平氏下向雖非其勢、幾是自本所庶幾也、本意既足、向平

氏合戰日未所望也云々、仍源氏木曾義仲十郎藏人行家並近江美濃源氏等日來

同心輩皆向越中國之間、礪波山並篠原合戰等、平氏無云甲斐、雖其勢多、散々逃落

事自然、源氏來近江入京中、一切無之向者云云、五月十一日、盛俊等一等、皇五千騎

討越中加賀界越礪波山入越中國之間、源氏等待請至、未刻合戰數刻、及曉頭平家

方散々被打落、纔存命輩、隱山落谷、歸者少、損者多有之云々、其後平家武士聚一所、

住加賀國云々、

〔保曆間記〕同十一日、平家ハ二手ニ作テ大手ハ越中國戸波山標ヘ向フ、木曾馳

向テ戰フニ、平家打負テ俱梨迦羅カ谷ト云難所ニ追入ラレテ、平家多分ハ失ニ

ケリ、維盛様々ニシテ逃給ヒヌ、三河守知度打レヌ、侍大將飛騨判官景高ヲ始トシテ受領檢非違使百六十八人宗トノ者二千余人、其勢既ニ五萬餘騎、俱梨迦羅カ谷ニテ失ニケリ、

〔參考源平盛衰記〕九二十

般若野軍事平家請

五月九日卯刻按壽永源氏乃據前卷尾所載此云源氏六千餘騎白旗三十流指上テ、喚叫テ般若野ニ推寄タリ、平家モ聞テ合テ散々ニ戰フ、二百騎三百騎五十騎百騎出シ替入違テ、寄ツ返ツ切ツ切レツ、息ヲモ繼セス馬ヲモ休メヌ、未刻マテ戰タリ、夕ニ及テ平家禦兼テ引退、源氏勝ニ乘テ追懸タリ、平家ハ礪波郡小矢部河原マテ返合返合、散々ニ戰ケルカ、落ヌ討レヌ、二千餘騎ハ失ニケリ、殘二千餘騎前云盛俊率兵五千今所載兵四千蓋顯麟必有一誤夜ニ入テ礪並山俱梨伽羅カ峯ヲ引越テ、加賀國ヘソ歸リニケル、

平家礪並志雄二手事長門本無餘本自此段至源氏軍配分段前後雜出、因別出子下、

平家一所ニ集テ、木曾追討ノ爲ニ十萬餘騎ヲ二手ニ分テ、越中國ヘ入テ、國中ノ兵ヲ攻隨ヘント評定ス、搦手ノ大將軍ニハ、越前三位通盛三川守知度侍ニハ、越

中前司盛俊上總介忠清飛騨守景家三萬餘騎ヲ相具シテ、志雄山ヘソ向ヒケレ、彼山ハ能登、加賀越中三箇國ノ境也、能登路白生ヲ打過テ、日角見室尾青崎大野德藏宮腰マテソツ、キタリ、追手ノ大將軍ニハ三位中將維盛、左馬頭行盛、薩摩守忠度侍ニハ上總判官忠綱綱音誤作網、經今改之河内判官季國、高橋判官長綱、越中權守範高カ一黨五千餘騎ヲ先トシテ、都合七萬餘騎ハ加賀ト越中ノ境ナル、俱梨伽羅山ヘソ向ヒケル、加賀國井家津播多荒井閑野竹橋大庭崎田森本マテ連タリ、追手搦手十萬餘騎、赤旗赤符鹽風ニ吹レテ、浦々ハ錦ヲ曝シ、緑ノ梢ヲ隠シテ、山々ハ紅ヲ染成セリ、平家既ニ俱梨伽羅志雄山二手ニ分テ下ト聞エケレハ、木曾ハ越後國府ヲ立テ、越中ヘ入、國々軍兵馳集テ、木曾ニ加ル、越前ニ本庄、樋口、齋藤カ一族、加賀國ニハ林、富樫、井家、津播多、能登國ニハ土田、關、日置、越中國ニハ野尻河上、石黒、宮崎等參ケリ、

三箇馬場願書附白山權現垂跡事唯長門本有、但載在林富樫城略下、平家分軍上、今從本書可通考、

木曾ハ六助寺ノ國府ニ著、兵具クラヘ勢汰シテ著到アリ、其勢五萬餘騎トシテ注シケル、木曾ハ物書ニ、大夫房覺明ヲ招テ、軍兵ノ中ニシテ云、軍ハ謀ト云ナカラ、平家ハ開體大勢也、佛神ノ擁護ニ非ハ、輒ク靡シ難シ、幸ニ今北國第一ノ靈峯効

驗無雙ノ明神ノ御麓近ク參タリ、白山妙理權現ニ願書ヲ進セハ、ヤト有ケレハ、
軍兵モ覺明モ然ヘシトテ、覺明ハ箭立取出シテ旨趣ヲ顯ス、自段首至此、長門本
ナ越テ砥波山ヘ向ケル、合戰ノ祈禱ニテ、其狀ニ云、
敬白

立申大願事

一可奉勤仕加賀馬場白山本宮三十講頭事
一可奉勤仕越前馬場平泉寺三十講頭事
一可奉勤仕美濃馬場長瀧寺三十講頭事以上三頭字、長門本無、
右白山妙理權現者、觀音薩埵之垂跡、自在吉祥之化現也。卜三州高岩之靈窟、長門
嶺利四海率土之尊卑、參詣合掌之輩、滿二世之悉地、歸依低頭之類、誇一生之榮耀、
總鎮護國家之寶社、天下無雙之靈神者歟、而自近年以降、以上四字、長門本無、平家忽昇
不當之高位、飽誇非順之榮爵、忝蔑如十善萬乘之聖主、恣凌辱三台九棘之臣下、或
追捕太上法皇之厥、或押取博陸殿下之身、或打圍新王之仙居、或奪取諸宮之權勢、
五畿七道何處不愁之、百官萬民誰人不歎之、已欲斷王孫豈非朝家怨敵哉、是次燒
南京七寺之佛閣、斷東漸八宗之惠命、盡圍城三井之法水、滅知證一門之學侶、其逆

勝調達其過越波旬、月氏之大天再誕歟、日域守屋重來歟、長門本、滅佛像經卷、
忽長門本、燒佛堂、舍僧坊、寧非法家之怨敵哉、是次源氏平氏之兩家、氏字及之字、自
昔至于今、如牛角、天子左右之守護、朝家前後之將軍也、而觸事決雄、伺隙致鋒、
仍代々企合戰、度々諍勝負、既有宿世之怨心、長門本、是非當時、以上三字、長門本、大
敵歟、是因茲忝蒙神明神道之冥助、為降長門本、佛法王法之怨敵、立大願於三州之
馬場、仰感應於三所權現耳、就中先代伏王敵、皆由佛神之最負、此時降謀反、長門本、
寧無權現之勝利哉、加之白山之本地觀音大士、於怖畏急難之中、能施無畏、縱雖平
家之軍兵如雲霞下、衆怨悉退散之、金言有憑、縱雖謀臣之凶徒、加呪咀致怨、念還著
於本人之誓約無疑、然者還念權現本誓、感應不可廻踵、何況哉、長門本、家自先祖、仰
八幡大菩薩之加護、振威施德、而八幡之本地者觀音、本師阿彌陀也、白山御體者彌
陀脇士觀世音也、師弟合力、長門本、感應潛通者歟、况彌陀有無量壽之號、長門本、不
授千秋萬歲之算哉、觀音現藥樹、長門本、王之身、寧不合、長門本、不老不死之藥乎、云、
垂跡勝利揭焉、長門本、附公家附私宅、長門本、無、欲遂素懷、所志無私、奉公在頂、偏為
降王敵、專為接長門本、天下、忽為興佛法、鎮為仰神明也、傳聞天神無怒、但嫌不善、地
祇無祟、但厭過患、長門本、所以平家奪王位、是不善之至哉、謀臣滅佛法、忽長門本、過

忠之甚也、日月未墮地、星宿猶懸天、長門本、神明爲神明者、此境、長門本、施驗、三寶爲
 三寶者、此刻長門本、振威然則權現照我等之懇誠、宜令罰平家之逆族、長門本、我等
 蒙權現之加力、願長門本、欲打謀反之輩、若酬丹祈、感應速通者、上件大願無懈怠可
 果遂也、長門本、者彌施、長門本、源家之面目、長門本、新副社壇之莊嚴鎮誇神道之冥
 加、倍致佛法之興隆矣、仍所立申如件

壽永二年五月九日

源義仲敬白

長門本五月、作四月、不日、而載五月二日條、一節、從本世、既出于
第廿八卷北國所々合、暇、尾、通、考、此下本世、至段、尾、長門本、無
 卜書テ、木曾カ前ニテ讀上タリケレハ、武士各感涙ヲ流シケリ、抑白山妙理權現
 卜申ハ、昔越前國麻生津ニ三神安角カニ男、越大德神融禪師ト云人マシマシキ、
 久修練行年積難行精進日ニ新也キ、元正天皇御宇養老元年ニ、和尙當國大野郡
 伊野原ニ遊止シ給タリケルニ、一人ノ貴女化現シテ云、日本秋津島ハ本是神國
 也、我天神最初ノ國常立尊ヨリ跡ヲ降シテ以來、百七十九萬二千四百七十六歲
 上々皇ヲ護下々民ヲ撫、吾本地ノ真身ハ山頂ニアリ、往テ禮スヘシト云テ、化女
 即隱レ給ヌ、和尙靈感ヲ仰テ、白山ノ絶頂ニ攀登、綠ノ池ノ邊ニ居テ、三密印觀ヲ
 凝シ、五相身心ヲ調テ、祈念加持シ給ケレハ、池中ヨリ九頭龍ノ大蛇身ヲ現セリ、

和尙責テ云、此ハ是方便示現ノ形、全本地ノ真身ニアラシトテ、咒偏功ヲ増ケレ
 ハ、十一面觀音自在尊、慈悲ノ玉體顯給ヘリ、妙相眼ニ遮リ、光明身ヲ耀セリ、和尙
 悲喜胸ニ滿テ、感涙面ヲ洗テ、歸命頂禮シ奉テ云、願ハ大聖本地垂跡哀ヲ垂テ、像
 末ノ衆生ヲ拔濟利益シ給ヘト申サレケレハ、爾時ニ觀世音金冠ヲ動シ、慈眼ヲ
 瞬シ給テ、妙體速ニ隱給、又和尙左ノ峯ニ登給ヘハ、一宰官人ニアヘリ、手ニ金箭
 ラ把リ、肩ニ銀弓ヲ懸タリ、咲ヲ合テ語テ云、我ハ是妙理大菩薩ノ神務、轉佐ノ貫
 首、名ヲハ小白山別山大行事ト云、大德マサニ知ヘシ、聖觀世音ノ化身也ト云テ
 隱レヌ、又和尙右ノ嶺ニ登給ヘハ、一ノ老翁アリ語テ云、我ハ是妙理大菩薩ノ神
 務、靜謐啓沃輔弼也、名ヲハ大已貴ト云、蓋又西刹ノ教主阿彌陀也ト云テ、隱給ヌ、
 是ヲ白山三所權現ト申也、峻嶺高々トシテ、切利ノ雲モ手ニ取ヘク、幽谷深々ト
 シテ、風際ノ底モ足ニ踏ツヘシ、効驗一天ニ聞エ、利益四海ニ普シ、一節、與元字釋
世、大同小異、然不與當サレハ、木曾義仲モ眼ヲ塞テ、白山ヲ禮拜シ、掌ヲ合セ、權現
時、本蹟、故略而不、採
 ニ歸敬シ奉テ、先祈誓ヲ致ケリ、

俱梨伽羅山事

長門本、無、餘、本、井出、于、下、段、

木曾ハ六助寺ノ國府ヨリ打上テ、般若野御河端へ著ニケリ、是ニテ軍ノ談議ア

リ、平家ハ大勢ト聞、御方ハ無勢也、彼礪並山ヲ越シテ、松永邊柳原小矢部河原ヘ打出ナハ、馳合ノ軍ナルヘシ、馳合ノ戰ノ習ハ、必勢ニヨル事ナレハ、エ、シキ大事也、サレハ先義仲俱梨伽羅山ノ北ノ麓ニ陣ヲトラント思フ、其故ハ源氏礪並郡俱梨伽羅山ノ麓ニ陣ヲ取ナラハ、平家ハアハ敵向タリ、山ノ峠去馬場ノ邊ニ控ヘンスランニ、其時義仲搦手ヘ廻澄シテ、追手搦手、北南ヨリ押合テ、平家ヲ俱梨伽羅南谷ヘ攻落サント思フ也、去ハ急馳向テ陣ヲ取ントテ、信濃國住人星名黨ヲ差遣ス、已時ハカリニ礪並山ノ北ノ麓ニ着テ、日宮林ニ旗三十流打タテタリ、俱梨伽羅山ト云ハ、加賀ト越中トノ境也、嶺ニ一字ノ伽藍アリ、昔越大德諸國修行シ給シニ、俱梨伽羅明王ヲ行給タリシカハ、其ヨリシテ此山ヲ俱梨伽羅嶽共中トカヤ、越中國礪並郡ノ内ナレハ礪並共申タリ、谷深シテ山高峻難ニシテ道細シ、馬モ人モ行遠フ事輒カラス、

源氏軍配分事段長門本異、餘本自平家礪並志雄二手、此雜出有異同、皆別出于段尾、

五月十一日、平家十萬餘騎ヲ二手ニ分テ、礪並志雄二ノ道ヨリ、越中國ヘ打入ト聞エケレハ、木曾乳子ノ今井四郎ヲ召テ、義仲信濃國横田河原ノ軍ニハ、三千餘騎ニテ本卷第廿七卷、横田河原軍、此不、同、四萬餘騎ヲモ追落シキ、是ハ敵十萬餘騎御方

五萬餘騎、一人シテ敵二人ニ向、彼等ハ馳疲タル京家、西國ノ驅武者也、是ハ在國案内ノ荒手也、思ヘハ安平也、吉例ニ任テ初ハ七手ニ分テ、後ハ一ニ寄合テ、採ニ採テ南ノ谷ニ追落スヘシトテ、方々手ヲソ分チケル、一手ハ十郎藏人、行家足利矢田判官代義兼源義康子、義平、按行平姓名、本卷諸本往々河原成合落合ヲ始トシテ、然ヘキ者共一萬餘騎志雄山ノ搦手ヘ差遣ス、一手ハ根井小彌太ヲ大將トシテ、二千餘騎越中國住人蟹谷次郎ヲ案内者ニ附ラレテ、鷺島ヲ打廻リ、松永ノ西ノハッレ、小耳入ヲ透テ鷺尾ヘ打上リ、彌勒山ヲ引廻ス、一手ハ今井四郎兼平、大將トシテ、二千餘騎越中國住人石黒太郎光弘高橋次郎光延案内者ニ打具シテ、松永ノ日宮林ヘ差遣ス、一手ハ樋口次郎兼光ヲ大將ニテ三千餘騎、加賀國住人林富樫ヲ打具シテ、笠野富田ヲ打廻、竹橋ノ搦手ニコソ向ヒケレ、一手ハ信濃國住人余田次郎圓子小中太諏訪三郎小林次郎小室太郎忠兼同小太郎真光ヲ大將ニテ三千餘騎越中國住人宮崎太郎向田荒次郎兄弟二人ヲ案内者ニテ、安樂寺ヲ通り、金峰坂ヲ打上リ、北黒坂ヲ引廻シ、俱梨伽羅ノ峠ノ西ノハッレ、葎原ヘ差遣ス、一手ハ巴女ヲ大將ニテ一千餘騎、越中國住人水卷四郎同小太郎ヲ案内者ニテ、鷺嶽下ヘ差向ケリ、此巴ト云女ハ、木曾中三權頭

カ娘也、心モ剛ニカモ強、弓矢取テモ打物取テモスクヤカナリ、荒馬乗ノ上手去シ養和元年信濃國横田ノ軍ニモ向テ敵七騎討捕テ、高名シタリケンハ、何クヘモ召具シテ、一方ノ大將ニハ遣シケリ、一手ハ木曾三萬餘騎ニテ、小矢部河ヲ打渡シ、垣生庄ニ陣ヲ取、勢ノカナヲ見セントテ、胡賴子原柳原ニ引隠ス、平家ハ礪並山俱梨伽羅カ峰ヲ打越テ、坂ヲ下ニ東ヘ歩セツ、遙ニ麓ヲ見渡セ、日宮林ニ白旗四五十流打立タリ、アハヤ源氏ハ寄セタルハ、此山四方岩石也、敵左右ナクヨモ寄セシ能登路志雄山ヲハ指固、又西ハ御方ノ勢也、東ハ口一方ノ所也、高嶮シテ道狭ケルハ、源氏ニ矢種ヲ射盡サセヨトテ、俱梨伽羅ノ堂園見猿馬場ノ塔橋ノ邊ニ控ヘテ、赤旗山々岡々ニ立並タレハ、龍田山ノ秋ノ暮時雨ニ染タル紅葉葉モ、角ヤト覺テ面白ヤ、源氏ノ謀ニ少モ違ハス、平家控ヘテ左右ナクヨモス、源平陣ヲ合テ二町ニハ過ス、

○諸本云、五月八日平家ハ加賀國篠原ニ著テ、五月云々伊藤本八坂本無唯云平騎ヲ二手、大手搦手二手ニ分ツ、大手大將軍ニハ維盛通盛、鎌倉本載忠伊藤侍大將ニハ盛績、如白本佐野本傳、鎌倉本不載、而載忠侍大將軍、其勢七萬餘騎、加賀越中ノ境、砥波山ニ向、大手大將軍以下、此搦手大將軍ニハ忠度、如白

倉本不載、但鎌正、如白本一本、清房一本、佐野本無、八坂本知度、伊藤本八坂本侍大將ニハ有國、伊藤本不載、而載忠侍大將軍、光景、清ヲ始トシテ、大將軍ニハ立テ、破ラレ候、伊藤本又云、去共ト存、火越城ヲハ、源明カカヘリ、忠ニ依テ念ナフ破ラレ候、伊藤本又云、去共ト存、火越城ヲハ、源明カカヘリ、忠ニ依テ念松永ノクミ、ノ木林、柳原ノ廣ニ、打出候ナハ、彌御大事ニテ候ヘシ云々、程ナ本又云、今度ハ平家大勢ニテ、砥波山マテ向ハレ候、越中ノ廣ニ、打出候、入坂ヲハ、彌御大事ニテ候ヘシ云々、程ナ月十一日、先陣、盛俊、一黨五千人、餘騎、加賀國ヲ過、ヘト申タリ、云々、〇南都本云、五月賀越中ノ境、砥波山ヲ打越テ、黒坂柳原ヘ打出、ルト申タリ、云々、〇南都本云、五月十一日、此越後國、府ヨリ、馳向フ、行軍一萬餘騎、云々、按、南都本、此下、願書、作、五月義仲、發、越、後、前、後、國、日、木、會、ハ、越、後、國、府、ニ、有、ケ、ル、カ、是、ヲ、聞、テ、八、月、五、日、字、五、萬、餘、騎、ニ、テ、國、府、ヲ、立、テ、砥、波、山、ヘ、馳、向、フ、義、仲、カ、軍、ノ、吉、例、ナ、レ、ハ、ト、テ、七、手、ニ、分、ツ、先、行、家、一、萬、餘、騎、志、保、山、ヘ、向、ヒ、ケ、ル、兼、光、伊、藤、本、南、都、本、無、八、坂、本、小、異、註、下、落、合、五、郎、兼、行、藤、本、坂、本、南、都、本、伊、藤、本、七、千、餘、騎、ヲ、北、野、本、南、都、本、黒、坂、搦、手、字、有、一、差、遣、ス、如、白、本、云、兼、光、五、千、餘、騎、俱、梨、伽、羅、堂、仁、科、高、梨、山、田、次、郎、七、千、如、白、本、除、騎、南、本、南、都、本、北、野、本、黒、坂、野、本、如、白、本、字、一、萬、餘、騎、ハ、砥、波、山、如、白、本、ノ、ス、ノ、松、長、ノ、後、搦、手、ニ、廻、リ、ケ、ル、根、井、小、綱、太、五、千、一、萬、餘、騎、ハ、砥、波、山、如、白、本、ノ、ス、ノ、松、長、ノ、柳、原、兼、木、林、ニ、引、隠、ス、兼、平、六、千、餘、騎、兼、瀬、ヲ、打、渡、リ、伊、藤、本、八、坂、本、南、都、本、日、宮

林ニ陣ヲ取木曾我身一萬餘騎ヲ小野部ノ渡ヲシテ砥波山ノ北ノハツレ羽丹生ニ陣ヲ取坂上云義仲分平凡七云々而諸本所載六耳唯八木曾殿宣ケルハ平家ハ大勢ヲ有ナレハ軍ハ定テ懸合ノ軍ニテ有ニスラン懸合ノ軍ト云ハ勢ノ多少ニヨル事ナレハ大勢カサニ懸テ取籠ラレテハ叶フヘカラス、木曾殿宣云々至此伊藤本八坂本在義仲分軍ノ上而云先期先謀ニ南都本云手ヘ向ヘシトテ云々與餘本意義異可然考此下小異註于下旗差十人馳馬ニ乘テ終夜白旗三十流南都本作十先立テ黒坂ノ上ニ打立タラハ平家通ヲシトスルカ云々是ヲ見テアハヤ源氏ノ先陣ノ向フタルハ何十萬騎カ有ラン取籠ラレテハ叶フマシ此山ハ四方岩石ナレハ搦手ヨモ廻ラシ暫ク下居テ馬休ントテ砥波山ニ下居ンスラン其時義仲暫アヒシラフ體ニモテナシ日ヲ待暮シ夜ニ入テ平家ノ大勢背ノ倶梨伽羅カ谷ヘ追落サントテ伊藤本八坂本並云木曾謀ニ旗差ヲ先立五月十一日巳刻木曾黒坂ノ峠ニ馳著テ先白旗云々下同先白旗三十流黒坂ノ上ニ打立タレハ案ノ知ク平家はヲ見テアハヤ源氏ノ大勢ノ向フタルハ取籠ラレテハ叶フマシ爰ハ馬ノ草飼水便共ニ好也暫ク降居テ馬休メントテ砥波山ノ山中猿馬場ト云所ニ下居タル云々

○長門本云五月十一日平家十萬餘騎二手ニ分テ三萬餘騎ヲハ志雄手ニ向七

萬餘騎ヲ大手ヘ向テ盛俊カ一黨五千餘騎引分テ加賀國ヲ打過テ終夜砥波山ヲ越テ中黒坂ノ猿馬場ニ扣タリ木曾是ヲ聞テ五萬餘騎ヲ相具シテ越中國ヘ馳越池原ノ般若野ニコソ扣ヘタレ越中國住人ニ木曾ニ付中ニモ宮崎太郎ハ安宅ノ湊ノ軍ニ内兜ヲ射サセテ前後不覺也ケルヲアラタニ昇テ越中國ヘ越テ宮崎ニテ勞リケル三廿日ト云ニ疵愈ヌ初立ニ鎧著テ木曾殿ヘ參タリケレハ木曾殊ニ是ヲ感シ給弓矢取身コソ哀ナレ二ナキ命ヲ的ニ懸テ大事ノ手負テ既ニ死ヌヘカリケル人ノ蘇テ又鎧著テ出給タルコソ最惜ケレ今度軍ニハ殿原ヲ頼ソ義仲ハ小勢ナリ平家ハ大勢ト聞ユ面白ク計ヒテ敵ヲ討ニスルン此山ノ案内者ハ殿原ニテアランスルン今度ノ軍ニ勝セシハ殿原ノ計ソト宣ヘハ宮崎申ケルハ誠ニ山ノ案内ハ如何知ラテ候ヘキ此砥波山ニハ三ノ道候ナリ北黒坂中黒坂南黒坂トテ三候平家ノ先陣ハ中黒坂ノ猿馬場ニ控テ候也後陣ハ大野今湊井家津幡竹橋ナントニ宿シテ候也中ノ山ハスイテン候ランヨモツキ候ハシ南黒坂ノ搦手ノ楯近忠近親不千騎ノ勢ニテサシマハシテ鶯カ島打渡テ彌勒山ヘ上ルヘシ中黒坂ノ大將軍ハ根井小矢太千騎ノ勢ニテ倶梨伽羅ヲ廻リテ彌勒山ヘ打合セヨ北黒

坂ノ大將軍ハ、巴ト云美女千騎ノ勢ニテ安樂寺ヲ越テ彌勒山ヘ押寄ヨ、三手
 カ一手ニ成リテ関ヲ作ルナラハ、搦手ノ関ハヨモ聞エシ、平家後陣ノ勢續テ
 襲ト思テ、ウシロヘ見カヘラハ、白旗ノイクラモ有ランヲ見テ、源氏ノ搦手廻
 リタリト心得テ、アワテナカラ関ヲ合候ハンスラン、其関ノ聲聞エ候ハンス
 ラン、其時搦手ハ廻リニケリト心得テ、是ヨリ大勢ニテヒタヨセニヨスナラ
 ハ、前ニハ爭ヨルヘキ後ニハ搦手アリ逃ヘキ方ナクテ、南ノ大谷ヘ向テ落
 候ハンスラン、矢一ツ射ストモ安ク討ンズルゾト申ケリ、木曾是ヲ聞テアラ
 面白キ、弓矢取ノ謀ハカクソトヨ、平家何萬騎アリトモ安ク討ンズルナ殿
 原トテ、宮崎カ計ニツキ搦手ヲシケル、楯親忠千騎ニテ南黒坂ヲ打廻リ
 彌勒山ヘン上リケル、根井小矢太千騎ニテ中黒坂ヲ打廻リ、安樂寺ヲ越テ彌勒山ヘ
 モ彌勒山ヘン上ケル、巴モ千騎ニテ北黒坂ヲ打廻リ、安樂寺ヲ越テ彌勒山ヘ
 ソサシアハスル、去程ニ木曾殿ハ搦手ヲ廻シテ後宣ケルハ、平家ノ大手既ニ
 彌波山ヲ打越テ、黒坂柳原ヘ打出ト聞テ、聞體大勢ナリ、柳原ノ廣ク打出タル
 物ナラハ、馳合ノ合戦ニテ有ヘシ、馳合ノ合戦ハ勢ノ多少ニヨルコトナレバ、
 大勢ノカナニカケラレテ、悪キ事モヤ有ランスラン、敵ヲ山ニ込テ、日ヲ暮シ

テ後、俱梨伽羅谷ノ巖石ニ向テ追落サント思ナリ、其儀ナラハ、義仲先急キ黒
 坂口ニ陣ヲ取ヘシ、敵既ニ向タリトイハ、此山四方巖石ナリ、左右ナク敵ヨ
 モ寄シ、イサ馬ノ足休メントテ山ニ下居ヘシ、但平家ノ先陣ニ山ヲコサセシ
 トテ、旗指一人強キ馬ニ乗テ、彌波山ノ東ノ麓ナル大宮林ノ高木ノ末ニ白旗
 一流ニイタテタリ、案ノ如ク平家はヲ見テ、アワヤ源氏ノ先陣向ヒタリトテ、
 敵ハ案内者ナリ各ハ無案内ナリ、サウナク廣ミヘ打出テ、四方ヨリ懸タテラ
 レテハ、悪カリナン、此山ハ四方巖石ナリ、敵左右ナク寄ソトモ見ニス、馬ノ草
 飼水ノ便共ニヨキ所ナリ、山ヲ薙セテ馬ノ蹄モ弱リタルマ、ニ下リクタリ
 テ休メヤトテ、彌波山ニ下居ツ、猿馬場ニ陣ヲ取云云

新八幡願書事

木曾ハ軍ヲハ急カサリケリ、長門本云、木曾ハ平家カ山ヲ越テ先ニトテ、強馬ヲ
 ハ、セツル、唯、彌波山ノ東ノ麓ニ馳著メ云、先四方ヲ屹ト見渡セハ、北山ノハツレ
 ニ、當テ、北山云々、夏山ノ緑ノ木間ヨリ、緋玉墻風ノ見エテ、片割造ノ社壇アリ、山
 林高聳テ鳥居久苔ムセリ、木曾當國住人池田次郎忠康ヲ召テ、諸本不載、忠康、唯
 里ノ長ヲ召云々、彼ハ何宮ト申ソ、又如何ナル神ヲ祝奉タルソト尋給ヘハ、答

テ申、八幡大菩薩ヲ祝進セテ侍ルカ、垣生庄ニマシマセハ垣生新八幡ト申候ト云、垣生庄以下、至此、印本一本、佐野本一本、野本一本、無印本一本、伊藤本一本、木曾大ニ悦テ、手書ニ大、夫房覺明ヲ召レタリ、此僧ハ本ハ勸學院ノ文章博士進士藏人通廣、長門本、四、字、而、不、曰、名、餘、本、無、文章、博士、進士、六、字、通、廣、按、第、十四、卷、南、都、山、門、狀、段、作、進、士、藏、人、入、作、通、弘、八、坂、本、作、光、弘、伊、藤、本、作、光、廣、按、第、十四、卷、南、都、山、門、狀、段、作、進、士、藏、人、入、可、道、信、教、下、云、ケル、者、也、出、家、シ、テ、西、乘、坊、信、教、乘、四、乘、印、本、佐、野、本、伊、藤、本、最、信、教、一、本、信、久、下、名、ヲ、ツ、キ、テ、諸、本、云、常、ハ、南、都、ハ、前、都、ニ、便、宜、ノ、物、書、シ、テ、居、タ、リ、ケル、程、ニ、高、倉、宮、御、謀、反、ノ、時、三、井、寺、ヨリ、南、都、ヘ、牒、狀、ヲ、越、テ、同、心、與、力、シ、テ、宮、ヲ、モ、助、率、リ、佛、法、ノ、破、滅、ヲ、モ、見、繼、ヘ、シ、ト、申、タ、リ、ケル、ニ、返、牒、フ、此、信、教、ニ、誂、ル、本、ヨ、リ、家、ノ、能、ナ、レ、ハ、種、々、ニ、是、ヲ、書、ケル、内、ニ、太、政、入、道、淨、海、ハ、平、家、ノ、精、糲、武、家、ノ、塵、芥、ト、書、タ、リ、ケル、ヲ、入、道、安、カ、ラ、ス、事、ニ、思、ヒ、テ、其、信、教、メ、イ、カ、ニ、モ、ツ、テ、打、殺、セ、ヨ、ト、テ、内、々、伺、ケ、レ、ハ、南、都、ニ、安、堵、シ、難、シ、テ、覺、明、一、節、印、本、一、本、伊、藤、本、八、坂、本、鎌、倉、本、故、不、杖、擧、長、門、本、云、逃、出、ヘ、キ、由、思、ケ、レ、ト、モ、清、盛、道、々、ニ、方、便、漆、ヲ、湯、ニ、沸、シ、テ、身、ニ、沐、ヲ、附、テ、匿、レ、タ、リ、ケ、レ、ハ、本、ノ、姿、ニ、テ、ハ、叶、マ、シ、ト、テ、云、々、漆、ヲ、湯、ニ、沸、シ、テ、身、ニ、沐、降、服、シ、テ、癩、人、ノ、如、ク、成、テ、南、都、ヲ、逃、出、人、是、ヲ、知、ス、命、ノ、惜、サ、ニ、離、難、キ、都、ヲ、徐、ニ、見、テ、東、國、長、門、本、作、鎌、倉、本、ヘ、落、下、ケル、程、ニ、十、郎、藏、人、行、家、平、家、追、討、ノ、爲、ニ、東、國、ヨリ、都、ヘ、攻、上、テ、墨、俣、河、ニ、テ、平、家、ニ、打、落、サ、レ、テ、三、川、ノ、國、府、ニ、御、座、ケル、所、ニ、行、合、テ、行、家、

ヲ憑テシカノト云ケレハ不便也トテ湯アヒセ勞リナトシケレハ誠ノ癩病ナラネハ隣服次第ニナオリ本ノ信教ニナル行家參河ノ國府ヨリ伊勢大神宮ヘ進セケル祭文モ此信教ノ書ケル行家兵衛佐ニ中違テ信濃ヘ越ケル時又木曾ニ思附ニケリ木曾信教ヲ改テ古山法師ニ造成テ木曾太夫坊覺明ト呼白山三箇ノ馬場願書ヲモ此覺明書タリ

○砂石集云當時東大寺法師ニテ信教得業トテ才覺ノ仁アリケリ朗詠ノ註ナトシタル者也山法師ノ事ヲ一卷ノ真言ニツクリテ陀羅尼ヲ説テ曰庵山法師腹黒々々欲深々々アラニクヤ娑婆訶トツクレリ信教ソシツラントテ山法師イキトヲリフカ、リケレハ本寺ヲ離レテ田舎ニ住ケリト云ヘリ云々

筆ニ自在ヲ得詞ニ徳ヲ兼タレハ木曾云ケルハヤ、大夫殿一湯云々至此印本鎌倉本如白本佐野本南都本無唯云此國ヘ落下水曾殿ノ幸ニ當國新八幡宮御手書シテ大夫房覺明ト名乗云々白山云々至此長門本無幸ニ當國新八幡宮御寶前ニ近ツキ奉テ合戰ヲ遂ントス今度ノ軍勝ン事疑ナシ但且ハ後代ノ爲且ハ當時ノ祈ニ願書一紙社殿ニ進セハヤト存ス其相計ヒ給ヘト云覺明馬ヨリ下木曾カ前ニ跪テ箆ノ中ヨリ矢立取出シ墨筆ニ和シテ墨紙ヲ染テ押開テ古物ヲ寫カ如ク案ニモ及ハス是ヲ書其狀云假字願書如白佐野南都三本同用

トノ書タリケル書餘本異別出于下本覺明其日ノ裝束ニハ、褐衫ノ鍔直垂ニ首
丁頭巾シテ、拵繩目ノ冑ニ黒ッ羽ノ征矢負テ、三尺一寸ノ長門本不曰尺寸唯赤
銅造之太刀帶塗籠籐ノ弓脇ニ挾テ、左ノ手ニ願書ヲ捧、右ノ手ニ筆ヲ持テソ居
タリケル、

○印本一本伊藤本、八坂本鎌倉本、如白本、佐野本、南都本、云、覺明カチノ直垂黒絲
絨鏡著作黒絲佐野本、南都本、鎌倉本、伊藤本、作黒革一本拵繩目如白本、鏡黒漆
太刀ヲ帶、二十四差タル黒ホロノ南都本無二十四差矢負塗籠籐弓脇ニ挾、伊
下有五枚字、以兜ヲ脱テ高紐ニカク云々、下同

哀文武ノ道ノ達者哉トソ見エタリケル、此願書ト印本、伊藤本、八坂本、鎌倉本、佐
始一門云々、木曾十三ノ表矢トヲ拔テ、折節雨降ケレハ、鏡著タル男ニ鏡ノ下隠シ
持セテ、忍ヤカニ折節云々、唯大菩薩ノ社壇へ進ル、此願書以憑哉八幡三所誠ノ
志ノ深ヲ御納受アリケルニヤ、白鳩空ヨリ白鳩、印本、伊藤本、八坂本、佐野本、南都
印本、鎌倉本、如白本、佐野本、一本有二字、飛來テ、白旗ノ上ニ翻爾ス

○印本一本鎌倉本、如白本、佐野本、云、昔神宮皇后新羅ヲ攻サセ給ヒシ時、御方ノ
戰弱ク、異國ノ軍強シテ、既ニ角ト見エシ時、皇后天ニ御祈誓アリシカハ、雲ノ

中ヨリ雲鳩三ツ飛來テ、御方ノ楯ノ面ニ顯テ、異國ノ軍破レテケリ、又此人々
ノ先祖賴義朝臣、奥州ノ夷貞任宗任ヲ攻給シ時、御方ノ戰弱ク、凶賊ノ軍強ク
シテ、既ニ角ト見エシカハ、賴義朝臣敵ノ陣ニ向テ、是ハ全ク私ノ火ニ非ス、神
火ナリトテ火ヲ放ッ、風忽ニ夷賊ノ方へ吹覆、粟屋河ノ城燒落ヌ、其時軍破レ
テ貞任宗任亡ニケリ、木曾殿加様ノ先縱ヲ思出、云々下同、
木曾馬ヨリ飛下テ、兜ヲ脱、首ヲ地ニ著テ、是ヲ拜奉ル、大將軍角シケレハ、兵皆下
馬シテ、同是ヲ拜ス、以上、伊藤本、八坂本、如白本、長門本、以下、平家ノ先陣モハルカニ是
ヲ見テ、身ノ毛豎テソ覺エケル、

彌並山合戰事自此以下凡三段、諸本編次先後、事實不同
木曾ハ彌並山黒坂ノ北ノ麓垣生社八幡林ヨリ松永柳原ヲ後ニシテ黒坂口ニ進
南ニ向テ陣ヲ取、平家ハ俱梨伽羅カ峠猿馬場塔ノ橋ヨリ始テ、是モ黒坂口ニ進
下テ、北ニ向テ陣ヲ取、兩陣相隔事五六段ニハ過ス、互ニ楯ヲ突向ヘタリ、木曾ハ
勢ヲ待得テモ合戰ヲハ急カス、平家ノ方ヨリモ源氏ノ様ヲ守テ進ミ戰事ナシ
関三箇度合テ後ハ、兩陣靜リ返テソアリケル、良暫有テ源氏ノ陣ヨリ精兵十五
騎ヲ楯ノ面ニ出シテ、十五ノ表矢ノ鏑ヲ同音ニ射サスレハ、平家モ十五騎ヲ出

合テ是モ十五ノ騎ヲ射返ス互ニ勝負セント進ミケレ共陣ヨリ制シテ招キケレハ源氏ハ楯ノ内ニ入源氏入レハ平家モ同入ニケリトハカリ有テ二十騎出シテ射サスレハ又二十騎ヲ出合テ會釋ス三十騎五十騎出合出射ケレ共互ニ勝負ハナシ角操リ日ヲ晩シテ夜ニ入後ノ山ヨリ搦手ヲ待テ追手搦手押寄テ南ノ谷ヘ追落サント計ケリ平家はヲハ知スシテアヒシラフコソ無慙ナレ五月十一日ノ夜半ニモ成ニケリ五月ノ空ノ癖ナレバ朧ニ照ス月影夏山ノ木下暗キ細道ニ源平互ニ見エ分ス平家ハ夜討モコソアレ打解寢ヘカラスト催ケレ共下疲タル武者ナレハ鎧ノ袖ヲ片敷兜ノ鉢ヲ枕トセリ源氏ハ追手搦手様々用意シタリケル中ニ樋口次郎兼光ハ搦手ニ廻タリケルカ三千餘騎其中ニ太鼓法螺貝千ハカリコソ籠タリケル木曾ハ追手ニ寄セケルカ牛四五百匹取集テ角ニ續松結附テ夜ノ深ルヲソ相待ケル去程ニ樋口次郎林富樫ヲ打具シテ中山ヲ打上葎原ヘ打寄タリ根井小彌太二千餘騎今井四郎二千餘騎小室太郎三千餘騎巴女一千餘騎五手カ一手ニ寄合セ一萬餘騎北黒坂南黒坂引廻シ時ヲ作太鼓ヲ打法螺ヲ吹木本萱本ヲ打ハタメキ墓目鑄ヲ射上テトメキ懸タレハ山彦答テ幾千萬ノ勢共覺ニサリケルニ木曾スハヤ搦手ハ廻シケル

時ヲ合セヨトテ四五百頭ノ牛ノ角ニ松明ヲ燃シテ平家ノ陣ヘ追入胡賴子木原柳原上野邊ニ扣ヘタル軍兵三萬餘騎聞テ合喚叫黒坂表ヘ押寄ル前後四萬餘騎カ関山モ崩岩モ摧ラント夥シ道ハ狭シ山高シ我先我先ト進兵ハ多シ馬人共ニ壓ニ押レテ矢ヲハケ弓ヲ引ニ及ハス打物ハ鞘ハツシ兼タリ追手ハ搦手ニ押合セント責上搦手ハ追手ト一ニナラント喚叫フ平家ハ兩方ノ中ニ取籠ラレタリ軍ハ明日ソアランスラント取延テ思ヒケル上如法夜半ノ事ナルニ俄ニ時ヲ造懸タレハコハ如何セント東西ヲ失ヒ周章騷弓取物ハ矢ヲトラス矢ヲハ負共弓ヲ忘背ヲ著テ甲ヲキス太刀ニニ二人三人取附弓一張ニハ四五人ツカミ付ケリ馬ニハ逆ニ乗テ後ヘアカハセ或ハ長刀ヲ逆ニ突テ自足ヲ突切テ立アカラサル者モ有ケレハ踏殺サル類多シ主ノ馬ヲ取テハ主ヲ忘レ親ノ物具ヲ著テハ親ヲ顧ス唯我先我先ニト諍ヘ共西ハ搦手也東ハ追手也北ハ岩石高シテ上ルヘキ様ナシ南ハ深キ谷也下スヘキ便ナシ間サハクラシ案内ハ知ラス如何カスヘキト方角ヲ失ヘリ此山ハ左右ハ極テ惡所也後ハ加賀御方也三方ハ心安思ツルニ後陣ヨリ敵ノヨセケル怪怪危危今改改之之シサヨト思ケレハ只云事トテハ打破テ加賀國ヘ引ケヤ者トモ々々ト呼リケレ共搦手

向ハシム兼平歩騎六千ヲ帥ヒ鬼臥寒原越並在ヨリ四十八箇瀬ヲ八ヶ瀬川トテ古
 リ八ノノ異名也長享元年、龜嘉法師、吾妻紀行中、越中、四十八、瀬、テ、歌、ニ、テ、四、十、流、
 リ、出、テ、其、水、也、源、ハ、信、州、ヨ、リ、出、ル、也、新、川、郡、ニ、ア、リ、或、レ、ハ、越、後、ノ、黒、瀬、川、ト、テ、
 越中黒瀬川トテ、源ハ信州ヨリ出ル也、新川郡ニアリ、或レハ越後ノ黒瀬川トテ、
 ハビメノ上略ナレハ黒瀬川相道ノ同訓也、北國ノ方百坊考フレハ、黒瀬川トテ、
 御在、北、代、山、御、村、大、ヶ、福、ト、二、所、ル、ア、周、宮、山、領、寛、保、二、年、陣、跡、モ、ア、ル、ナ、ル、ニ、
 陣ス

九日、今井兼平、平兵般若野ニ雲屯スト、聞キ、味爽ニ白旗三十脚オシ樹ヲ吶喊ヲ
 發シ、鼓譟シテ進ム、平兵モ聞テ合セ進鼓ヲ鳴シテ、隊ヲ激マシ、持角ノ形勢ヲナ
 シ、互ヒニ身首所ヲ異ニスル者、擧テ鬪ル可ラス時、已ニ星ヲ見ルニ、暨ンテ平軍
 士卒死傷ニ堪ヘス、披靡敗走スルヲ、源兵提ニ乘シテ尾撃シテ止マス、平兵小
 矢部河ニテ還リ拒ミ督戰ス、トイヘトモ、渡兵過半粉散スレハ、盛俊俱利伽羅ヨ
 リ加賀ヲ指シテ、綏ソク是ニ因テ、平將重ネテ大軍ヲ二隊ニ分ケ、越中へ攻入シ
 ト、部署ヲ定ム、一隊ノ總督ニハ、維盛行盛忠度、宗兵ニハ、忠經、季國、長綱、越中權頭
 範高之傳、日本史ニ等ヲ先鋒トシテ、介子七萬俱利伽羅山ヨリ討入ントス、其衆森

本南今森下ニ作ル大庭今大場崎田今才田井家今庄也津幡東經ニ部幡ニ作リ大
 多ニ津旗ニ此九代荒井若クハ荒屋カシ開野今ト云七竹橋ニ在利伽羅山内下皆竹橋ニ
 盛跡ヲ以テ七所地跡ニ叙次舊史之ヲ失スニ各陣ス、一隊ノ總督ニハ、通盛、知
 效宗兵ニハ、盛俊、忠清、景家、都テ、甲兵三萬、志雄山、今羽郡ニ在リ、或ハ志保ニ作
 喜式ニ此郡ニ志乎神社アリ之ヲ以テ考フルニ志乎神是也ト古ハ向フ、其衆宮腰木坊
 宮野腰宮越ニ德藏道地ノ名ナシ今大野三所文ニ註ス、以上室尾今室ニ青崎
 今大崎日角見ニ今日角白生四所河北郡ニ風ス以上ニ各陣ス、彼是通兵十萬山ヲ塞
 海ニ沿ヒ、金鎗蟲々トシテ日ニ映シテ、鄂林ノ如ク、赤旗搖々トシテ、風ニ翻リ
 テ、其勢儼然タリ、義仲モ越後ノ國府ヲ調發シ、越中へ進メ、越前ノ本庄、樋口、齋
 藤ノ一族、加賀ノ林、富樫、井家、津幡、林ハ、光明、宮樫、ハ、泰家、井家、ハ、上文ニ戰死セル
 ノ族、能登ノ土田、畠山、祖得、田耶、今通頼朝公ヨリ下文ニテ、龍州、四ヶ一、盛、章、十五
 未々頼朝公ノ治世ナラ子ハ此ニ云、土田ハ、別入カ、關ヘス、考、日、置、郡、古、管、郡、ニ、日
 置、此、地、ノ、按、ス、ル、越、中、ノ、野、尻、河、上、ニ、註、ス、上、文、石、黒、光、弘、シ、宮、崎、太、耶、シ、等、馳、集、ル、義、仲
 六助寺ノ國府略註ニ到テ、點行スルニ、其兵五萬也、義仲時ニ大夫坊覺明、平家物
 八、備、家、ニ、テ、藏、人、道、廣、ト、テ、勸、學、院、ニ、候、セル、カ、出、家、シ、テ、最、乘、坊、覺、明、者、元、是、南、都
 久、六、年、九、月、十、三、日、ニ、ハ、故、水、曾、左、馬、頭、義、仲、朝、臣、右、筆、有、大、夫、坊、覺、明、者、元、是、南、都

トシテ、鷲ヶ嶽ヨリ一里ノ南谷ノ向也。四日町ニ當ル永尾村ノ領、今石動ノ麓ヘ向
 ハシム一隊ハ、義仲中軍ノ帶甲三萬小矢部川ヲ歴テ、地生庄ノ領ニ至リ、此地生
 郷ノ地生庄ノ領ニ至リ、此地生郷ノ地生庄ノ領ニ至リ、此地生郷ノ地生庄ノ領ニ至リ、
 マテハ此郷名ヲ以テ陣シ、歩騎ノ多寡ヲ見ハス可カラストテ、胡頼子原ノ村ニ
 在リシト見ユ。柳原村ノ領、今石動ノ向也。ト云ニ、隱在スル所ノ盛衰、記ニ載ス
 下ル山路ノ南ナリ。山ナリ。柳原村ノ領、今石動ノ向也。ト云ニ、隱在スル所ノ盛衰、
 シカレラノ文密也。蓋ナリ。以テ、景周今ノ一從テ、本行ノ家ノ一萬物志保ハ、是ヘ
 南、一隊ハ、樋口兼光落ハ、合兵行、永ノ七千、原、黒坂ニ向ヒ、仁科、高梨、山、田、平、ノ七、
 千、日宮、林、ニ、陣シ、向フ處ハ、義仲ノ名、モ、同カ、ラ、丹、生、數、百、歳、上、ハ、ア、コ、ト、テ、七、
 コトヲテ、可ナリ。時ニ、平兵ハ、俱利伽羅山ヲ登リ、日宮林ニ、白旗飄、飄タルヲ望ンテ、
 皆曰ク、源兵ハ、來進ス、然レトモ、此山四面、斷巖天然ノ要害、備リヌ、能登路志雄山
 ハ、既ニ防備ヲ置ヌ、只正東一面、敵ヅキ也。トイヘトモ、狹路崎嶇トシテ、澁滑足ヲ
 受サレハ、徒ニ、敵野矢ヲ射費スヘシト、俱利伽羅堂、寺、是ナリ。樂國見、詳ナラズ、若ク
 猿馬場ノ塔橋ノ間ニ、ア、上、文、ノ、馬、場、邊、村、ト、云、中、大、谷、ト、云、所、ニ、在、リ、シ、ト、モ、長、坂、也、
 ニ、屯、シ、テ、赤、幟、ヲ、羅、立、ス、南、ハ、松、尾、領、源、四、八、松、永、領、東、ハ、道、林、寺、村、領、也、此、所、長、村、領、
 越、陸、跡、アリ、今、ハ、柴、山、也、俱、利、伽、羅、道、永、二、右、平、方、兵、ニ、見、ユ、ル、所、シ、テ、崩、落、兵、ノ、攻、テ、詳、之、

按チ、按シヨリ、此名ヲラント、平源ノ兩軍相去コト僅ニ五六段、平家物語アリハ共ニ楯
 ヲ羅ネ、岡ヲ發スルコト三タヒ、牛角ノ形勢ヲ持シテ、敢テ進撃セス、時ニ、義仲、地
 生八幡社、當社ハ、發老中ヨリノ、鎮座ト云、中古兵亂ノ爲ニ、此社毀廢ヒシナ、廢ヘ、覺
 明ニ命シ、願書ヲ書セ、古木ノ、平家物語ニ、覺明ノ、御前ニ、ホウシ、テ、ヨリ、小、祝、書、ヲ、書、ク、
 リ、ト、ア、奉、納、アル、ニ、地、生、入、社、願、書、ヲ、求、メ、テ、臨、寫、ス、○、中、略、此、願、書、筆、力、精、妙、全、周、即
 要作ニ非ス、誠ニ六百年前ノ遺美、寶篋ノ文トシ、惜ラクハ、古紙脆弱、損壞シテ、卷、舒
 ニ耐ヘス、此願書ノ文、平家物語、印、行、本、盤、ノ、文、ト、校、合、ス、ル、ニ、所、々、大、ニ、違、ヒ、アリ、又、舒
 奉納神鏡ノ圖ヲ、盛長私記ニ、載ス、今、此、社、藏、ノ、鐵、形、ト、異、也、私、記、ノ、杜、撰、解、願、捧、腹、テ、
 疑ナキ、白鳩來テ、旗頭ニ、翺、翔、ス、義、仲、鞍、ヲ、下、ツ、テ、拜、伏、ス、レ、ハ、諸、將、卒、咸、團、欒、跪、拜
 シ、心ニ勝候ヲ得テ、各適悦ス、既ニシテ、銳ヲ、蓄ヘ、謀ヲ、養ヒ、信地ヲ、定メ、精甲十五
 騎ヲ出シテ、表矢ノ鏑ヲ射サスレハ、平軍ヨリ、モ、十五、騎ヲ、出シテ、射反ヘス、二十
 騎出シテ、射サスレハ、亦二十騎出シテ、應射ス、義仲之ヲ、以テ、敵ヲ、挑ミ、伴ツテ、其
 戰ヲ緩ニシテ、日暮ニ及ヒ、遞ニ、休戰ス、其夜二更ニ至ル頃、ホヒ、平將行夜ノ者ヲ
 シテ、營中ヲ問シムルニ、衆卒疲憊、皆免冑胄、甲冑、睡、麁、々、タリ、源將夜斫ノ期ヲ、圖
 リ、樋口兼光、信濃權守兼通ノ子、銳甲三千ヲ帥ヒ、鼓螺千許ヲ鳴シテ、敵背ヘ、出ツ、
 又根井行親ノ利兵二千、今井兼平ノ二千、小室太郎ノ三千、輜給ノ一千、四部合セ

ヲ萬甲北黒坂南黒坂北黒坂ハ上文ニ註ス南黒坂ハ源氏峯ノ南ニテ大開
 ヲ發シ急鼓進螺鳴鑼浪放シテ暴撃スレハ山嶽ニ響キ其猛勢百倍ス義仲ハ數
 百ノ猛牛ヲ聚メ群角ニ巨炬ヲ縛シ平家物語ニハ牛ノ事ヲ載セス壯士銳卒其後ニ從ヒテ平
 陣ニ入レハ烈火ノ燔燄天雲ヲ燭シ叫聲ノ響キ地軸ヲ動カス平兵既ニ東西ニ
 敵アリ南北ハ巖壑也周章狼狽馬ハ鞍ニ及ハス人ハ甲ニ及ハス愕然惘然タリ
 加之中夜昏黑生路ヲ辨了セサルニ忽爾トシテ白甲ノ一軍三千騎許來リ大呼
 シテ曰ク平軍我ニ從テ遁通スヘシト平氏ノ退兵是ヲ觀テ神助也ト思ヒ即チ
 從フテ南壑ニ赴ク者五百人平氏ノ諸軍又是ヲ觀テ以為ラク前軍走路ヲ得テ
 去ト平軍擧テ人ハ魚貫シ馬ハ頭尾相啣ミ一時ニ之カ後ニ從ヒ下ルニ前頭ハ
 不測ノ谷也來路ニ歸ラントスルモ後走ノ者相蹂躪騰踐シテ進ミ之カ爲ニ擠
 ナル人馬算ナシ後走ノ群衆之ヲ知ラス前路誤タスト愈相爭フテ先ンセン
 トス遂ニ人馬相踏墮シ積屍俱利伽羅谷ヲ填テ一萬八千騎平家物語ニハ北城
 ノ鬼トナル平家物語ニハ飛騨郡官最河内判官秀國此谷底ニ抑俱利伽
 羅谷ハ黒坂山ノ嶺ニ此村ハ下坂ヲ今モ土人ハ黒坂ト云トナリ猿ケ馬場ノ東
 ニアリテ其谷ノ中心ニ十餘丈ノ瀑布アリ千歲瀧ト名ツク千歲瀧ハ松尾村領

川ノ源ニテ今ハ瀑ノ此瀑布ノ左右ヨリ杉木茂生シテ梢杪最高シ此樹半過ル
 長サ一丈餘アリト云此谷ヲ地獄谷又馳入谷源一本ニ道入谷ニ作ル松尾村領也
 マテ積屍滿テリ因テ此谷ヲ地獄谷又馳入谷源氏峰ノ西北ノ平ラノ上ハ蓮沼
 村領下ハ松永村領ヨト緯號スト也サテ曙レハ十二日平知教五十騎ヲ帥キテ
 接撃シ平爲盛モ一隊ニ將トシテ奮闘ス其英風當ルベカラス義仲是ヲ望テ曰
 ク驍將討取ルヘシト利兵二百ヲシテ圍マシム時ニ知教ノ馬射斃サルニ位
 フ岡田冠者親義進撃ス知教奮勇翻ツテ親義ノ首ヲ斬リ落ス岡田太郎重義繼
 テ來撃ス知教ノ從士二十餘騎防禦甚力メ重義モ之カ爲ニ死セントスルコト
 數也親義ノ殘兵三十餘騎重義ヲ救テ健闘ス因テ平源ノ士卒命ヲ鋒刃ニ隕シ
 枕籍スル者多シ知教遂ニ脱スルコト能ハストオモヒテ自裁ス知教ノ墳北河
 アリ今里人平谷此土ニ一殿死ニ能州ニ宮邊水白村ニ塚アリ土人云是參河守知
 教ノ塚ニテ知教此土ニ一殿死ニ能州ニ宮邊水白村ニ塚アリ土人云是參河守知
 教討ルハコトマテアス爲盛ハ岡田小次郎久義ト支拂シテ樋口兼光ニ首ヲ獲ラ
 ル爲盛ノ古墳ハ今石動御旅屋境内此説甚疑ハシ參稽スヘシ平將館五郎
 貞康伊勢八十餘騎ヲ指麾シテ進撃セントス叔父小坂三郎宗綱喜テ曰前軍既
 ニ敗レ後軍亦圍マレヌ我今七旬瀕死ノ翁也而シテ節ニ死センハ兜蓋家ノ一
 快事ナラヌヤト貞康對テ曰ク可也凡戰ハ兵ノ多寡ニアラストイヘトモ敵徒

今我ニ比スレハ、寡兵ニシテ、我兵數ノ半ニ當ラスシテ、却ツテ此敗ヲ取ル、何ノ
 面目アツテ他日都人士ニ面センヤト、疲馬ニ鞭ヲ揚テ、宗綱ト並進シ、俱ニ戰死
 ス。宗綱良謀ニ本、古墳アリ、依テ平衆大ニ崩潰ス。義仲ハ黒坂嶺ニ綏ヲ收ム。郡北
 根ニ傳ル也。按スルニ、義仲此時ナラシメ、平家物語ニハ、義仲志保山ヲ越テ、能登ノ小田
 中親王、盛衰ノ前ニ陣ヲ取シ、源行家ハ、志雄ノ戰ニ敗軍シ、盛俊勝ニ乘テ、幸ヲ趁
 フ、時ニ義仲俱利伽羅ニ大捷ヲ獲テ、志雄ニ向フト聞エレハ、盛俊衆ヲ顧テ曰ク、
 我今勝利ヲ得トイフトモ、總帥維盛既ニ喪シ、義仲又此ニ向フト聞クウヘハ、
 餘ヲ交ルニ及バズト、盛俊是ヨリ引去リ、宮腰佐良嶽濱ニ止マリ、佐良嶽山ニ其
 加賀ノ事、大野、淡路、社、京、周、按、スルニ、石川、郡、大、野、庄、寺、中、社、ハ、佐、那、武、明、神、也、延、喜、武、ニ
 佐、那、武、明、神、也、延、喜、武、ニ、加、賀、ノ、事、大、野、淡、路、社、京、周、按、ス、ル、ニ、石、川、郡、大、野、庄、寺、中、社、ハ、佐、那、武、明、神、也、延、喜、武、ニ
 八、又、誤、シ、沙、山、ア、リ、テ、古、ト、尤、也、此、邊、ニ、山、嶽、更、ニ、佐、那、武、明、神、也、延、喜、武、ニ、加、賀、ノ、事、大、野、淡、路、社、京、周、按、ス、ル、ニ、石、川、郡、大、野、庄、寺、中、社、ハ、佐、那、武、明、神、也、延、喜、武、ニ
 ノ、如、キ、誤、シ、沙、山、ア、リ、テ、古、ト、尤、也、此、邊、ニ、山、嶽、更、ニ、佐、那、武、明、神、也、延、喜、武、ニ、加、賀、ノ、事、大、野、淡、路、社、京、周、按、ス、ル、ニ、石、川、郡、大、野、庄、寺、中、社、ハ、佐、那、武、明、神、也、延、喜、武、ニ
 ノ、今、其、沙、山、ヲ、指、テ、佐、那、武、明、神、也、延、喜、武、ニ、加、賀、ノ、事、大、野、淡、路、社、京、周、按、ス、ル、ニ、石、川、郡、大、野、庄、寺、中、社、ハ、佐、那、武、明、神、也、延、喜、武、ニ
 平卒、又此ニ來リ聚ル、盛俊是ヲ指麾シ、勢復振フ、源軍ハ綏ヲ收メテ、平岡野ノ木
 立林ニノ景周、按ルニ、平岡野ハ、今陣シテ休戦ス、

〔三州志〕

覽二因概 壽永二年略 中科野ノ木曾義仲建旗一タヒ、塵ケハ北陸七州
 ノ士響ノ聲ニ應スルカ如シ、此時越中土着ノ豪士石黒光弘等、石黒太郎光弘、高
 志直、福田二郎、範高、吉田四郎、加茂島七郎、宮崎太郎、南保二郎、家隆、入膳、小太郎、家
 安河上某、野義仲ニ黨ス、
 藤原範高、越中權守たり、

〔大日本史〕

國郡司、越中守、藤原範高、權官、壽永二年五月見、

八月 朔癸巳

十八日、庚辰、以仁王の王子北陸宮越中の宮崎に居給ふ、是日、立皇の議あり、源
 義仲北陸宮を立てんとせしも、其議遂に行はれず、

〔明月記〕

治承四年五月十六日丁卯

三條宮配流事、今日朝傳聞、三條宮配流事、日來云々、夜前檢非違使、相具軍兵圍被第、賜源氏之姓、
 先是主人逃去、其所、同宿前齋宮、親王、又逃出、終如漢主出、成阜與藤公、共車、歟、
 巷説云、源氏入園城寺、衆徒等、搥鐘催兵云々、平中納言頼盛、卿參入、條院、搜檢御所、

今我ニ比スレハ、寡兵ニシテ、我兵數ノ半ニ當ラスシテ、却ツテ此敗ヲ取ル、何ノ
 面目アツテ他日都人士ニ面センヤト、疲馬ニ鞭ヲ揚テ、宗綱ト並進シ、俱ニ戰死
 ス。宗綱貞康二士ノ古墳共依テ平衆大ニ崩潰ス、義仲ハ黒坂嶺ニ綏ヲ收ム、郡北
 根ニ陣跡アリテ、義仲俱利伽羅ノ役ニ此所ニテ兵ヲ賦リシト云フ、土人ノ口
 碑ニ傳ル也、按スルニ、此時ナラフ、平家物語ニハ、義仲志保山ヲ越テ能登ノ小口
 中親王塚ノ前ニ陣ヲ取シ、源行家ハ、志雄ノ戰ニ敗軍シ、盛俊勝ニ乘テ、奔卒ヲ趁
 フ、時ニ義仲俱利伽羅ニ大捷ヲ獲テ、志雄ニ向フト聞エレハ、盛俊衆ヲ願テ曰ク、
 我今勝利ヲ得トイフトモ、總帥維盛既ニ喪帥シ、義仲又此ニ向フト聞クウヘハ、
 餘ヲ交ルニ及バズト、盛俊是ヨリ引去リ、宮腰佐良嶽濱ニ止マリ、佐良嶽山ニ
 加賀ノ事詳ナラス、景周按スルニ、石川郡大野庄寺中社ハ、佐武明神也、延喜式ニ
 佐武明神ノ山ナルハ、佐良嶽濱ト奉強セシナル、盛俊等ノ他邦ノ人ノ編々ナル字
 ニ、又誤テ山重ナルコト尤也、此邊ニ山嶽更ニ多シ、或云古ノ大野今ノ黒津舟山
 ノ如キ、沙山アリテ古木陰森タリ、其中ニ佐武明神ノ社アリ、今ノ黒津舟山
 ノ邊跡ニト云々、處アリ、山缺ケテ、社大野、淡社、宮腰ト號ス、然ルニ地
 ノ今ノ寺中ノ地ニ遷テ、佐良嶽ト也、此説ニ因ルトキハ、舊永抵テ赤旗ヲ樹レハ、壞散ノ
 平卒又此ニ來リ聚ル、盛俊是ヲ指麾シ、勢復振テ、源軍ハ綏ヲ收メテ、平岡野ノ木
 立林ニノ景周按ルニ、平岡野ハ今陣シテ休戰ス、

〔三州志〕

覽二因概 壽永二年○中科野ノ木會義仲建旗一タヒ、歴ケハ北陸七州
 ノ士響ノ聲ニ應スルカ如シ、此時越中土着ノ豪士石黒光弘等、石黒太郎光延、高
 耶直福、光五郎千國、太耶真高、向田二耶村高、水卷四耶安高、同小太郎安經、中村太郎
 忠直、福田二耶範高、吉田四耶加茂、島七耶宮崎、太耶南保、二耶家隆、入膳小太郎家
 安河上某野 義仲ニ黨ス、
 凡某等也

藤原範高、越中權守たり、

〔大日本史〕

三百年八十四 國郡司、越中守欄

藤原範高

權官 壽永二年五月見

八月 朔 癸巳

十八日、庚辰、以仁王の王子北陸宮越中の宮崎に居給ふ、是日立皇の議あり、源
 義仲北陸宮を立てんとせしも、其議遂に行はれず、

〔明月記〕

治承四年五月十六日丁卯

三條宮配流事

今日朝傳聞、三條宮配流事、日來云々、夜前檢非違使、相具軍兵圍彼第、其名以光云々

先是主人逃去、其所不知、同宿前齋宮親王内、又逃出、終如漢主出成阜、與藤公共車、歟

巷説云、源氏入園城寺、衆徒等搥鐘催兵云々、平中納言頼盛卿參入、條院搜檢御所

中申請彼孫王依遲々及搜求云々良久孫王遂出給重寶稱大越中一人相隨但納言相具向白川宮出家云々

〔玉葉〕七十 壽永元年七月廿九日丁天晴早旦全玄僧正來大將訪也語云前幕下年來所召仕之侍兩三人引率逝去東國奉具三條宮子宮云々而於路頭皆悉被

擗留了云々又或人云讚岐前司重季向北陸道了事若實者不能左右事也
八月十一日酉天晴傳聞讚岐前司重季使定入越前國了云々故宮子若宮一定奉相具云々

〔玉葉〕八十 壽永二年八月十四日丙入夜大藏卿泰經爲御使來先是召依疾也余隔簾調之泰經云踐祚事高倉院宮二人一人信隆卿女腹四歲一之間思召煩之處以外大事出來了義仲今日申云故三條宮御息宮在北陸義兵之勳功在彼宮御

力仍於立王事者不可有異議之由所存也云々仍重以俊堯僧正與義仲爲被仰子細云我朝之習以繼體守文爲先高倉院宮兩人御座乍置其王胤強被求孫王之條神慮難測此條猶不可然歟云々義仲重申云於如此之大事者源氏等雖不及執申粗案事之理法皇御隱居之刻高倉院恐權臣如無成敗三條宮依至孝亡其身爭不思食忘其孝哉猶此事難散其醜但此上事在勅定云々者此事如何可計奏者申云

於他朝議者不顧事之許否每有諮詢述愚歎至王者之沙汰者非人臣之最普法皇御宇之始近衛上皇御事之後以誰可爲主哉之由鳥羽院被問仰此法性寺思通入道相國即奏以我君御事從彼言踐祚已了彼時猶依恐冥鑒兩三度不言是非只請勅斷叙問及再三之時以道理奏達朝之重臣國之元老猶恐重事之不輕屢不能自專況區々之末生不肖之愚臣得而不可言上偏任叙慮須被行御占之由雖可令計奏其條猶有恐只以叙念之所欲可令存天運之令然之由御歟者泰經退出了

八月十八日庚終日雨降今日議定之趣追可尋記之定無異議歟近代之作法而已靜賢法印以人傳云立王事義仲猶辭申云々此事先始以高倉院兩宮被卜之處官察共以兄宮爲吉之由占申之其後女房丹波御愛物遊君今夢想云弟宮四位信隆有行幸持松枝行之由見之奏法皇仍乖卜筮可奉立四宮之樣思食云々然間義仲推舉北陸宮仍入道關白藤基房攝政藤基通左大臣藤經宗余四人應召三人參入余依病不參彼三人各被申云北陸宮一切不可然但武士之所申不可不恐仍被行御卜可被從彼趣松殿一向不及占可被仰御子細於義仲云々余只奉勅定之由申了仍折中被行御占之處今度第一四宮後鳥羽事也依夢想第二三宮後高倉第三北陸宮官察共申第一最吉之由第二半吉第三始終不快以占形遣義仲之處申云先以北陸宮可被

立第一之處、被立第三無謂、凡今度大功彼北陸宮御力也、爭賦止哉、猶申、谷郎從等、可申、左右之由申云々、凡勿論之事、歟、不能左右、凡初度卜筮、與今度卜筮、被立替一、二之條、甚有私事歟、卜筮者不再三、而此立王之沙汰之間、數度有御卜、神定無靈告、歟、小人之政、萬事不一決、可悲之世也、

〔玉海〕

三十 壽永二年八月廿日、壬天晴、此日有立皇事、高倉院第四宮御年四歲、母故正三位修理大夫信隆

隆兼日、頻有其沙汰、先以高倉院兩宮、三、四、被卜筮、立第一、之、處、官寮共申、一吉之、由、其、後、女、房、有、夢、想、事、子、細、見、先、日、記、四、又、義、仲、引、級、座、加、賀、國、之、宮、子、細、見、如、此、之、間、更、又、有、御、卜、筮、立、第、三、云、々、又卜申一吉之由、第二半吉、第三不快云々、以下形遣、義仲之處、大忿怨申云、先次第之立、甚以不當也、依御歲次第者、加賀宮可立、第一也、不然者、又如初可被為先兄宮、事體似矯、餽、不思食、故三條宮至孝之條、太以遺恨云々、然而一昨日重遣御使、正俊、與、木、數、偏、往、還、恐、申、可、在、御、定、之、由、仍、其、後、一、決、云、々、今日之事、依為新儀、左大臣造進次第、就彼越、可行云々、

〔參考源平盛衰記〕

十五 宮御子違事、長門本無餘本有、異別出、于段尾、

高倉宮ニハ腹々ニ御子數多マシ、ケリ、按以仁王之子、本番諸本五異、且有宮、討レサセ給スト披露アリケレハ世ヲ恐マシ、テ散々ニ忍隠サセ給墨染ノ

袖ニヤツレサセ給ケリ、中略又御子一人オハシケルヲハ、高倉宮ノ御乳人讃岐

前司重秀、諸本有、北國、へ具シ下シ進ラセタリケルヲ、木曾モラナシ奉テ、越中國

宮崎ト云處ニ御所ヲ造テスヘ進ラセ、御元服アリケレハ、木曾カ宮共申、又還俗

ノ宮共申ケリ、嵯峨ノ今屋殿ト申ケルハ、此宮ノ御事ナリ、○諸本並云高倉宮ハ

腹々ニ御子ノ宮違數多オハシケリ、略、中、奈、良、ニ、モ、又、御、一、所、オ、ハ、シ、ケ、ル、ヲ、御、乳、母、伊、藤、本、有、子、字、讃岐守重秀、如、白、本、作、重、範、八、坂、本、作、家、秀、御出家セサセ奉リ、具シ奉リテ、北國

へ落下リタリシヲ、木曾義仲、伊、藤、本、八、坂、本、云、主、ニ、シ、カ、木、曾、上、洛、ノ、時、具、シ、奉、リ、還、俗、セ、サ、セ、奉、リ、具、足、シ、奉、テ、都、へ、

上リタリケレハ、木曾カ宮トモ申、木、曾、云、々、又、還、俗、ノ、宮、共、申、ス、後、ニ、ハ、嵯、峨、ノ、邊、

野依、一本、作、野、ニ、オ、ハ、シ、ケ、レ、ハ、野、依、ノ、宮、共、申、キ、云、々、

按以仁王子、本書諸本各有異同系圖及諸記錄所載以仁王子一曰真性大僧正、號

書寫宮、又成興寺宮、成、興、或、作、常、天、臺、座、主、記、及、系、圖、為、藤、忠、成、女、所、生、系、圖、或、作、後、

忠女忠成妹所生、自齋齋天臺座主記云、建仁三年、任天臺座主、元久二年、辭退、寬喜

二年、寂、歲六十四云々、一曰道尊大僧正、東寺長者、東大寺別當、號安井宮系圖、為散

位藤信成女般富門院大輔所生、諸門跡譜為伊豫守平盛教女女三位局所生、二說

未知孰是東大寺別當次第及諸門跡譜東寺長者補任並云安貞二年八月五日寂年五十四諸門跡譜作五十五據此本書云道尊十八歲寂及別載安院宮僧正又爲一人者非也治承四年道尊當六七歲也一曰法圓權僧正系圖云圓滿院號櫻井一代要記云寺僧正平等院諸門跡譜云寺長吏號嵯峨僧正本書諸本稱木曾宮玉海稱北陸宮或加賀宮者蓋是耶然實錄無明文又按玉海文治元年十一月十四日條云傳聞三條宮息年來被坐北陸宮元年十九歲雖加一昨日入洛賴朝之沙汰云々三年二月十日條又載故三條宮子宮名道性入滅年十八本書云道尊十八寂者蓋以此訛矣其至女子者餘無所見

○是時平宗盛安徳天皇を奉して西海に走り京師主あきを以て法皇は立皇を議させ給ひしものあり

〔參考〕

〔玉葉〕四十 文治元年十一月十四日傳聞三條宮息年來被座北陸之宮生年十有名字一昨日入洛賴朝之沙汰云々

〔玉葉〕四十 文治三年二月十日傳聞故三條宮子宮名道性入滅八條院爲子生年十八究竟法器人云々自去年病惱遂以如此可惜々々

〔皇親系〕

以仁王

王子

父王薨後雜髮匿北國源義仲奉之養髮居越中國後入京師居嵯峨寬喜二年七月八日卒年六十六稱北陸宮

〔尊卑分脈〕

以仁王號高倉宮未立親王

僧眞性山大僧正座主號書寫宮又成興寺母民部大輔志成女

僧道尊仁東大僧長者法務安井

僧道圓寺前權僧正櫻井圓滿院

仁譽寺

是月平親長 越中守に任す

〔大日本史〕

三百八十四 越中守綱

平親長壽永二年八月任十一月罷三年三月又任文治元年十二月罷

後鳥羽天皇

文治元年乙巳 紀元千八百四十五年

八月 辛亥

十四日、甲源惟義、越中守に任す、

〔大日本史〕 三百八十四 國郡司、越中守欄

源惟義文治元年八月任、

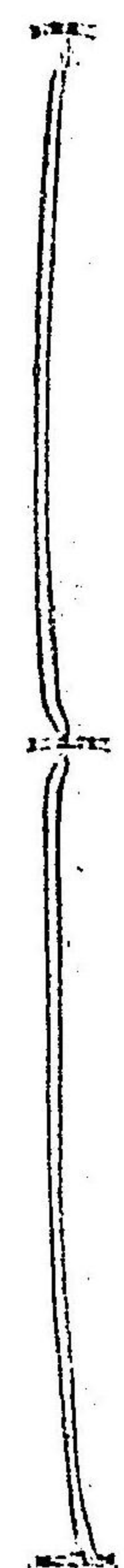
十二月 庚戌

廿七日、丙藤原家隆、越中守に任す、

〔吾妻鏡〕 五 文治元年十二月六日、乙卯、今度同意行家義經之侍臣、並北面輩事、

具達關東、仍可被申行罪科之由、雖交名於折紙、被遣帥中納言、其上、殊結排衆六人、可申請之旨、被觸仰北條殿侍從良成、少内記信康、伊豫守右筆、右馬權頭業忠、兵庫頭章綱、大夫判官知康、信盛、右衛門尉信實、時成等也、又右府有引級關東、依令露中丹被獻一通書云々、廣元、善心、俊兼、邦通等、沙汰此間事、院奏折紙狀云、

可有御沙汰事 ○中



一國々事

伊豫

右大臣御沙汰 輪月ノ殿

越前

内大臣御沙汰

石見

宗家卿可給也

越中

光隆卿同 ○中

頼朝欲申給其故者、云國司、云國人、同意行家義經謀叛、仍爲令尋沙汰其黨類、欲令知行國務也 ○中

十二月六日

頼朝在列

〔吾妻鏡〕 六 文治二年正月七日、丙戌、雨降北條殿、飛脚自京都參著、御使雜色鶴

二郎等、去冬十二月廿六日入洛、令申給之趣、同廿七日、有其沙汰解官配流等藏人

宮内權少輔親經宣下、別當家通、藤宰相雅長、書除目云々 ○下

越中守藤家隆 元侍從前中納言 略

〔公卿補任〕 藤家隆 治承四正廿八阿波介、壽永二正七從五上、文治元十二廿

九越中守、兼侍從、止平親季任之、前治部卿光隆卿給、建久四正廿九正五下、辭侍從

叙之、同九正卅遷上總介、○建保四年の條、四

文治二年丙午

四元千八百

六月

丁未

二十一日、丁賴朝、奏して山城及越中等三十七國の武士の濫妨を禁停せしめんことを請ふ、

〔吾妻鏡〕

六

六月廿一日丁卯、爲搜尋求行家義經隱居所之於畿内近國、被補守

護地頭之處、其輩寄事於兵糧、證責累日、萬民爲之含愁、訴諸國依此事令凋弊云々

仍雖可被待義經左右、有人愁歎、諸國守護武士並地頭等、早可偏止、但於近國沒官

跡者、不可然之由、二品被申京都、以帥中納言可奏聞之旨、被付御書於廷尉公朝歸

洛便宜、又因幡前司廣元爲使節所上洛也、爲天下澄清、被下院宣、糾斷非道、又可偏

止武士濫行國々事、

山城國	大和國	和泉國	河内國	攝津國	伊賀國
伊勢國	尾張國	近江國	美濃國	飛驒國	丹波國
丹後國	但馬國	因幡國	伯耆國	出雲國	石見國
播磨國	美作國	備前國	備後國	備中國	安藝國
周防國	長門國	紀伊國	若狹國	越前國	加賀國

能登國	越中國	淡路國	伊豫國	讃岐國	阿波國
土佐國					

右件卅七箇國々、被下院宣、糾定武士濫行方々之僻事、可被直非道於正理也、但鎮西九箇國者、帥中納言殿御沙汰也、然者爲件御進止、被鎮濫行、可被直僻事也、又於伊勢國者、住人挿鼻惡之心、已發謀反了、而件餘黨尙以逆心、不直候也、仍爲警衛其輩、令補其替之地頭候也、抑又國々守護武士、神社佛寺以下諸人領、不帶賴朝下文、無由緒、任自由押領之由、尤所驚思給候也、於今者、被下院宣於彼國々、被偏止武士濫行方々僻事、可被澄清天下候也、凡不限伊勢國、謀叛人居住國々、凶徒之所帶跡ニハ、所令補地頭候也、然者莊園者、本家領家所役、國術者、國役雜事、任先例、可令勤仕之由、所令下知候也、各悉此狀、公事爲先、令執行其職候、何事如之候乎、若其中、不用本家之事、不勤國術役、偏以令致不當候、隨被仰下候、可令加其誠候也、就中武士等之中ニハ、賴朝モ不給ソロモ、不知及候之所、或號人之寄附、或以無由緒之事、令押領所々其數多候之由、承候、尤被下院宣、先可被直、如此之僻事候也、又縱爲謀反人之所帶、令補地頭之條、雖有由緒、可偏止之由、於被仰下候所々者、隨仰可偏止候也、院宣爭違背候哉、以此趣可令奏達給之由、可令申帥中納

言殿也

文治二年六月廿一日

(源賴朝) 御判

十一月甲辰

二十五日、戊辰源義經の潜匿し僧徒の之に與みするものあるを以て、近江及び北陸道に宣して惡僧を逮へしめ、是日、又宣旨を畿内及び北陸道に下して、義經を逮捕せしむ、

〔吾妻鏡〕六 閏七月廿六日丁未、左典厩消息到來、就五郎九白狀、可召進同意于豫州山侶之趣、相觸山座主之處、彼輩逃亡之旨申之、而去十一日猶在山門歟之由、風聞之間、則奏聞子細、仍去十六日於大炊御門、仙洞有公卿僉議、山上並橫河末寺莊園、悉相觸之、不日搜尋、可召進其身之由、被仰座主、全玄、已下僧綱了、而稱彼逃脫輩之緣坐、召進三人之間、則被下使應訖此事、令差遣軍士於臺嶺之山、雖言上、無左右被遣勇士之條、偏可爲法滅之因、且可被仰子細於座主之由、諸卿一同被定申之趣、具被載之云々、又同十七日、院宣所到來也、

義行○義經逃隱叡山、有同意侶○僧徒之由、義行童稱申云々、仍被仰山門之處、伴交名之輩逃脫之由所申也、無左右遣武士被攻者、一山滅亡之基也、就中座主以下門徒僧綱等、旁廻秘計、又加祈請、可尋搜之由申請了、以此趣被尋仰人々之處、尤可然之由、一同被計申、伴緣坐、又兩三人擲進之間、給使應訖、其上近江國并北陸道等、定有所緣歟、殊可求索、得伴惡徒之輩、可被抽賞之由、所被下宣旨也、凡依義行一人、事都鄙未安堵、返返所歎思食也、不限今度、可尋之由、連々有御沙汰、此上何様○今、今有沙汰之由、可仰遣二位卿之由、院御氣色所候也、仍言上如件、

後七月十七日 左少辨定長

進上 帥中納言殿

十一月廿九日壬申、可搜求義行○義顯事、吉十八日、於院殿上有公卿僉議、如先度猶可被下宣旨於畿内北陸道、於京都者、仰使廳相分保々、可尋求之○下、

〔玉葉〕八四十 十一月廿四日丁卯、今日奈良僧正○信申狀等、仰親經了、

廿五日、戊辰僧正以圓長爲使、被示義行之間事、今日被下義顯追討事、上卿左大臣○宣旨脱之、

〔愚管抄〕五 同二年十一月廿六日○五に又九郎を可擲進之由宣下ありけり、あさましき次第とも也、

〔參考〕

〔吾妻鏡〕七 文治三年二月十日壬午、前伊豫守義顯日來隱住所々、度々遁追捕

後鳥羽天皇文治二年

使害訖遂經伊勢美濃等國赴奥州是依特陸奥守秀衡入道權勢也相具妻室男女皆假姿於山臥并兒童等云

三月八日庚戌南都周防得業聖弘依召參向爲豫州師檀之故也略○中今日二品有御對面直及御問答略○中爰豫州稱蒙關東譴責逐電之時以謂師檀之好來南都之間相構先遁一旦害退可被謝申于二品之由加諷詞相副下法師等送伊賀國華其後全不通音信略○下

〔平家物語天正〕十二 義經都落略○上大物ノ浦ヨリ船ニ乗テ下ラレケルカ折節西ノ風ハケシク吹住吉ノ浦ニ打アケラレテ吉野ノ奥ニ籠リケル吉野法師ニ責ラレテ奈良へ落ツ奈良法師ニ責ラレテ又都へ歸リ入り北國ニテ終ニ奥ヘソ下ラレケル略○下

〔平家物語秘聞〕十二 列官吉野軍 次乃年三○文治比春の比山伏修行者乃まねをし笈をりけ秀平入道抜頼之切北國ニ懸り奥州へそ下られらるとそ聞へし

〔保曆間記〕下 義經ハ吉野ノ奥又奈良邊忍テ有ケルカ入洛シ給ヒテ文治二三○年春ノ末ニ北陸道ニ懸テ奥州へ下向シテ秀衡ヲ頼テ明シ暮セシカ略○下

〔義經記〕七 あくれはくりから山を越てはせこえか谷を見給ひて是は平家

のおほくほろびし所にてあるあるにとてをのく阿彌陀經をよみ念佛申か
の亡魂をとふらひてぞ通られけりとかくし給ふ程に夕日にしにかゝりてた
そかれ時にもありければまつあかの八幡の御まへにして夜をあかし給ひけ
り夜も明ければ如意の城を舟にめしてわたりをせんとし給ふにわたしもり
をは平ごんのかみとぞ申けるかれが申けるはせばらく申へき事候是は越中
の守護近き所にて候へば兼て仰かうふりて候し間山臥五人三人はいふにお
よばせ十人にあらば所へ仔細を申さでわたしたらんはひが事ぞと仰付られ
て候まで十七八人御わたり候へばあやしく思ひ參らせ候守護へ其やうを
申候てわたし參らせんと申ければむさしはう是を開てねたげに思ひてや殿
さりとも北陸道にはくろのさぬき房を見しらぬ者やあるへきと申ければ中
のりに乗たるおとこ辨慶をつくくと見てげに見參らせたるやうに申
おとしも三おとしも上下向ことに御へいとて申くたし給りし御房やと申
ければ辨慶うれしさにめよくみられたりくとぞ申ける權のかみ申けるは
小さかしき男のいひやうかなみしり奉りたらばわおとこがはからひにわた
し奉れと申ければ辨慶これをききて抑々此あかにこそ九郎判官よと名をさ